

中学部の研究

IV 中学部研究

1 研究主題

確かな学力、コミュニケーション力定着のための授業づくり
～授業における基本的指導技術～

2 主題設定の理由

本校ではこれまでに、一貫性の在り方、基礎学力・応用力の向上、言語力・語彙力の向上にかかわる研究に取り組んできた。

本校中学部で各教師が実践している指導技術について状況把握を行うと、「発問・板書・ノート活用」に関する指導技術が多く活用されており、これらは学力向上や授業づくりに必要不可欠な基本的指導技術であると考えられる。既にさまざまな教育機関等で研究や実践等が進められているが、聴覚障害または知的障害等を併せ有する本校の生徒への指導の中では、更に具体的・効果的な研究・実践が必要であるという学部内での研究の意向が得られた。また、授業実践の際に「自己評価・課題検討シート」をはじめとしたPDCAサイクルを考慮した指導を行うことで、教師一人一人の指導技術の向上・改善や、より効果的な指導技術の実践について自らの課題や改善点が明確になったり、生徒の反応・理解に変化を感じたりできるという研究の意向も得られた。

これらのことから、教師間の互いの実践授業参観やグループ研究、授業研究等により、更に具体的な指導技術の研究・実践を行うとともに、各教科や学部間で共通して取り組める指導技術についての研究を行うことで、学力向上やコミュニケーション力向上へとつなげていきたいと考えた。

中学部では本校研究テーマ「確かな学力、コミュニケーション力定着のための授業づくり」を踏まえて、「授業における基本的指導技術」に焦点を当て、各教科等での授業における実践を基に、学力、コミュニケーション力の向上及び定着のための基本的な指導技術について研究を進めることとした。

3 研究方法

- (1) 各教科等の実践における具体的な指導技術及び効果・課題等の共通理解
- (2) 指導技術等についての自己評価及び課題の把握、実践目標の設定
- (3) 授業における指導技術の研究・実践及び改善・評価
- (4) PDCAサイクルに基づく授業づくり（実践及び相互授業参観による授業改善）
- (5) 発問・板書・ノート活用（ノート指導）に視点を当てた班別研究
- (6) 各教科や実態に応じて活用できる指導技術や配慮事項等の共通理解・まとめ

4 研究経過

年	月	研究内容
27 年 度	5～6	・研究テーマ及び研究計画等についての検討・確認
	7	・実践中の指導技術等についてのシート（アンケート）記入
	8	・実践中の指導技術等についての共有・確認・考察 ・具体的な研究日程及び内容等についての検討及び共通理解
	9	・指導技術の自己評価・課題検討・目標設定
	10～11	・指導法及び教材研究 ・授業の計画・実践及び振り返り（第1回・第2回）
	12	・授業実践のまとめ
	1～2	・実践結果・プロセス等の報告及びまとめ
	3	・今年度のまとめ及び来年度以降の研究内容の検討

28 年 度	5	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の研究の具体的な内容確認 ・PDCAシートの書式共通理解
	6～7	<ul style="list-style-type: none"> ・校内公開授業に向けた授業計画・教材研究 ・校内公開授業（各自での公開授業実践） ※授業計画・実践シート及び授業参観シート記入 ・校内公開授業及び授業参観後の授業改善検討
	8～9	<ul style="list-style-type: none"> ・各班研究及び研究授業についての共通理解 ・班別研究（発問班・板書班・ノート班） ※各班の研究内容に特化した授業の計画・実践・検討・改善
	10～12	<ul style="list-style-type: none"> ・班別研究授業，授業研究及び授業改善検討会
	1～2	<ul style="list-style-type: none"> ・班別研究のまとめ ・班別研究報告会及び意見交換 ・学部研究のまとめ
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度のまとめ及び来年度の研究内容の確認
29 年 度	5	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の研究計画と内容確認
	6～7	<ul style="list-style-type: none"> ・校内公開授業に向けた授業計画・教材研究 ・校内公開授業（各自での公開授業実践） ※授業計画・実践シート及び授業参観シート記入 ・校内公開授業及び授業参観後の授業改善検討 ・研究授業・授業研究（指導案検討含む） ・九聴研公開授業指導案検討(1) ・九聴研発表資料「中学部研究」検討(1)
	8～9	<ul style="list-style-type: none"> ・九聴研公開授業指導案検討(2) ・九聴研発表資料「中学部研究」検討(2)
	10	<ul style="list-style-type: none"> ・九聴研準備 ※学部発表関係，研究授業関係，リハーサル，資料作成等 ※会場関係，教室関係等， ・第22回九州地区聴覚障害教育研究大会(鹿児島大会)10/26～27
	11～12	<ul style="list-style-type: none"> ・九聴研のまとめ・反省
	1～2	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究のまとめ及び研究紀要の作成
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度のまとめ及び来年度以降の研究内容の検討

5 研究の実際

(1) 各教科等の実践における具体的な指導技術及び効果・課題等の共通理解

ア 各教科・各教師で実践している「指導技術・方法」「目的・意図」「生徒の様子・効果・課題」について具体的にシート記入することで、現在の自分の指導法についての振り返りや把握を行った。

イ シート記入された内容を基に以下の項目に分類し、他教科や各教師で実践している指導技術等を共有した（以下、表1を要約）。

	項目	主な指導技術等まとめ
A 発問（説明・指示・場面設定等含む）	①注視への意識付け ・取組	<ul style="list-style-type: none"> 生徒全員が注目しているかを確認してから発問や指示，説明をする。
	②生徒の思考を促す発問	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容や結論部分などを生徒自身が説明したり予測したりできるような発問や学習場面を多く設定する。 生徒自身の経験や学習内容を基にした感想等を発表できるような発問を取り入れる。
	③発問への理解を促す工夫・取組	<ul style="list-style-type: none"> 教材等を音読させ，読めない漢字や読み間違い，意味の分からない語句を確認する。 難読語句を指文字や板書で提示する。 難解語句について辞書や現物で確認したり，板書や手話で補足説明したりする。
B 板書（カード提示等含む）	①板書（チョークの使い方，字の書き方）	<ul style="list-style-type: none"> 色チョークで重要な語句やまとめ部分を書いたり，アンダーラインや囲み枠を付けたりして，学習のポイントを分かりやすくする。 筆順や終筆が分かるように，できるだけ大きく丁寧な字で板書する。
	②学習目標の提示	<ul style="list-style-type: none"> 学習目標を板書したりカードに書いて提示したりすることで，学習のねらいを明確にしたり，学習に見通しを持たせたりできるようにする。
	③カード・図の活用	<ul style="list-style-type: none"> よく使う語句や公式などはカードやポスターにまとめ，必要な時にすぐ提示したり確認したりできるようにする。 学習内容に合わせた図や写真，絵カード，動画などをあらかじめ用意しておき提示することで，板書時間の短縮や視覚的理解を図る。
	④黒板等のその他活用	<ul style="list-style-type: none"> 黒板に別枠を設け，キーワードや指示内容（ページ数や問番号）を明記する。 ミニホワイトボードを別に用意し，個別に説明したり，互いに発表したりする際に使用する。 プロジェクター投影やテレビに学習内容を映し，直接書き込んだり，段階的に表示したりする。

C ノート活用 (プリント・ワーク等含む)	①ノートの書き方指導	<ul style="list-style-type: none"> 1学期初めにノート等の使い方や板書に対応したペンの色分けなどを説明し、見やすく整理されたノート記入ができるようにする。 ノートを項目ごと(目標・板書内容・重要語句・本文など)に分けて書き込めるように指導し、復習の際に効果的に活用できるようにする。 授業中のノート記入の際、誤字・脱字、内容や文字の書き方等を確認する(机間指導を兼ねる)。
	②市販ワーク等の活用	<ul style="list-style-type: none"> 重要語句が穴埋め式になっていたり、写真や絵などの資料が併せて掲載されたりしている教科書対応ワークや県版ノートを活用する。 学習内容をまとめてあるワークシートを用い、板書やノート記入の時間短縮を図る。
	③自作ワークシート等の活用	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容や板書に合わせたワークシートを作成し、生徒自身で語句や文章を記入したり、まとめたりできるようにする。 学習に必要な語句や記号などをノート(ファイル)の1ページ目に貼り、いつでも確認できるようにする。 授業で取り組む問題文を小さなプリントで作成し、ノートに貼って書き込んだり、あとから見て分かりやすいようにしたりする。 新しい単元に入る前に、難解な語句や漢字の読みをプリントにまとめ、生徒自身で事前に調べたものをノートに貼付することで、学習への見通しや語句等の確認をしやすくする。 授業の最後に学習振り返りシートを記入し、感想や自己評価により生徒の理解度を把握し、次時に生かせるようにする。
D その他	①聴覚口話法の活用	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の方を向いて、ゆっくりと、はっきりとした発音や口形で話すようにする。 手話や指文字、文字表記を併用しながら発音や口形を意識して話すようにする。
	②授業への意識付け	<ul style="list-style-type: none"> ロッジャーシステムを使用して、音声をより聞き取りやすくする。 姿勢や発声に気を付けて挨拶することで、学習の始まりや終わりのけじめを付けられるようにする。 休み時間に教科書やノート等を開いたり、学習に必要な準備を自主的に行ったりして待つようにする。
	③学習内容定着のための取組	<ul style="list-style-type: none"> 新しい単元に入る前に、関連する既習内容のプリントを宿題として出し、実態や理解度を把握する。 次時の学習内容を事前に伝え、語句や内容について辞書やインターネットでの予習に取り組みさせる。 学習した内容をワークやプリントの宿題で出し、添削や説明書きを加えて返却する。必要に応じて、再提出や個別指導を行ったり、次時の学習で再度確認したりする。 前時までの学習内容を小テストにして理解度を確認する。

D その他	④ ICT機器の活用	<ul style="list-style-type: none"> デジタル教科書を使用する。 プレゼンソフトや電子黒板を利用して、動画や写真、内容に関する問題等を作成・提示し、生徒の興味・関心を引き出したり、学習内容を視覚的にイメージしたりしやすいようにする。 使用教材をプロジェクターやテレビに映し出し、指示に合わせて一斉音読させたり、該当部分や語句を指示しながら説明したりする。 前時の学習内容や発表内容が書かれた生徒のノートをタブレットで映し、内容の確認をする。
----------	------------	--

(2) 指導技術等についての自己評価及び課題の把握、実践目標の設定

各教科・各教師で実践している指導技術一覧(表1)及び各教育委員会等が発行している発問・板書・ノート指導に関する資料を参考に、「自己評価・課題検討シート」の記入を各自で行い、指導技術に関する不足項目や研究・実践が必要な項目を明確にし、具体的な目標や取組内容を設定した(表2)。

(表1)

(表2)

A:発問(説明・指示等含む)			自己評価・課題検討シート			
具体的な発問技術・方法	目的・意図	生徒の様子・効果・課題	評価項目	評価	備考	
<ul style="list-style-type: none"> 自分がこちらを注目してから説明をする。注目するまで待つ。 生徒が注目しているかを確認してから発問や指示をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 話を理解できるようにする。 話をしている人をよく見て発問をかける。 聞き流しや見逃しを減くため。 	<ul style="list-style-type: none"> 話をノートに書き写すときやプリント配付にかかると同時に発問をする。 話を聞いている生徒の表情や反応が分かるようにする。 発問が適切かどうかを確認する。 	① 生徒への発問・指示 ② 生徒の反応を促す発問 ③ 発問への理解を促す言葉・発問	3 3 3		
<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを説明するよう場面を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 説明するために、自分の考えを整理したり、相手の立場から話を組み立てたりできるように。 	<ul style="list-style-type: none"> ほとんどの場合は、みんなに説明することも多かったが、少しずつ慣れてきた。〇のたのしみ。という発問の方法も定着しつつある。自分で思いつかない言葉や発問からでも、互いを理解できる生徒が増えてきた。 	④ 発問(手紙への問いかけ、自分の意見) ⑤ 学習目標の設定 ⑥ カード・図の活用 ⑦ 発問時のその他活用	2 2 3 3	△ ○	レ
<ul style="list-style-type: none"> 自分の言葉で説明させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分で考えることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> よく考えながら自分の考えをまとめて伝えようとする。 	⑧ ノートの書き方 ⑨ 発問ワーク等の活用 ⑩ 発問ワークシート等の活用	3 2 4	○ ○ ○	レ
<ul style="list-style-type: none"> 「わかった?」と聞いて「わかった」と答えが返ってきても、「どうですか?」と説明を促すようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容が定着しているかを確認するため。 	<ul style="list-style-type: none"> 他の生徒と協力しながら、なんとか自分の言葉で説明しようとしている様子が見える。 	⑪ 授業目標の活用 ⑫ 授業への参画付け ⑬ 学習内容定着のための取組 ⑭ ICT機器の活用	3 3 3 3	○ ○ ○ ○	⑮ (Dその他)の項目は別途記入してください。
<ul style="list-style-type: none"> 生徒の発問に対して「なんで?」と聞き出す機会を多くとるようにしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分が発問した内容の理解をきちんと把握して論理的に答えられるようにするため。 	<ul style="list-style-type: none"> 発問を考えた中で、発問の字句の内容をノートを持って取り返さるよう促す様子が見られた。 	D:具体的な取組内容や目標を記入してください。			
<ul style="list-style-type: none"> 生徒自身で考えられるよう発問を多く取り入れている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒自身の発問が原因として考えられるようにするため。 	<ul style="list-style-type: none"> 考える時間が短くなったことで、発問からの質問が多くなったが、授業の感覚がやわらかくなった。 	⑯ 授業計画と目標やその意味・内容をカードに書いておき、発問に即答したり必要時にすぐ確認したりできるようにする。 ⑰ 「発問の目的」を「自分の考えを深めたい」として、発問の色を分け、生徒が判別しやすいようにしたり、中で分けて見やすいようにしたりする。 ⑱ 発問カードワークを活用し、発問の目的や内容に合わせて活用する。			
<ul style="list-style-type: none"> 発問の順序や使い方、学習内容などの確認のために、できるだけ「質問-知っている部分」を発問自身で発問・発問の確認・説明の順に行うようにしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の理解度の確認や、思考力・文力育成のため。 	<ul style="list-style-type: none"> 発問を深めながら、生徒の考えや発問のノートを整理しながら発問する姿が見られる。 発問がなかったり、発問の順序・説明が多くなったりと、授業の感覚がやわらかくなった。 				

(3) 授業における指導技術の計画・実践及び評価・改善(シート記入によるPDCAサイクルでの授業改善)

ア 「自己評価・課題検討シート」の実践目標を基に「授業計画・実践シート①」を記入し、必要な指導技術を取り入れた第1回目の実践授業に取り組んだ(表3)。

- イ 授業実践後「授業振り返りシート①」を記入し、取り入れた指導技術による成果や生徒の様子、また、うまくいかなかった事柄やその原因、対処法などを評価・分析した(表4)。
- ウ 第1回目の実践授業の評価・分析を踏まえ、改善点や追加事項を検討しながら「授業計画・実践シート②」を記入し、第2回目の実践授業に取り組んだ(表5)。
- エ 授業実践後「授業振り返りシート②」を記入し、取り入れた指導技術による成果や生徒の様子、また、うまくいかなかった事柄やその原因、対処法などを評価・分析した(表6)。
- オ 2回の計画・実践及び評価・改善を通じた授業実践を通して、以下のような成果が見られた(()内は表1・表2の項目を基にした実践目標番号)。
- ・ 文字情報と視覚情報で確認事項を提示し意識付けを行うことで、授業態度を改善することができた。(A-①)
 - ・ 多くの発表の機会を設けてきたことで、説明することに慣れてきた様子。今後も学習を重ねることで、より説明する力が付くのではないか。(A-②)
 - ・ 課題が早く済んだ生徒が友達に教えたり、説明したりすることで、全員の理解度が深まった。(A-②)
 - ・ 相手に伝わるように、言葉を選びながら説明しようとする姿が見られた。(A-②)
 - ・ 板書の仕方や掲示物の活用で、生徒の学習意欲が高まったり、理解度に変化があることを実感した。(B-①)
 - ・ 学習目標を明示してから学習に取り組むことで、本文を読み取る時の視点が絞られ、その後の発問に対する理解や気付きがスムーズだった。(B-②)
 - ・ 一緒に学習目標を読ませることで、読み方の確認、意味の捉え方の確認等を行え、生徒も見通しを持つことができた。(B-②)
 - ・ 提示した学習目標が授業中ずっと残っているので、確認が簡単に行えた。(B-②)
 - ・ 今までの学習の流れを板書にチャートで表すことで、復習や発問に対する答えがスムーズになった。(B-③)
 - ・ 教科書の内容記述に加えて絵や図を提示すると、生徒なりにイメージを持ち学習に取り組むことができた。(B-③)
 - ・ カードで提示すると、字が大きく見やすいことに加え、黒板に貼るだけでいいので板書の時間短縮になった。(B-③)
 - ・ 板書をノートに写している最中に見て回ることで、丁寧な字を書くことを意識する生徒がいた。(C-①)
 - ・ 穴埋めプリントを使って復習をしたあとに自分の言葉で内容を発表させるようにしたことで、自分の中で内容を整理している様子が見られた。(C-③)

(表3)

授業計画・実践シート①

1 実践授業日時
平成27年(11)月(26)日 第(4)校時

2 実践対象学級
中学部(3)年(1・2)組 (6)人

3 実践授業単元及び主な指導内容

単元名	
主な指導内容	

4 授業実践にあたって、他の先生方との協力や事前の確認が必要なこと
(例:特別教育用予定、パソコンケーブルの使用等)

特別教育用予定、パソコンケーブルの使用、タブレットの使用

5 授業に必要な生徒の準備物(例:教科書、ノート、資料のプリント、ワークブック、筆記用具等)

教科書、授業プリント、筆記用具、ワークブック

6 授業に必要な教師の準備物(例:教科書、資料用ノート、資料プリント(紙・本冊)、液晶プロジェクター等)

教科書、授業計画プリント、配布プリント、タブレット

7 自由記述欄(その他、気を付けることや発問計画、板書計画等にお使いください)

(表4)

実践授業振り返りシート①

1 実践授業日時
平成27年(11)月(26)日 第(4)校時

2 実践対象学級
中学部(3)年(1・2)組 (6)人

3 実践授業単元及び主な指導内容

単元名	
主な指導内容	

4 実践してみて、「計画通り!」「指導しやすかった!」「生徒の反応や理解が良かった!」など、成果として感じたことがあれば書いてください。

実践した指導技法	効果・生徒の様子など
○ チョークの使い方の指示力	チョークの色分けをすることで、たくさん板書しても、見やすく要点をすぐに見分けることができた。板み棒も活用することでより分かりやすく伝えるような気がした。
○ 市販ワークの活用	少しむねりがあり、難しい内容が多く、逆に驚かしている様子も見られた。

5 実践してみて、「予定通りしなかった!」「想定外の状況に!」「効果的に使えなかった!」「生徒の反応がイマイチ…」など、計画通りに行かなかったことがあれば書いてください。また、その原因と思われることと、その時(その場)の対応の方法があれば書いてください。

うまくいかなかった事柄	原因	対応の方法
○ 板み棒の活用	板書する位置により上手くまとめて書くことができなかった。	位置計画の時に、ぬれでしっかり分かるように、ポイントを書く位置を決めておく。
○ 市販ワークのレベルの調整	出版会社により難易度が異なり、基礎を固めたいとき使用しにくかった。	基本だけを抜き出し、プリントを作成する。

実践してみて気付いたこと・感想
1つの項目にしばって実践・研究してみると、色々見えていないことがあるということに気付いた。

(表5)

授業計画・実践シート②

1 実践授業日時
平成27年(12)月(8)日 第(4)校時

2 実践対象学級
中学部(3)年(1・2)組 (6)人

3 実践授業単元及び主な指導内容

単元名	
主な指導内容	

4 授業実践にあたって、他の先生方との協力や事前の確認が必要なこと
(例:特別教育用予定、パソコンケーブルの使用等)

特別教育用予定、タブレットの使用

5 授業に必要な生徒の準備物(例:教科書、ノート、資料のプリント、ワークブック、筆記用具等)

教科書、授業プリント、筆記用具、ワーク

6 授業に必要な教師の準備物(例:教科書、資料用ノート、資料プリント(紙・本冊)、液晶プロジェクター等)

教科書、授業計画プリント、配布用両面紙、タブレット

7 自由記述欄(その他、気を付けることや発問計画、板書計画等にお使いください)

○ 板書用両面紙を使用するため、板書とのバランスや板み棒などで使用する。

(表6)

実践授業振り返りシート②

1 実践授業日時
平成27年(12)月(8)日 第(4)校時

2 実践対象学級
中学部(3)年(1・2)組 (6)人

3 実践授業単元及び主な指導内容

単元名	
主な指導内容	

4 実践してみて、「計画通り!」「指導しやすかった!」「生徒の反応や理解が良かった!」など、成果として感じたことがあれば書いてください。

実践した指導技法	効果・生徒の様子など
○ チョークの使い方の指示力	チョークの色分けだけでなく、板書用両面紙を使用することで、時間の短縮につながり、生徒の興味を引いたりすることができた。板み棒も活用することで、板書がし易く、見やすくなった。
○ 市販ワークの活用	基礎の問題を中心に出題して活用することで、生徒の習手取組が速く、問題への取り組みが効果的になった。

5 実践してみて、「予定通りしなかった!」「想定外の状況に!」「効果的に使えなかった!」「生徒の反応がイマイチ…」など、計画通りに行かなかったことがあれば書いてください。また、その原因と思われることと、その時(その場)の対応の方法があれば書いてください。

うまくいかなかった事柄	原因	対応の方法

実践してみて気付いたこと・感想
板書の仕方の工夫や両面紙の活用で、生徒の学習への負担が減ったり、理解に差があることも変化した。板書に関する疑問、ノートも書く時間の取り方なども工夫して、より分かりやすい授業を計画したい。

(4) PDCAサイクルに基づく授業づくり (実践及び相互授業参観による授業改善)

ア PDCAシートを活用した授業計画及び実践, 評価, 改善

- (ア) 昨年度の研究で使用した「自己評価・課題検討シート」「授業計画・実践シート」「授業振り返りシート」を改善し、「授業計画・実践・評価シート」を検討・作成した。(表7)
- (イ) 6月に実施された校内授業参観期間中に, 各授業者で「授業計画・実践・評価シート」を時間毎に記入し, 中学部及び他学部の授業参観者に評価を記入してもらった。
- (ウ) 「授業計画・実践・評価シート」の他者評価及び自己評価を基に「授業改善シート」を記入し, 授業反省や発問・板書・ノートに関する今後の具体的な取組をまとめ, 次時の授業改善を行った。(表8, 表9)

(表7)

【授業計画・実践・評価シート】

日時	月 日 () 校時	教科	学級(生徒)
題材・単元			
本時のねらい			
教材・準備物	教科書 ノート ワークブック プリント 筆記用具 その他 ()		
指導技術項目	指導上の視点・留意点(例)	具体的取組(例)	評価
発問に関する 計画・取組	・理解しやすい言葉や表現での発問・説明となっているか。	・ロジャー・手話の併用 ・難解語句の確認	4 3 2 1
	・理解や思考を促すための発問が取り入れられているか。	・説明の前に自分で考えさせる発問を入れ答えさせる。	4 3 2 1
			4 3 2 1
板書に関する 計画・取組	・見やすく分かりやすい文字や構造で板書されているか。	・チョークの色分け, 線分け ・目標や語句カードの提示	4 3 2 1
	・学習目標や内容が把握しやすい板書になっているか。	・板書計画	4 3 2 1
			4 3 2 1
ノートに関する 計画・取組	・学習内容を適切に記録・確認できるものとなっているか。	・記述欄や間違いやすい文字の随時確認	4 3 2 1
	・理解や思考に活用できているか。	・ワークプリントの貼付 ・自分の考えを書く欄を設ける。	4 3 2 1
			4 3 2 1
自由記述欄 ・気付いたこと ・生徒の様子 ・授業の感想 など	(例) 考えさせるための質問を取り入れたが, 発問の意味を取り違えていたり, 教科書の言葉をそのまま答えたりしていた。発問内容や基本的事項の正確な伝え方や確認が必要だと感じた。		

イ PDCAシートの活用による授業改善の実際

(ア) 他者評価を踏まえた改善例

～ 重複障害学級Ⅳ課程，4人からの評価シートを受けて

【授業改善シート】

(表8)

授業実践や評価を通して学んだこと	
発問の計画・取組の評価で「2」が多くあったことから，生徒に対する発問に何らかの改善をしないといけないと思った。また，定規等の道具を使う時の注意点も挙げられていたので，授業で使用する道具の確認や使用法についても再度確認したい。	
↓	
今後の具体的な実践事項	
発問に関する 計画・取組	生徒が理解しやすいように，具体的な発問，例えば「例」を出して発問するなどの工夫をしていきたい。
板書に関する 計画・取組	黒板に直線を書くときは，必ず定規を使用するようにし，定規の正しい使い方も生徒に教えられるようにしたい。
ノートに関する 計画・取組	※ノートを使用しない活動なので記述なし (教材に直接絵や文字を書き込む学習活動)

(イ) 自己評価を踏まえた改善例

～ 標準学級Ⅱ課程，題材・目標が継続する複数回の授業を受けて

【授業改善シート】

(表9)

授業実践や評価を通して学んだこと	
○前回の授業を自己反省して以下の点について改善を図った。 ① 発問時，言葉の意味を確認しながら発問する。 ② 板書の文字の大きさを考える。 ③ 板書後すぐにノートチェックを行う。 ②③については実行できたが，①についてはまだまだ発問の仕方を工夫する必要があると思う。	
↓	
今後の具体的な実践事項	
発問に関する 計画・取組	難解な言葉については極力平易な言葉で質問したが，生徒が答えられない場面があった。言葉だけでなく発問内容自体が難しかったり，理解できなかったりすることも考えられるので，発問内容を更に考える必要がある。
板書に関する 計画・取組	文字を少し大きめにし，重要な項目は「黄色」，更に重要な項目は「黄色で書いた文字の周囲を赤で囲む」ようにする。
ノートに関する 計画・取組	今回と同様に，板書が終わったらノートのチェックを行い，誤字脱字等の訂正を行っていく。

ウ PDCAシートの活用により見えてきた課題や配慮事項

(ア) 発問に関する課題 ※「授業改善シート」の記述内容から要約・抜粋

- a 発問に手話や文字情報，詳しい説明を取り入れても，内容をイメージしたり理解したりしにくい生徒がいる（特に重複障害学級）。
- b 学習内容に関する語句の補足・説明の範囲や程度の判断が難しい（説明しすぎると思考過程の減少や低下につながる）。
- c 発問・説明を多くしすぎると学習内容が進まず，板書・ノート記入の時間が不足する。

(イ) 板書に関する課題 ※「授業改善シート」の記述内容から要約・抜粋

- a 学習内容の流れや語句の重要度が視覚的に理解しやすい板書の工夫（チョークの色分けや書式の統一）が必要である。
- b 実技を伴う学習や時数の限られた学習では，板書の時間確保やタイミングが難しい。

ア 発問班の研究 ～重複障害学級(Ⅲ・Ⅳ課程)の授業を通して

(7) 聴覚障害及び知的障害等を併せ有する生徒への発問を正確に伝えるための前段階的な配慮事項

- ・ 手話や口形を見せ、聞き逃しをしないように、注意を集めてから発問する。
- ・ 座席は馬蹄形に配置し、授業者が無理なく視界に入るようにする。
- ・ 発問にある言葉の理解のため、写真カードや名前を表示する。
- ・ イメージが持ちやすいように、できるだけ生活に即した具体物を活用する。
- ・ 実際に持ったり測ったりすることができるように、実物を準備する。
- ・ 予想～実測～発表までをワークシート1枚で確認できるようにする。

これらを充実させることで、問題解決以外の場面でのつまづきを軽減し、集中して学習に取り組むことができ、発問の意図や意味をより捉えやすくすることができる。

(1) 発問についてのまとめ

a 発問の役割

- ・ 指示…活動を促す。
- ・ 説明…理解を助ける。
- ・ 助言…つまづきを解消する。
- ・ 評価…意欲を高める。

バランスよく、最も効果的なタイミングで発することが大切

b 発問の多い授業のメリットとデメリット

(a) メリット

- ・ 話し合いが活発
- ・ 指導内容が豊富
- ・ 活動が充実

(b) デメリット

- ・ 進みが遅く、学習内容が定着しない。
- ・ 子どもの興味・関心はわからない。
- ・ 子どもの自主性が育たない。

生徒の反応を促し、思考を深めるために、教材の特性と子どもの実態をつかんだ発問を精選することが大切

(2) 研究授業による実践

a 教科及び単元名：数学「測る」

授業対象者：重複障害学級生徒 5人(Ⅲ課程1人、Ⅳ課程4人)

b 研究のねらい

生徒が自ら考えて活動し、興味・関心を高めて、目標の達成につなげられるような発問の在り方について研究する。実態に応じて、より具体的で分かりやすく表現したり、選択肢を入れたりすることで、発問によって気づきを促したり、考えを深めたりすることができるようにする。さらに、つまづきのある生徒には、表や図などを用いて視覚的に理解できるようにする。(指導案「指導及び支援に当たって」より抜粋)

c 具体的な発問例

(a) 思考を深める発問

- ・ 今までに学習(経験)したことで、活用できることはありませんか。
- ・ なぜ～なのでしょう。
- ・ もっと良い方法はありませんか。

(b) 練習や応用・発展を促す発問

- ・ 前時は、どんな課題に取り組みましたか。
- ・ どのようにして解決しましたか。
- ・ ～と～をまとめるとどうなりますか。
- ・ 今日の学習で分かったことは何ですか。

(c) 興味・関心を引き出す発問

- ・ ～の点から考えるとどうですか。
- ・ ～と～を比べて考えるとどうですか。
- ・ 日常生活に使いそうだと思ったことはありませんか。
- ・ もっと調べてみたいと思ったことはありませんか。

(エ) 授業後の検討・反省

- ・ 助言的な発問はもっと大きめにしたり、子どもたちの気付きを促すような言葉掛けをしたりすると授業に盛り上がりが出てくる。
- ・ 教材に視覚的なものが多く、それに集中していた様子もあった。発問の前に教材で具体的に示して、発問の指示が通りやすいようにする必要がある。
- ・ 発問の発し方（声のトーンや表情）、場の状況（興味がほかに向いていないか）にも留意する必要がある。

イ 板書班の研究～実技を伴う教科の授業を通して

(7) 一般的な板書の意義と役割

a 板書の意義

- ・ 学習内容の要点を提示するもの
- ・ 学習内容の省略・精選したもの
- ・ 学習内容を重点化したもの
（記号や図形などでの図式化）
- ・ 学習内容を継続的に提示したもの

- ・ 生徒の思考を助ける。
- ・ 授業の流れが分かり、振り返りがしやすくなる。
- ・ ノートがまとめやすくなる。

b 板書のポイント

- ・ 「めあて」が明示してある。
- ・ 授業の全体像と流れが視覚的に把握できる。
- ・ 何を学習しているのか明確となっている。
- ・ 適時確認でき、振り返りができる。

- ・ 途中でできるだけ消さない。
- ・ 「めあて」や重要な文章は必ず残す。
- ・ 消す必要がある場合には、半分ずつ区切る。

(イ) 実技を伴う教科における板書の在り方

a 現状や課題

- ・ 学習内容の継続的提示（板書）は少ない。
- ・ 実技を伴う学習や時数の限られた学習では板書の時間確保やタイミングが難しい。

b 考えられる理由

- ・ 実習や運動等の時間を確保するため、板書に使える時間が限られてしまう。
- ・ 実際に実演しながらの授業展開の方がイメージがしやすかったり、理解を促しやすかったりする。

c 考えられる工夫

- (a) 単元名や「めあて」「流れ」「作業手順」「まとめ」等は板書できる。
- (b) 説明に合ったイラストや写真の提示でイメージしやすくする。
- (c) 生徒の発言や考えをまとめたり、反映したりできるようにする。
- (d) 板書する項目をパターン化し、見通しや考えを持たせやすくする。

(ウ) 研究授業による実践

a 教科及び単元名：保健「健康な生活と病気の予防」

授業対象者：3年生標準学級生徒 2人（Ⅰ課程1人，Ⅱ課程1人）

b 研究のねらい

授業の中では生徒たちにとってあまり馴染みのない語句が含まれており，それらの語句の意味をしっかりと伝えていきたい。そのために板書を中心に手話，ロジャーシステムの活用，電子黒板を使用したパワーポイントやライブトークによる視覚的情報の提供を行い，生徒に正確な情報を伝えることで，効果的・効率的な板書のあり方について考えることができるようにする。（指導案「指導及び支援に当たって」より抜粋）

c 板書の具体的な観点

(a) 板書の工夫

- ・ 「課題」「めあて」が簡潔・明快に示されている。
- ・ イラストを用いてイメージしやすくしている。
- ・ 作業の手順，留意点やポイントの提示をしている。
- ・ 必要に応じて，適時，確認ができるようにしている。

(b) 表札やマークの活用

- ・ 「めあて」を枠で囲み強調している。
- ・ 「課題」の表札を使用し，多様な情報の提示をしている。
- ・ 内容ごとに表札が使われ，“全体と今”が把握できるようにしている。
- ・ 教科書マークや注意を促すマークなどを有効的に活用している。

(c) チョークの色分け

- ・ 識別しやすい配色で構成してある（基本は白，重要語句は黄色）。
- ・ 色以外の情報も加えている（アンダーラインや囲み枠など）。

(d) ホワイトボードや小黒板の活用

- ・ 板書に関連した語句や補足事項等の記述や説明に活用している。

(e) メディアの活用

- ・ プロジェクターやパソコン，VTR等のICT機器を活用している。
- ・ 視覚的に訴える教材・教具で情報が分かりやすく提供されている。

(エ) 授業後の検討・反省

- ・ めあてをいつでも確認できるようにスライドや黒板に明示してあった。
- ・ 板書に代わるパワーポイントや電子黒板等を活用して，限られた時間内に学習を進める工夫がされていた。
- ・ 大切な部分（言葉）が一目で分かるような工夫が必要である。
- ・ 「残す板書」の観点で考えると，パワーポイントで学習内容を残すのは難しい。機器類と板書のバランスを考える必要がある。

ウ ノート班の研究～標準学級（Ⅰ課程）の1単元におけるノート活用を通して

(ア) ノート指導の主な機能・意義

a 板書内容を書き写すこと（視写）による基本的な学習能力の育成

- ・ 板書内容を正確に読み取る。 → 集中力や記憶力の育成
- ・ 正確かつ丁寧に書き写す。 → 文字の記憶や筆記能力の向上
- ・ 記述の際に暗唱や復唱をする。 → 語句や文章表現の記憶
- ・ 記述内容を確認・点検する。 → 自己省察力の育成

b ノートの基本的な書き方や整理の仕方などを身に付けることによる表記・表現力の育成や学習内容の明確化

- ・ 記入項目や書き方などの基本的事項を確認する。
- ・ 日付や単元名，教科書のページ番号を記録する。
- ・ 板書にリンクした項目分けやレイアウト，マークや記号，色分け，下線，矢印などを取り入れる。
- ・ 板書以外の発問や語句の説明，補足事項等の記入欄を作成する。

表記方法の獲得・共通理解

学習した時期や内容の明確化

学習内容の整理や思考過程の明確化・構造化

思考力・表現力への発展

(イ) ノート活用についてのまとめ

a ノートを活用についてのまとめ

- ・ 計算や漢字の練習，練習問題等をする。
- ・ 学習内容の予習や復習をする。
- ・ 自分の考えをまとめ，表記する。
- ・ 学習内容の点検や評価をする。

・ 主体的な学習への取組
・ 学習内容の定着
・ 思考力・表現力の向上

b ワークブック・ワークシートの活用についてのまとめ

(a) メリット

- ・ イラストや資料が豊富で，学習意欲を高めることができる。
- ・ 学習内容や重要な語句をあらかじめまとめたり，提示したりすることができ，ノート記入の時間短縮や授業の効率化を図ることができる。
- ・ 生徒の実態に対応させた効果的な学習ができる。

(b) デメリット

- ・ 思考や表記・表現力獲得の機会が減少する。
- ・ 内容があらかじめまとめてあるため，調べ学習や表現活動などの主体的な学習内容が減少するおそれがある。
- ・ 授業展開が単調になりやすく，生徒自身が受け身の姿勢で授業に臨むようになってしまうおそれがある（特に穴埋め式）。

(ウ) 1単元(全4時間)の授業を通じた実践

a 教科及び単元名：国語「論語」(全4時間・古典漢文)

授業対象者：3年生標準学級生徒 1人(I課程)

b 研究のねらい

1年次，2年次での学習内容の応用・発展にあたる本単元の学習では，まず単元に関わる基本的事項を確実に理解し，それを基に自ら考え表現活動を行うことが目標である。全4時間の指導を通して，発問や板書と連動させながら，学習内容や思考過程を明確にするノート指導や，思考力や表現力の育成につながるノートやワークシート等の活用に視点を当てて研究を進めた。

c 具体的な学習活動と指導・支援計画 ※【】内はノート等を活用する場面

時	主な学習活動	指導と支援【発問・板書・ノート等活用】
1	<p>○学習の見通しを持つ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科書教材の冒頭部を音読する。 漢文に関する既習内容を確認する。 ワークシートで確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 論語・孔子について説明する。 【教科書, 関連図書, 板書用語句カード】 重要語句や基本文を提示し, 既習内容を想起できるようにする。 【プロジェクター, 板書用語句カード】 漢文に関する確認事項を板書し, ノートに記録させる。 【板書→ノート(記入)】 【ワークシート(練習問題)】
2	<p>○漢文のきまりに気を付けて訓読文を書き下し文に直し, 音読する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 訓読文を書き下し文に直す。 書き下し文→訓読文の順に繰り返し音読する。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時のノート, ワークシートを確認し, 間違っているところや気を付ける部分を説明する。 【プロジェクター, ノート(確認), ワークシート(確認)】 訓読文の助詞や置き字などは色別印を付けて示す。 【訓読文プリント, 板書→ノート(記入)】 訓読文を読む際, 書き下し文は同時に提示しないようにする。 【プロジェクター】
3	<p>○書き下し文を現代語訳に直し, 文意を捉える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 文中の語句の意味を調べたり考えたりする。 漢文を現代語訳する。 自分の現代語訳と例訳を比べ, 修正や補足をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の注釈にない語句の意味を確認し, 調べてノートに記入させる。 【プロジェクター, 辞書, ノート(記入)】 現代語訳の記入の仕方は前単元の古文学習に倣って書くように促す。 【ノート(確認・記入)】 現代語訳の資料プリントを用意する。 【例訳プリント, ノート(確認・記入)】
4	<p>○「論語」から言葉を選び, 自分が感じたことや思ったことを文章で表現する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 自分が共感した言葉や感銘を受けた言葉を2~3文選ばせる。 【教科書, ワークブック, ノート(確認)】 最初は書き方や構成を示したワークシートを使い, その後は作文用紙に書くようにさせる。 【ワークシート(記入), 作文用紙】

(エ) 授業後の検討・反省

- 発問・板書・ノートを連動させながら指導することで, 授業展開や授業中, 授業後の確認等がスムーズに行えた。
- 板書をノートへ書き写す時の様子や記述式のワークシートへの記入状況を見て, 生徒の理解度や学習活動に対する評価を行うことができた。
- ノート記入を行いながら生徒自身で考えを整理し, 表現活動等に生かしている様子が見られた。

- ・ 以前取り組んだ類似の学習活動でのノート記入方法を覚えており、自分で工夫しながらノートに記入している様子が見られた。
 - ・ ノートに記入した内容を予習や復習の課題と関連させることで、家庭学習や自主的な学習につなげることができた。
 - ・ 苦手とする学習活動では、最初にワークシートを併用したり、それらを確認したりしてから活動を行うことで、スムーズに取り組むことができていた。
- (6) 各教科や実態に応じて活用できる指導技術や配慮事項等の共通理解・まとめ
- ア PDCAサイクルに基づく授業づくりの中で「授業計画・実践・評価・改善シート」を使用し、校内授業参観等で他者評価を得て授業改善につなげていった。
- イ 発問・板書・ノート活用に視点を当てた班別研究の内容を教師間で共有し、授業実践に取り入れていった。

6 成果と課題

PDCAサイクルに基づいて作成した「授業計画・実践・評価・改善シート」を活用することで、教師が1単位時間ごとの指導内容の焦点化、効果的な指導技術の取り入れ方などを確認しながら授業の準備、実践をすることができた。また、校内授業参観等での他者評価を活用することにより自身の課題に気づき、改善点を明確にすることができた。

「発問・板書・ノート活用」に関する具体的な指導技術の研究を班別に行い、教師間で共有し実践につなげることができた。各教科や生徒の実態によって活用する指導技術に偏りや配慮事項の違いがあることも明確になってきた。さらに、それらに視点を当てて班別で研究を深めることにより、生徒の実態を考慮した各指導技術の活用が生徒の興味関心を引き出したり、思考力や表現力を高めたりすることも実践の中で確認することができた。しかし、各教科や生徒の実態に応じた各指導技術の効果的な活用や、限られた時間の中でいかに効果的・効率的に授業や授業準備を進めて学習内容の定着を図るかという課題は残されており、今後も更なる指導技術の向上に向けて研究・実践を積み重ね、確かな学力やコミュニケーション力につながる指導に取り組んでいきたい。

〈参考資料〉

- ・ 千葉県教育庁南房総教育事務所発行
「～活用する力を高める～セルフチェックシート」
- ・ 山口県教育委員会
「授業づくりと評価の手引き 基礎編 改訂版」
- ・ 栃木県芳賀教育事務所HP
「Q&A」
- ・ 文部科学省HP
「CLARINETへようこそ」
- ・ 鹿児島県総合教育センター プロジェクト研究（平成26年度）
「授業力を高める校内研修の進め方」
- ・ 名古屋市教育センター 研修部 第1研究室
「自ら授業力を高める 校内研修マニュアル」

高等部の研究

V 高等部研究

1 研究主題

確かな学力、コミュニケーション力定着のための授業づくり
～教科の特性に応じた指導・支援方法の工夫～

2 主題設定の理由

高等部卒業後の就労をはじめとする社会生活においては、学力とコミュニケーション力の定着が求められており、教科の特性に応じた指導・支援方法の工夫による確かな学力（知識・理解）とコミュニケーション力（表現）の向上を目指す取組が必要である。また、社会生活に必要な学力とコミュニケーション力の向上のためには、学力要素等の観点から論理的思考力（思考・判断）の養成も重要であり、併せて取り組む必要があると考えられる。

そこで、平成27年度から研究の具体策として、「評価規準」と「判断基準」の設定を通じた、確かな学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上に資する言語活動の充実（授業実践）に各教科・科目で取り組んできた。

※ 判断基準とは

「評価規準」による評価の4観点のうち、言語活動の観点である「思考・判断・表現」を評価するための基準となるものであるとともに、授業に言語活動を取り入れ、充実させるために、鹿児島県総合教育センターが提唱している考え方。

「評価規準」、「判断基準」ともに、本校の生徒の実態に合わせた独自の設定と運用が求められる。「判断基準」を用いた授業を行うには、目標や「評価規準」を基に、「思考・判断・表現」を文章で答えることを伴う課題と、「思考・判断・表現」の「評価規準」から導き出される「判断の要素」から考えられる、「判断基準B」（おおむね満足できる状況・B状況）を設定する。その際、B状況を基点に、努力を要する状況（C状況）をB状況に引き上げるための「補充指導の手立て」、B状況が達成できた場合のより高いレベル（A状況）を目指す「深化指導の手立て」も準備する。

P3～4「5 研究の実際（1）のイ（ア）研究についての共通理解」も参照

3 研究方法

- (1) 「評価規準」、「判断基準」と研究についての共通理解
- (2) 評価規準を設定した「指導と評価の年間計画」と「指導と評価の単元計画」の検討と作成
- (3) 指導と評価の単元計画を基に、「判断基準」を設定した授業実践（評価授業）
※ 基本書式等は係で提示するが、教科・科目の特性に応じて柔軟に設定可

(4) 研究の流れについて

平成27年度「理論研究・研究についての共通理解」

→ 第1学年分の指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の作成及び授業実践
講義形態(座学)授業を中心に研究



平成28年度「授業実践による研究についての共通理解と検証」

→ 第2学年分の指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の作成及び授業実践
実技形態授業における実践の在り方や応用も研究



平成29年度「研究の汎用化(日常化)・研究のまとめ」

→ 第3学年分の指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の作成
日常授業における授業実践及び, 可能な教科において「文章の読解・整理・表現」,
「論理的思考」を定着させるためのパターン化についても研究

(5) 対象生徒 標準学級生徒(準ずる教育を行う課程)

4 研究経過

(1) 平成27年度

5～9月: 「評価規準」, 「判断基準」と研究についての共通理解

9～12月: 第1学年の「評価規準」を設定した「指導と評価の年間計画」と
「指導と評価の単元計画」の作成

11～1月: 第1学年の単元計画を基に「判断基準」を設定した授業実践(評価授業)

1～3月: 評価授業及び指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の評価

(2) 平成28年度

4～5月: 今年度の研究についての共通理解・確認

5～6月: 「評価規準」, 「判断基準」の妥当性の検証, 評価の方法や仕方, 評価対
象の工夫について各科・教科で検討

6～12月: 第2学年の「評価規準」を設定した「指導と評価の年間計画」と
「指導と評価の単元計画」の作成

7～1月: 第2学年の単元計画を基に「判断基準」を設定した授業実践(評価授業)

1～3月: 評価授業及び指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の評価

(3) 平成29年度

4～5月: 今年度の研究についての共通理解・確認

5～6月: 第3学年の「評価規準」を設定した「指導と評価の年間計画」と
「指導と評価の単元計画」を作成

6～7月: 第2学年の単元計画を基に「判断基準」を設定した授業実践(評価授業)

・ 評価授業及び指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の評価と改善

・ 第1学年分と第2学年分の指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の
見直し(評価授業) ※ 可能な教科

7月中: 第3学年分の指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」, 評価授業の評価提出

※ 可能な教科は, 第1学年分と第2学年分の指導と評価の「年間計画」,
「単元計画」の見直しに係る評価授業の評価提出

夏季休業中： 九聴研に向けて研究のまとめ

9～11月： 第1学年分と第2学年分の指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の見直し(評価授業)

10月26日： 九聴研で指定授業・公開授業

12月末まで： 第1学年分と第2学年分の指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の見直しに係る評価授業の評価提出

3学期中： 研究紀要作成

5 研究の実際

(1) 平成27年度の取組 (【Plan】→【Do】→【Check】→【Action】)

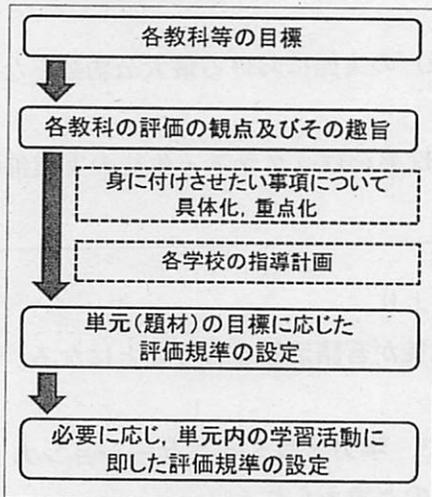
ア 研究の取組(計画)

- ・ 「評価規準」, 「判断基準」と研究についての共通理解【P】 5～9月
- ・ 第1学年の「評価規準」を設定した「指導と評価の年間計画」と「指導と評価の単元計画」の作成【D1】 9～12月
- ・ 第1学年の「単元計画」を基に「判断基準」を設定した授業実践(評価授業)【D2】 11～1月
- ・ 評価授業及び指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の評価【C】 1～3月
- ・ 平成27年度の評価や課題等を基にした平成28年度の取組【A】 28年4月～

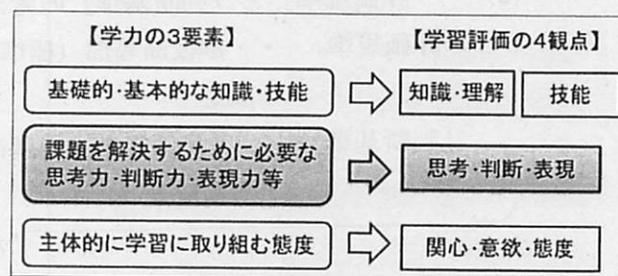
イ 平成27年度研究の実際

(ア) 研究についての共通理解

a 評価規準とは



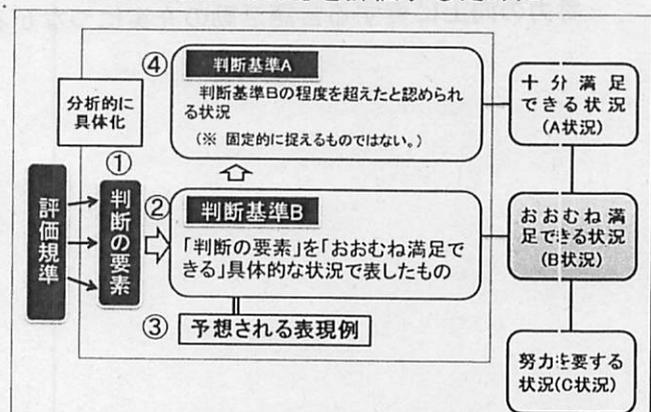
b 学力の要素とは



→ 「思考・判断・表現」を評価することは難しい

c 判断基準とは

「思考・判断・表現」を評価するために・・・



※ a～cの図表は,

鹿児島県総合教育センターHPより

d 研究の基本的な考え方

- (a) 「評価規準」を設定することが目的ではなく、評価の4観点のうちの「思考・判断・表現」を評価する「判断基準」を設定した授業を実践することが目的。
→ あらかじめ「評価規準」を設定しなければ、「思考・判断・表現」を評価できない。しかし、「評価規準」を設定しただけでは、「思考・判断・表現」を評価することは難しい。
- (b) 授業時の「思考・判断・表現」を評価するための発問や課題に対する解答を評価する基準となるものが「判断基準」。
→ 「思考・判断・表現」を評価するには、文章で解答することを伴う発問や課題に取り組みさせることが必要。
- (c) 授業者はあらかじめ、「思考・判断・表現」を評価するための要素「判断の要素」から考えられる「判断基準B」（おおむね満足できる状況・B状況）や予想される生徒の表現例を用意して指導（発問や課題設定）を行う。
→ 「判断の要素」や「判断基準B」を意識しながら、時間毎や単元毎に知識・理解面や技能面などの構成や時間配分を考えて授業を設計することが必要。
- (d) 発問や課題に対し、「判断基準B」で評価できるレベルに到達できなかった場合「努力を要する状況・C状況」の補充指導と、B状況に到達した場合のより高いレベル「十分満足できる状況・A状況」を目指す深化指導の手立てを用意して指導を行う。
→ 学力等の差のある集団で一斉授業を行う際には、補充指導と深化指導の手立てや内容の工夫が重要になる。実態差の大きい集団では、生徒毎の「判断基準」を設定してもよい。
- (e) 「評価規準」と「判断基準」の考え方
「評価規準」・・・本校高等部（標準学級）の実態における最大公約数となるように設定
「判断基準」・・・「評価規準」を基に、授業を行うクラス・生徒の実態毎に設定してもよい

(a) ~ (e) より

「判断基準」を設定した授業では、必然的に生徒が言語活動を行うことになる。



「判断基準」を設定した授業を実践することで、学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上に資する言語活動の充実につながるものと考えられる。

(イ) 指導と評価の「年間計画」、「単元計画」について (係で作成し学部で共通理解)

a 「指導と評価の年間計画」の書式

平成28年度指導と評価の年間計画 (基本書式)									
教科					学年				
科目					学科				
教科書					単位数				
目標									
評価規準	1 関心・意欲・態度	2 思考・判断・表現	3 技能	4 知識・理解					
月	単元名	学習内容	予定時間	主な学習活動と評価のポイント	評価の観点				評価方法 【関連項目】
					1	2	3	4	

b 「指導と評価の単元計画」の書式

【科目名】指導と評価の単元計画 (基本書式)							
1 単元名:							
2 単元の目標:							
3 単元の評価規準							
関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解				
4 指導と評価の計画 (○時間) ※4時間の例							
次 程	(小単元名) 学習活動	評価の観点				評価規準等	評価方法等
		関	思	技	知		
第1次 ○時間		●					
				●			

c 指導と評価の「年間計画」、「単元計画」の作成について

教科・科目の目標等から考えられる全単元を通じた「評価規準」

科目の「評価規準」を基にした単元の「評価規準」
単元計画作成の重要ポイント！

平成28年度指導と評価の年間計画（基本書式）

教科	工業	学年	1学年		
科目	機械工作	学科	産業工学科		
教科書	〇〇社 あたらしい機械工作	単位数	2単位		
目標	機械工作に関する知識と技術を習得させ、実際に活用する能力と態度を育てる。				
評価規準	1 関心・意欲・態度	2 思考・判断・表現	3 技能		
月	単元名	学習内容	主な学習活動と評価のポイント	評価の観点	評価方法等
	第3章	鋳造法と鋳型	鋳造について関心をもち、主体的に取り組もうとしている。	1 2 3 4	ワークシート
	第4章	鋳造	鋳造の基本的な工法の原理と方法について、大仏の制作を例に理解する。		ワークシート、ノート
			グループによる共同作業により考えをまとめる。		行動規範、ワークシート
			砂型鋳造法について、しくみと特徴について理解する。		ワークシート、ノート

観点の項目は、教科・科目の特性に応じて設定可！

【機械工作】指導と評価の単元計画（基本書式）

- 単元名：第3章 鋳造
- 単元の目標：各種の鋳造法の原理と方法を理解し、実際に活用できる技術を習得する。
- 単元の評価規準

1 関心・意欲・態度	2 思考・判断・表現	3 技能	4 知識・理解
鋳造における主な工法の特徴や鋳造の原理や方法に関心をもち、鋳造により鋳物製造について主体的に探究しようとする。	鋳造における主な工法に関する思考を促し、基礎的・基本的な知識と技術を基に、鋳造加工を適切に判断し、実践している。	鋳造における主な工法に関する基礎的・基本的な技術や安全や品質管理について理解しているとともに、鋳造の製作過程を通して鋳造や金属の性質、おぼについて理解している。	鋳造における主な工法の特徴や鋳造の原理や方法について理解しているとともに、鋳造の製作過程を通して鋳造や金属の性質、おぼについて理解している。
- 指導と評価の計画（全5次・9時間）

次 程	学習内容・活動	評価の観点				評価規準等	評価方法等
		1	2	3	4		
第1次	鋳造法と鋳型の概要	○	○	○	○	鋳造について関心をもち、主体的に取り組もうとしている。	ワークシート
1	砂型鋳造法	○	○	○	○		鋳造の基本的な工法の原理と方法について、大仏の制作を例に理解する。
2	原理	○	○	○	○	大仏の制作から、鋳造による金属の加工についてグループで考え、発表できる。	
時間	グループによる共同作業	○	○	○	○		砂型鋳造法について、しくみと特徴をワークシートにまとめる。
	砂型鋳造法のしくみと特徴	○	○	○	○	ワークシート、ノート、ホチキス	

対応

概ね対応

（小単元における）主な学習活動と評価の大まかなポイント（評価規準）をあわせたもの

評価規準や方法をより具体化

d 作成した「指導と評価の年間計画」の例 英語

平成28年度指導と評価の年間計画									
教科	外国語	学年	1年						
科目	コミュニケーション英語1	学科	芸術科・産業工芸科・理容科						
教科書	基礎 (A) English Communication 1	単位数	2						
<p>目標 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う。</p>									
評価	1 コミュニケーションへの関心・意欲・態度	2 外国語理解の能力	3 外国語読解の能力	4 言語や文化についての知識・理解					
進捗	コミュニケーションに関心をもち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。	英語で話したり書いたりして、情報や考えなどを適切に伝えている。	英語を聞いたり読んだりして、情報や考えなどを的確に理解している。	英語やその運用についての知識を身に付けているとともに、言語の背景にある文化などを理解している。					
月	単元名	学習内容	予定時間	主要学習活動と評価のポイント	評価の観点				評価方法
					1	2	3	4	【関連項目】
4月	Get Ready!	・ 初級英語の基礎知識(アルファベット、ローマ字等) ・ 簡単な英語での自己紹介 ・ クラスルームイングリッシュ ・ 英語の発音と発音で表記された日本語の発音との違い。	4	・ 中学で習った英語の基礎の復習・確認を行い、高校における英語学習の準備をする。 ・ 挨拶や自己紹介を通して、英語でのコミュニケーションの成しさを学ぶ。 ・ ものの名前など、日常生活において身近な英語について理解する。	○	○	○	○	ノート 発表 受け答え
5月	のちのちの英文法	・ 文法・動詞・目的語・形容詞・副詞・前置詞	8	・ 英文法を構成する様々な語について理解する。	○	○	○	○	ノート
5月	Lesson 1 A White Land	・ 3V(主語、動詞) ・ 動詞(be動詞、一般動詞)を用いた肯定文と否定文	10	・ 南極大陸についての英文を読み、ペンギンや極地の人達にとって南極がどのような役割を果たしている場所なのかを捉え理解する。 ・ be動詞と一般動詞の違いを分けて書き、話す。	○	○	○	○	ノート 発音 一問一答
6月	1学期の復習	・ be動詞、一般動詞を用いた英文文と自己表現 ・ 相手について理解する。	4	・ 1文以上の自己紹介文を書き、話す。 ・ 相手の自己紹介を聞いた後、読んだりして理解する。	○	○	○	○	ノート 発表 ALTとのやりとり 期末考査
9月	Lesson 2 Skating in Dances	・ 動詞(be動詞、一般動詞)を用いた肯定文、否定文。 ・ 現在進行形	12	・ アラブ首長国連邦の首都ドバイについての英文を読み、ドバイの地理や名所についての情報を理解する。 ・ 一般動詞の肯定文、否定文、現在進行形を用いた文を理解し、書く。	○	○	○	○	ノート 発音 一問一答
10月	Lesson 3 Is Benji English?	・ 助動詞(can, will)を用いた文 ・ 動詞(be動詞、一般動詞)の過去形を用いた文。	10	・ 自分についての英文を読み、英語でもその言葉が使われている日本語やブラウン先生が言う目的の異い点について理解する。 ・ 助動詞を用いた文や動詞の過去形を用いた文の作り方を理解し、書く。	○	○	○	○	ノート 発音 一問一答
11月	Lesson 4 Look and Learn	・ 代名詞・西本文型・命令文・助動詞	8	・ 代名詞、助動詞、西本文型を用いて自分のことや相手の事について書き、話す。 ・ 命令文を書いて話す。	○	○	○	○	ノート 発音 ALTとのやりとり
12月	Lesson 5 Michel	・ I think (think)の文 ・ give ODの文 ・ call OCの文	12	・ フランスの世界遺産モン・サン・ミ歇尔についての英文を読み、モン・サン・ミ歇尔の名前の由来及び歴史などについて理解する。 ・ I think (think)の文、二重目的格を含む動詞を用いた文(call, give)を理解し、書く。	○	○	○	○	ノート 発音 一問一答
1月	Take a Break! 1	・ Can you -?の疑問文	2	・ 単語の文字がシャッフルされた英文を読み、意味を見つけて話す。	○	○	○	○	ノート 発音
2月	卒業生に手紙を書く	・ 1年間に学習した英文法を用いた英文文。	4	・ 卒業生に向けた英語での手紙を書く。 ・ 相手の手紙の内容を理解する。	○	○	○	○	ノート 発音

(ウ) 「判断基準」を設定した授業実践の略案

a ① 「判断基準」を設定した略案書式 (係で作成し学部で共通理解)

「平成27年度 高校生の政治的教養をほぐむ教育」学習指導略案 (公民科)

日時	平成28年1月9日(土)3校時		
場所	小会議室		
対象者	高崎南高等学校生徒	担任者	高崎南教員
科目	公民科	単元	選挙権
単元	選挙権	単元	選挙権
日 程	政治や選挙に関する知識を身に付け、有権者として自らの判断で権利を行使することができるようにする。		
評価規準	① 選挙制度、選挙を通じた政治参加について理解し、その知識を身に付けている。【知識・理解】 ② 選挙を通じた政治参加の在り方について考え、選挙に行く意義について適切に表現している。【思考・判断】		
評価の観点	・ 話し合い活動における生徒の発言、ワークシートの記述 判断の要素 ・ 選挙を通じた政治参加の在り方への理解 ・ 選挙に行く意義についての説明		
判断基準A	・ 国家・自治体の政治は、開国民主義の原則に基づいて行われており、選挙はその政治に参加する手段であり意思表示の権利である。 【予想される生徒の表現例】 国や地域の代表が行う政治に参加するために、その代表を選ぶための選挙に行き、意思を表示することができる。選挙権は権利であると同時に義務であるという考え方の提示 (選挙を通じて、国家や地域の課題の解決の在り方を見ることができ、国家・社会の形成者としての義務である)		
深化目標	・ 開国民主義について確認 ・ 選挙に行くことは国や地域の政治に対する意思表示であることの確認		
C状況の生徒への状況把握	・ 開国民主義について確認 ・ 選挙に行くことは国や地域の政治に対する意思表示であることの確認		
進行(科目)	学習活動	指導上の留意点等	(見込)時間配分(分)
導入 3分	始めのあいさつ 1 学習内容を知らせる 「選挙権になるということ」	・ 指導者・ロジック等の確認 ・ 資料とワークシートを配布する。 ・ 選挙、有権者という言葉について知っているか問い、学習への動機付けにする。	
展開1 17分	2 「選挙」についての理解説明 ・ なぜ今選挙の学習をするのか？ ・ 有権者について ・ 選挙のしくみ ・ 政治のしくみ ・ 選挙について考えてほしいこと 《展開1の課題》「選挙に行く意義」 ・ まとめ	・ 最近のニュースを取り上げ、問題提起する。 ・ 身近な生徒を例に考えさせる。 ・ 学校生活にある選挙を例にあげる。 ・ 政治を行うのは国民(地住民)であること、開国民主義で行われること、選挙は政治への意思表示であることを確認する。 ・ まとめをワークシートへ記入させる。 Ⅲ 確認次第で「知識確認ワークシート」記入	① 疑問に対する生徒の発言
評価 3分	小会議室をパーティションで仕切る	展開1: Bグループ 展開2: Aグループ	
展開2 20分	3 選挙に行く意義について考える ・ 「選挙」意義説明を基に自分の考えとその理由をワークシートに記入する。(4分程度) ・ それぞれの考えとその理由を周りに発表する。(3分程度) ・ 発表された考えを基にグループで、選挙に行く意義について話し合う。(7分程度) ・ 再度各自で「選挙に行く意義」についてワークシートに記入する。(4分程度) ・ 再度考えた内容を周りに発表する。(3分程度)	・ 考えてほしい内容について補足する。 ・ それぞれの考えを基に自由に発言させる。 ・ 明確な意見は歓迎が行う。 ・ 意見交換・話し合いは生徒リーダーが中心となって行う。 ・ 必要な内容はメモをとらせる。 ・ 話し合いに深まりが見られないようなら、「選挙」に関する意義のまとめに戻って考えさせる。 ・ 【評価観点による評価】 C状況の生徒に対し、「開国民主義について確認」。「選挙に行くことは国や地域の政治に対する意思表示であることの確認」をさせる。(確認目標) ・ 評価観点Bを課した生徒に対し、「選挙権の意義」についての見解を提示し考えさせる。(深化目標)	① ワークシートの記述 ② 発表・発言 ③ ワークシートの記述
閉会 4分	4 選挙に関する評価観点について 終わりのあいさつ	・ 展開・テレビ等の国策方針について留意する。	

② 「判断基準」を設定した評価授業の評価書式

(係で作成し学部で共通理解)

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
○ 単元・題材名 (内容)			
○ 評価規準・判断基準について ・ 評価規準の設定について ・ 判断基準の設定について			
○ 評価授業について ・ 評価授業の評価 (授業者)			
・ 生徒の発言等			
○ その他自由記述			

b 「判断基準」を設定した略案（授業実践）例

理科

日時	平成28年1月29日（金）4校時	対象者	高研部1年2組	指導者	水原雅章
場所	化学室・化学準備室	教科書	東京書籍：科学と人間生活		
主題	ナイロン66の合成実験				
目標	① 重合体のしくみを理解し、注意事項を守り、安全にナイロン66の合成実験を行うことができる。				
評価指標	① 重合体の反応のしくみを理解し、化学式を用いた化学反応式で表現できる。【①思考・判断・表現 ②知識・理解】 ③ 安全に注意を払い、指示通り適切に実験活動ができる。【①関心・意欲・態度、②技能】 ④ 実験活動のようす、報告内容、ワークシートの記述。				
評価の場面・対象	① 重合体の化学反応式の理解。 ② 各自合成したナイロン66の状態、観察、考察の記述。				
判断基準B	① 重合体の化学反応式が、係数を付けて記述している。 ② 安全面に注意を払い、指示通り適切に実験を行い、ナイロン66を合成している。				
深化指標	① アジピン酸ジクロリドを使った化学反応式作成の指示。 ② ナイロンと皮の強度を比べる実験方法の考察。				
C状態の生徒への補充指導	① スモールステップによる実験の指示と補助。 ② モノマー、ポリマーの縮略表記と名称の確認。				
過程（時間）	学習活動	指導上の留意点等	単元の評価基準・対象		
導入10分	始めのあいさつ。 1 学習内容を知る。 【ナイロン66を合成してみよう】 2 重合（重合）の反応のしくみの確認する。	① 指導書、ロジャー等の状態を確認する。 ② モノマーから水などの縮略名が取られて結合する反応を確認する。	① 生徒の発言		
展開30分	③ 安全に実験を行うための注意事項を大きく。 ④ 実験活動を行う。 ① A液をビーカーに計り取る。 ② B液を試験管に計り取る。 ③ B液をA液の入っているビーカーに、ゆっくりと注ぎ入れる。 ④ A液とB液の境界面にできたものを、ピンセットではさみ、試験管に巻き付ける。 ⑤ 試験管に巻き付けた糸を、アセトンで洗い乾かす。 ⑥ 合成したナイロン66を観察し、考察、感想等をまとめる。 ⑦ ナイロン66合成の化学反応式を考案する。	① ワークシートを配付する。 ② 使用する器具を配り、説明する。 ③ 安全面、調剤に配慮する。 ④ 教材コンテンツを活用し、実験手順を表示しながら説明する。 ⑤ 巻き付ける実験の動画を見せる。 ⑥ アセトンは臭気強い薬品なので、実験は、換気扇をしながら別室の化学準備室を使う。 ⑦ 係数を付けて、化学反応式をつくらせるように、具体的な数字を入れて、イメージしやすいように配慮する。	① 生徒の実験活動 ② ワークシートの記入 ③ 合成したナイロンの確認		
統括10分	7 説明者カザースについての説明を聞く。 8 次時の内容の予備をきく。 終わりのあいさつ。	① ワークシート表頭を活用する。 ② 議題、タンパク質の学習内容を予告する。			

英語

平成27年度 コミュニケーション英語1 学習指導略案

日時	平成28年2月4日（木）5校時	指導者	岩瀬 玲那
教科	コミュニケーション英語I	場所	高研部1年2組教室
單元名	Mont-Saint-Michel	使用教材	VISTA English Communication I
単元の目標	① フランスの世界遺産モン・サン・ミッシェルについての英文を読み、モン・サン・ミッシェルの名前の由来及び歴史などについて理解する。 ② I think (that)～の文、二重目的語を取る動詞を用いた文 (call, give) を理解し、書く。		
本時の目標	call A Bを用いた本文に関する英文に適切に答え、call A Bを用いて英文作成をする。		
評価指標	① モン・サン・ミッシェルの現状を知ることができる。【関心・意欲・態度】 ② モン・サン・ミッシェルの現状を理解することができる。 ③ Call A Bを使った英文を作成し、発表することができる。【表現】 ④ 文型 SVOOを理解する。【知識・理解】		
評価の場面・対象	① Q and Aの生徒の記述と発言 ② 英文作成と発表		
判断の要素	① call A Bを適切に用いている。		
判断基準B	① Call A Bを用いて本文に関する質問に答えている。 ② Call A Bを用いた自分の体験に基づく英文作成をし、発表している。		
深化指標	① 相手に分かりやすい説明をするように、順序立てて Call A Bの文構造を説明する。		
C状態の生徒への補充指導	① 本文中から call A Bが使われている箇所を探す。 ② 質問を分解して日本語の意味を考える。 ③ 自分の体験を添って call A Bを野分的に考えてみる。		
本時の展開			
過程（時間）	学習活動	指導上の留意点	評価指標、評価方法
挨拶（3）	1 How are you? 2 What day is it today? 3 What's the date today? 4 How is the weather? の質問に英語で答える。	① 生徒同士が質問し合っていて、コミュニケーションがとれるようにする。 ② 読みも振替する。	本時は、評価指標の評価対象としない。
小テスト（5）	Data Base 3000の10問を小テストの範囲とする。		
本文内容理解（15）	① 予習プリントの解答を生徒同士で行う。 ② 他の生徒の日本語訳をきいて、より良い表現を取り入れてみる。		① 分からない箇所は、答えだけを教えるのではなく、理由や文法を説明するように声かけを行う。
Q and A（25）	教科書本文についての英語の質問に対して、英語で答える。		① まずは、質問の意味を確認する。 ② 答えるときに、注目すべき文法を指し示す。 ③ 生徒の発言 ④ 生徒の質問に対する答えの記述
挨拶（2）			

c 「評価規準」、「判断基準」を設定した評価授業の評価例

理科

「評価規準」、「判断基準」を設定した評価授業の評価

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
水坂理重	平成28年1月29日 (金) 4校時	理科 科学と人間生活	高等部産業工芸科 1年2組 3名

- 評価規準・判断基準について
 - ☆ 評価規準の設定について
 - ・ 評価規準①について

縮合重合の反応のしくみについては理解できていたが、係数のnを用いた化学反応式の作成については、次の授業時間を使って、確認・説明を行った。評価規準設定自体は、「ナイロン66の合成における縮合重合反応のしくみを理解できる」とし、「係数nを用いた化学反応式で表すことができる」は深化指導として対応するのが妥当であったと判断している。
 - ・ 評価規準②について

妥当であった。
 - ☆ 判断基準の設定について
 - ・ ①の化学反応式の記述確認は、次の授業時間で確認した。(3名中2名到達)
 - ・ ②の実験活動の判断基準は妥当であった。(3名中3名到達)
- 評価授業について
 - ☆ 評価授業の評価(授業者)
 - ・ 縮合重合の反応のしくみについては、モノマーの構造式などを印刷・ラミネートしたものを黒板に提示することにより、水分子が取れて結合する反応を視覚化できた。また、板書時間の短縮により考察する時間が確保できた。
 - ・ 実験活動については、①教科書に示されている安全面の配慮事項に追加してポリエチレン製の耐熱手袋を用いたこと、②臭気性の強いアセトンを使う過程においては、別室の化学準備室で行ったこと、③危険性のある実験手順を教師側が行ったこと(アジピン酸ジクロリドの溶解)、④実験手順をスモールステップ化し、実験手順を提示し説明したこと、⑤難しい実験活動の部分は、予備実験に行った動画を視聴させたことなどで、全員が判断基準Bに到達できたと考えている。
 - ☆ 評価授業の評価(参観者)

参観者なし。
 - ☆ 生徒の要容等
 - ・ 来年度の選択教科科目として、理科の化学基礎を選択した生徒が3名中2名いた。
- その他自由記述

英語

「評価規準」、「判断基準」を設定した評価授業の評価

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
岩濤玲那	平成28年2月4日(木) 5 校時	外国語 (コミュニケーション 英語I)	高等部1年2組

- 単元・題材名(内容)

English Communication I 「Lesson 4 Mont-Saint-Michel」
- 評価規準・判断基準について
 - ☆ 評価規準の設定について
 - ・ 教科書会社が作成したものを基に、本校の生徒の実態に即した評価基準とすることができた。
 - ☆ 判断基準の設定について
 - ・ 評価規準を基に更に具体的な基準を設定することで、1時間の授業の中で、重要な学習内容を教師側も生徒側も理解しやすい。
 - ・ 判断基準設定の難しさがある。教科の目標と生徒の実態との折り合いの付け方。
 - ・ 複数人で授業を行う際に、到達目標が明確なため、授業の水準を一定で保てる。
- 評価授業について
 - ☆ 評価授業の評価(授業者)
 - ・ 押さえなければならない学習内容を生徒も教員も授業を進行している中で共有して、一体感が持てた。(授業を教員と生徒が協同で作りに上げている。)
 - ・ 判断基準を設けたことで、生徒の表現の幅が狭まる危険性もある。
 - ☆ 評価授業の評価(参観者)
 - ・ 「評価規準」と「判断基準」が設定されていたことで、指導案から授業の流れや到達点の分かりやすかった。また、授業時の生徒の評価や過不足が明確であるように感じた。
 - ☆ 生徒の要容等
 - ・ 英語で授業中も発言しようという意欲・態度が見られた。
- その他自由記述

ウ 平成27年度評価と課題

- ☆ 評価規準や判断基準の設定により、授業計画→授業→評価の一体化が図れる（意識できる）ようになった。
- ☆ 評価規準や判断基準を考えることで、到達点を逆算しながら授業を進められ、授業時の言語活動や思考場面の充実につながった。
- ☆ 評価規準や判断基準を設定したことで、授業中に生徒の到達状況が把握しやすくなった。
- ★ 評価規準・判断基準の妥当性を検証していく必要がある。
- ★ 評価の方法や仕方、評価の対象をより工夫していく必要性を感じる。
- ★ 講義形態（座学）授業中心の研究となったため、実技形態授業への応用の在り方を検討する必要がある。

(2) 平成27年度の評価や課題を基にした平成28年度の取組方針について

ア 平成28年度の研究内容についての確認・共通理解

- (ア) 各教科・科目において、「評価規準」を設定した、第2学年分の指導と評価の「年間計画」、「単元計画」の作成
- (イ) 各教科・科目において、第2学年分の「指導と評価の単元計画」で設定した、「思考・判断・表現」の「評価規準」から導き出される「判断基準」を設定した授業の実践
(各教科1回以上の授業実践)
- (ウ) 「評価規準」、「判断基準」についての基本的な考え方の共通理解
「評価規準」・・・本校高等部(標準学級)の実態における最大公約数となるように設定
「判断基準」・・・「評価規準」を基に、授業を行うクラス・生徒の実態毎に設定

イ 平成27年度に設定した「評価規準」、「判断基準」の妥当性の検証

より生徒の実態に即した「評価規準」、「判断基準」となるように改善していく

【具体的な取組方法】

- ・ 教科・科目毎に複数人で確認・検討
→ 同一教科内もしくは、文系・理系等の隣接教科間で検討
- ・ 平成27年度第1学年と平成28年度第1学年の実態や研究・実践の状況等と併せながら検証
→ 平成27年度設定した第1学年分の「評価規準」、「判断基準」を平成28年度第1学年の授業等で実践しながら検証

ウ 評価の方法や仕方、評価対象の工夫

実技形態授業への応用の在り方を検討していく

【具体的な取組方法】

- ・ 各科の連絡・調整担当を設け、各科において連絡・調整担当と連携しながら実技形態授業の「評価規準」、「判断基準」及び授業実践について検討
- ・ 実技形態授業の指導と評価の「年間計画」、「単元計画」、授業の例示
平成27年度提示した書式を基に係で作成し、学部で共通理解したもの

(ア) 実技形態授業の「指導と評価の年間計画」例

指導と評価の年間計画 (体育)									
教科	保健体育			学年	2 学年				
科目	体育			学科	被服科 産業工芸科 理容科				
教科書	〇〇社 〇〇〇			単位数	2 単位				
目標	運動の合理的、計画的な実践を通して、知識を深めるとともに技能を高め、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにし、自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育て、...								
評価規準	1 関心・意欲・態度	2 思考・判断・表現	3 運動の技能	4 知識・理解					
	運動の楽しさや喜びを深く味わうことができるよう、公正、協力、責任、参画などに対する意欲を持ち、主体的に取り組んでいる。	自己や仲間の課題に応じた運動の取り組み方を工夫させたり、状況に応じて体力を高めるための運動の計画を工夫している。	運動の特性に応じて勝敗を競ったり、運動の特性に応じた段階的な技能を身に付けてりしている。	運動の技術の名称や行い方、課題解決法、安全確保の仕方、スポーツの歴史や文化的特徴及び、豊かなスポーツライフ設計の仕方を理解している。					
月	単元名	学習内容 (小単元)	予定時間	主な学習活動と評価のポイント	評価の観点				評価方法
					1	2	3	4	
11月	選択球技 (ゴール型) ・ サッカー	<ul style="list-style-type: none"> 基本技能練習 班別練習, ミニゲーム 練習試合 グループミーティング 試合 	12	<ul style="list-style-type: none"> 主体的にサッカーの学習に取り組んでいる。 チームや自身の技術的な課題や有効な練習方法などについて考察し、指摘や説明している。 攻防を展開するためのボール操作や、空間を埋めるなどの動きができています。 技術の名称や理論、課題解決などの方法について理解している。 	○				行動観察 発言 ワークシート

(イ) 実技形態授業の「指導と評価の単元計画」例

指導と評価の単元計画 (体育)							
1 単元名: 球技 (ゴール型) サッカー							
2 単元の目標: サッカーの合理的、計画的な実践を通して、知識を深めるとともに技能を高め、仲間との連携した動きに...							
3 単元の評価規準							
1 関心・意欲・態度	2 思考・判断・表現	3 運動の技能	4 知識・理解				
サッカーの楽しさを味わうことができるよう、フェアプレイを大切に、作戦などの話し合いに貢献しようとするなど、健康・安全を確保して、学習に主体的に取り組もうとしている。	サッカーを楽しみ、自己や仲間の課題に応じた運動を実践するための取り組み方を工夫したり、説明したりしている。	サッカーの特性に応じて、ゲームを展開するための作戦に応じた技能や、仲間と連携した動きを身に付けている。	サッカーの技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法、試合の行い方を理解している。				
4 指導と評価の計画 (全 12 時間)							
次 程	(小単元名) 学習内容・活動	評価の観点				評価規準等	評価方法等
		1	2	3	4		
4 次	4 班別練習, ミニゲーム ・ パス 7 ・ インターセプト (パスカット) 8 9 時間目	○				<ul style="list-style-type: none"> チームや自身の課題解決のために意見を出している。 相手の動きを見ながら味方と連動することで、効果的なパスを通して 適切にポジショニングし、味方と連動することで、パスをインターセプトできている。 チームや自身の技術的な課題、有効な動き方などについて考え、指摘や説明している。 サッカーの技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げて 課題解決の方法等について、理解したことをワークシートに書き出している。 	発言 行動観察 行動観察 発言 発言 ワークシート ワークシート

(ウ) 実技形態授業の「評価規準」, 「判断基準」を設定した評価授業略案例

学習指導略案 (保健体育科)

日時	平成28年11月0日 ()	校時	対象者	高等部標準学級生徒	男子〇名	女子〇名	計〇名
場所	グラウンド	指導者	保健体育科				
単元名	球技(ゴール型:サッカー)						本時の位置 (7/12)
主な学習内容等 (小単元名)	4 班別練習, ミニゲーム 「パス, インターセプト(パスカット)」						
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> 攻撃面においては, 味方と動きを連動させ, 効果的なパスを通すことができる。 守備面においては, 適切にポジショニングし, 相手のパスをインターセプトすることができる。 						
評価規準	<p>① チームや自身の課題解決のために主体的に取り組んでいる。【関心・意欲・態度】</p> <p>② チームや自身の技術的な課題や有効な動き方などについて考え, その内容を説明している。【思考・判断・表現】</p> <p>③ 相手の動きを見ながら味方と連動することで, 効果的なパスを通してしている。【運動の技能】</p> <p>④ 相手の動きを見ながら適切にポジショニングし, 味方と連動することで, パスをインターセプトできている。【運動の技能】</p> <p>⑤ サッカーの技術の名称や動き方について, 学習した具体例をあげている。【知識・理解】</p>						
評価の場面・対象	<p>ア: ミーティング時の生徒の発言</p> <p>イ: ワークシートの記述</p>						
判断の要素	<p>ア: パスを通すために必要な要素の理解と適切な説明</p> <p>イ: パスをインターセプトするために必要な条件の理解と適切な説明</p>						
判断基準 B	<p>ア: (相手の動きの観察や予測, パスの正確性, 味方とのジェスチャーやアイコンタクトによる意思の共有, スペースへの移動, 味方との連動など) が, パスを通すために必要。※ () 内のいずれかが指摘できればよい。 [予想される生徒の表現例] 相手の動きを見る。スペースを見付け移動する。ジェスチャーをしながらパスをしたり, 呼んだりする。等 イ: 相手の動きの観察や予測, 相手との適切なポジショニング, 味方との連動が, インターセプトには必要。 [予想される生徒の表現例] 相手の動きを見ながらポジショニングし, 味方と連動することが必要。</p>						
深化指導	<p>ア: 生徒が説明したものは別の要素について考えさせる。</p> <p>イ: インターセプト後の攻撃展開について考えさせる。</p>						
C 状況の生徒への補充指導	<p>ア: 作戦板を使用して, パスを通る具体的な場面を想起させながら考えさせる。</p> <p>イ: パスを通る条件からインターセプトを考えさせるとともに, パスがインターセプトできる場面を想起させながら考えさせる。</p>						
過程(時間)	学習活動		指導上の留意点等			評価規準・対象	
導入 3分	<p>集合・あいさつ, 体調等チェック</p> <p>1 本時の学習内容を知る 班別練習, ミニゲーム 「効果的なパス, インターセプトを成功させよう」</p>		<ul style="list-style-type: none"> あらかじめピブスを着用させておく。 目標と授業の流れを伝え, 学習への動機付けにする。 				
展開 I 20分	<p>準備運動等</p> <p>2 班別のパス練習</p> <ul style="list-style-type: none"> コントロールを意識しながらパス練習をする。 フットワークを意識しながらパス練習をする。 <p>3 班対抗インターセプト練習</p> <ul style="list-style-type: none"> パス班, インターセプト班に分けて対抗しながら練習をする。 <p>4 ミーティング①</p> <ul style="list-style-type: none"> パスを通すために必要な要素について考え, 発表する。 		<ul style="list-style-type: none"> サッカーに必要なストレッチも行う。 20m直線上で行う。 近距離のパス精度とボールコントロールの感覚習得を目指す。 徐々に素早いパス回しができるようフットワークを意識させる。 パス班, インターセプト班内に2人組をそれぞれ作らせ, 仲間との連携を意識しながらパス, インターセプト練習に取り組ませる。 5分でそれぞれの班の役割を交代する。 パス練習の際は, 味方の動きとの連動を意識させる。 インターセプト練習の際は, 相手との適切なポジショニング感覚の習得を目指す。 			<p>③行動観察</p> <p>③行動観察</p> <p>③行動観察</p> <p>④行動観察</p>	
展開 II 22分	<p>5 ミニゲーム</p> <ul style="list-style-type: none"> 効果的なパス, インターセプトを目指してプレイする。 <p>6 ミーティング②</p> <ul style="list-style-type: none"> パスをインターセプトするために必要な条件を考え, ワークシートに記述する。 		<ul style="list-style-type: none"> ミーティング時に考えた, パスを通すための要素を意識しながら効果的なパスを通せるようにさせる。 効果的なパスやインターセプトをその場で賞賛する。 【判断基準Bによる評価】及び補充・深化指導 他の生徒の発表も注意して聞くようにさせる。 			<p>③行動観察</p> <p>④行動観察</p>	
終末 5分	<p>整理運動</p> <p>次時の予告</p> <p>体調等チェック・あいさつ</p>		<ul style="list-style-type: none"> 次時も「パスとインターセプト練習」を行うことを伝える。 				

(エ) 「評価規準」, 「判断基準」を設定した評価授業の評価 (書式)

(平成27年度提示した書式を基に係で作成し, 学部で共通理解したもの)

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅱ			
授業名	実施日時	教科・科目	実施学級
1) 単元・題材名 (内容)			
2) 評価規準・判断基準の設定について			
・ 今年度設定したものについて			
・ 昨年年度設定したものについて (両者の状況)			
※ 「今年の」年度と「過去の」年度を比較して			
3) 評価授業について (評価授業の評価)			
※ 授業をしてみて・参観してみてどうだったか			
・ 授業の状況・進め方について			
・ 生徒活動について			
※ 学力・コミュニケーション力・基礎的学力の向上という視点から			
・ 評価の方法や仕方, 評価対象の工夫について			
※ 実技等科目への応用という視点も含む			
・ 生徒の反応等			
4) その他自由記述 (項目も含めて)			

(3) 平成28年度の取組【年度全体の取組が平成27年度のA】

ア 研究の取組 (計画)

- ・ 「評価規準」, 「判断基準」と研究についての確認・共通理解
- ・ 平成27年度設定した「評価規準」, 「判断基準」の妥当性の検証
 - より生徒の実態に即した「評価規準」, 「判断基準」の設定
- ・ 評価の方法や仕方, 評価対象の工夫
 - 平成27年度は座学形態授業を中心に研究を進めた
 - 平成28年度は実技形態授業への応用の在り方も検討

【P】

これらを考慮した

- ・ 第2学年の「評価規準」を設定した「指導と評価の年間計画」と「指導と評価の単元計画」の作成【D1】
 - ・ 第2学年の「指導と評価の単元計画」を基に「判断基準」を設定した授業実践 (評価授業)【D2】
 - ・ 評価授業及び指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の評価と改善【C】
- ↓
- ・ 平成29年度の取組 (第3学年分の研究実践及び3か年のまとめ)【A】

イ 研究の進め方

- 5～6月: 「評価規準」, 「判断基準」の妥当性の検証, 評価の方法や仕方, 評価対象の工夫
- 6～12月: 「評価規準」を設定した「指導と評価の年間計画」を作成し, そこから「指導と評価の単元計画」を作成 (第2学年分)
- 7～1月: 第2学年の「指導と評価の単元計画」を基に「判断基準」を設定した授業実践 (評価授業)
- 1～3月: 評価授業及び指導と評価の「年間計画」, 「単元計画」の評価

各教科・科目毎に
並行して進めていく

ウ 平成28年度研究の実際 (各教科・科目毎に取り組んだ例)
 (ア) 「指導と評価の年間計画」例 工業：機械工作 (部分抜粋)

①

平成29年度指導と評価の年間計画

教科	工業	産業工芸科	学年	2学年								
科目	機械工作		学科	産業工芸科								
教科書	「機械工作1」 実教出版		単位数	2単位								
<p>目標 機械工作に関する知識と技術を習得させ、実際に活用する能力と態度を育てる。</p>												
<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th>1 関心・意欲・態度</th> <th>2 思考・判断・表現</th> <th>3 技能</th> <th>4 知識・理解</th> </tr> <tr> <td> 機械工作にかかわる基礎的な知識や技術への関心と、その習得に意欲があり、合理的な生産方法を企画し、実際に活用しようとしている。 </td> <td> 機械工作に関する諸課題の解決を目指して思考を深め、基礎的・基本的な知識と技術を基に、技術者として適切に判断し、表現する創造的な能力を身に付けている。 </td> <td> 機械工作に関する基礎的・基本的な知識や技術を身に付け、安全かつ環境に配慮し、ものづくりを合理的に計画し、その技術を適切に活用している。 </td> <td> 機械工作の基礎的な知識や技術の理解はもとより、ものづくりのいろいろな場面での問題解決を試みるができるようにそれらを相互に関連させて理解している。 </td> </tr> </table>					1 関心・意欲・態度	2 思考・判断・表現	3 技能	4 知識・理解	機械工作にかかわる基礎的な知識や技術への関心と、その習得に意欲があり、合理的な生産方法を企画し、実際に活用しようとしている。	機械工作に関する諸課題の解決を目指して思考を深め、基礎的・基本的な知識と技術を基に、技術者として適切に判断し、表現する創造的な能力を身に付けている。	機械工作に関する基礎的・基本的な知識や技術を身に付け、安全かつ環境に配慮し、ものづくりを合理的に計画し、その技術を適切に活用している。	機械工作の基礎的な知識や技術の理解はもとより、ものづくりのいろいろな場面での問題解決を試みるができるようにそれらを相互に関連させて理解している。
1 関心・意欲・態度	2 思考・判断・表現	3 技能	4 知識・理解									
機械工作にかかわる基礎的な知識や技術への関心と、その習得に意欲があり、合理的な生産方法を企画し、実際に活用しようとしている。	機械工作に関する諸課題の解決を目指して思考を深め、基礎的・基本的な知識と技術を基に、技術者として適切に判断し、表現する創造的な能力を身に付けている。	機械工作に関する基礎的・基本的な知識や技術を身に付け、安全かつ環境に配慮し、ものづくりを合理的に計画し、その技術を適切に活用している。	機械工作の基礎的な知識や技術の理解はもとより、ものづくりのいろいろな場面での問題解決を試みるができるようにそれらを相互に関連させて理解している。									
月	単元名	学習内容	予定時間	主な学習活動と評価のポイント	評価の観点				評価方法			
					1	2	3	4	【関連項目】			
1学期	第1章 機械工業のあらし	1 機械工業のあらし 2 機械製品の製造	2	・社会における機械工業の位置を理解・把握させ、今後の機械工業のあるべき姿を考えさせる。 ・機械製品の製造方式の発達とその背景や、機械製品が社会に及ぼした影響を把握させ、現代社会におけるより好ましい機械工業の姿について考えさせる。	○	○	○	○	プリント ノート 行動観察 ワークシート			
2学期	第2章 機械材料とその加工性	1 機械材料の性質と種類 2 炭素鋼	2	・機械材料に求められる性質、機械材料の種類、機械的性質、金属・合金の結晶構造と状態変化、金属材料の変形と結、金属材料の加工性などを理解させ、機械材料の適切な選択と使用方法を把握させる。 ・鉄鋼の分類と製法、炭素鋼に共通な性質、分類、種類、加工性、純鉄の特性と結晶構造を把握させ	○	○	○	○	プリント ノート 行動観察 ワークシート			

②

月	単元名	学習内容	予定時間	主な学習活動と評価のポイント	評価の観点				評価方法
					1	2	3	4	【関連項目】
1学期	3 合金鋼		2	・合金鋼と炭素鋼との違いや、純鉄と他の合金鋼との違いを理解させたのち、合金鋼の種類、性質、特徴、用途、加工性を把握させ、いろいろな合金鋼を適切に活用できる能力を身に付けさせる。	○	○			
2学期	4 鋳鉄		3	・鋼との違いを十分に理解させたのち、鋳鉄の性質、組織、種類、特徴、用途および加工性などを把握させ、いろいろな鋳鉄を適切に活用できる能力を身に付けさせる。	○	○			
	5 非鉄金属材料		3	・鉄鋼材料との相違を理解させたのち、いろいろな非鉄金属材料の種類、特徴、用途、加工性を把握させ、非鉄金属材料を適切に活用できる能力を身に付けさせる。	○	○			
	6 非金属材料		3	・金属材料との相違を理解させたのち、いろいろな非金属材料の種類、特徴、加工法、用途、再活用を把握させ、非金属材料を適切に活用できる能力を身に付けさせる。	○	○			
	7 機能性材料		2	・機能性材料の働き、特徴、種類、用途を把握させ、いろいろな機能性材料を適切に活用できる能力を身に付けさせる。	○	○			

③

月	単元名	学習内容	予定時間	主な学習活動と評価のポイント	評価の観点				評価方法
					1	2	3	4	【関連項目】
1学期	8 複合材料	定期考査	1	力を身につけさせる。					ハ・ホ・ヘ・ト
2学期	第3章 鋳造	1 鋳造のあらし 2 砂型鋳造法 3 各種の鋳造法	2	・鋳物に共通な特徴、およびいろいろな鋳造法その製品例などにより鋳造のあらしを把握させ、適切な鋳造法を選択できる能力を身に付けさせる。 ・砂型鋳造法における鋳型の種類、および鋳型のつくりかた、鋳液、鋳込みなどの一連の工程と各工程における留意事項を把握させ、砂型鋳造法を適切に活用できる能力を身に付けさせる。 ・各種の鋳造法におけるさまざまな鋳型、およびさまざまな鋳型のつくりかたやその留意事項などを把握させ、砂型鋳造法などとの比較により各種の鋳造法の特徴を理解させ、各種の鋳造法を有効に活用する能力を身に付けさせる。 ・健全な鋳物をつくるための計画の立てかたと工程の管理のしかたを把握させ、適切な鋳造を計画し、それを管理できる能力を身につける。	○	○	○	○	プリント ノート 行動観察 ワークシート プリント
	4 鋳造の計画と管理		3		○	○			ハ・ホ・ヘ・ト

(ウ) 「評価規準」, 「判断基準」を設定した評価授業(授業実践)例

工業

学習指導案					
日時	平成28年12月15日2限目	指導者	花立 琢巳	科目	工業 産業工芸科 機械工作
教科書	「機械工作1」 実教出版	単位数	2単位	学年	産業工芸科・2年2組
教目	機械工作	単元名	第2章 機械材料とその加工性	教科書の位置	1 機械材料の性質と種類 (1時間/21時間)
教科の目標	機械工作に関する知識と技術を習得させ、実際に活用する能力と態度を育てる。				
本時の位置	1 機械材料の性質と種類 (1時間/21時間)				
本時の目標	機械材料の種類、性質、用途などを理解させ、機械材料を適切に活用する能力を身につけさせる。				
学習活動	1 関心・意欲・態度 ・身近な製品が及ぼす影響、望まれる性質、結晶と状態変化や、変形と結晶などの基礎的な事柄を把握しようとしている。	2 思考・判断・表現 ・機械材料について把握した種類や性質についての理解を深めるとともに、機械材料の性質と種類について発表することができる。	3 技能 ・機械材料の種類や性質について理解を深め、ものづくりに活用できることを理解している。	4 知識・理解 ・機械材料の種類や性質などを、相互に関連づけて総合的に把握し、適切に活用できるように理解している。	
評価規準	1 評価の場面・対象 ・身近な製品を観察することにより製品の形状、材料との関係について考察し説明しようとする取り組み姿勢。	2 判断の要素 ・機械材料について性質と種類について、考えが深められ、基礎的な事柄を適切に考察できる。	3 判断基準B ・機械材料の特徴について、資料を基に考えをまとめ、主体的にワークシートにまとめていくことができる。	4 判断基準A ・機械的性質の理解を深めるために実習との連携を深め、さまざまな現象との関係などを踏まえて、適切な活用方法を理解している。	
時間	ねらい	学習内容	評価基準	評価方法	
導入 (10分)	[本時の説明] ・前時までの学習内容を確認する。 ・本時の目標と授業内容を説明する。 ・主な金属が、身近にどういったところに使われているかを考え、用途例をワークシートに記入する。	・前時までの学習内容を確認する。 ・本時の目標と授業内容を説明する。 ・主な金属が、身近にどういったところに使われているかを考え、用途例をワークシートに記入する。	・関心意欲態度 ・思考判断表現	ワークシート ノート	
展開 (35分)	[課題の提示] ・機械材料に関する関心を喚起するため身近な製品を例にあげ、どのような場所でどのように用いられているか発問し、ワークシートに書き込ませ発表させる。機械的性質の理解を深めるため、さまざまな現象との関係などを考察させる。 ・ICT機器により動画を見ながら説明ができる。	・機械材料に関する関心を喚起するため身近な製品を例にあげ、どのような場所でどのように用いられているか発問し、ワークシートに書き込ませ発表させる。機械的性質の理解を深めるため、さまざまな現象との関係などを考察させる。 ・ICT機器により動画を見ながら説明ができる。	・関心意欲態度 ・思考判断表現 ・知識・理解	ノート 行動観察 応答 ワークシート	
まとめ (5分)	[反省と予告] ○本時での新学習内容の確認。 身近なところで、金属の特性を生かした用途例があることを確認させ次時以降の学習内容の予告をする。	○本時での新学習内容の確認。 身近なところで、金属の特性を生かした用途例があることを確認させ次時以降の学習内容の予告をする。	・知識・理解	ワークシート ノート	

数学

平成28年度 数学I 学習指導案					
日時	平成29年2月13日(月)6校時	指導者	松元 祥浩	科目	数学I
教科書	新課程1年2組教室	場所	新課程1年2組教室	単元名	2次関数
単元の目標	2次関数とそのグラフについて理解し、2次関数を用いて数量の関係や変化を表現することの有用性を認識するとともに、それらを事象の考察に活用できるようにする。				
本時の目標	2次関数のグラフを利用して最大値・最小値を求めることができる。				
評価規準	① 2次関数が最大値、または最小値をもつことを理解している。【知識・理解】 ② 2次関数の最大・最小の問題を、図をかいて考察しようとする。【関心・意欲・態度】 ③ 2次関数の値の変化をグラフから考察し、最大値、最小値を求めることができる。【数学的な見方や考え方】 ④ 与えられた2次関数の方程式を $y=a(x-p)^2+q$ の形に変形することができる。【技能】				
評価の場面・対象	ア：問題演習時の生徒の記述 イ：発表時の生徒の説明				
判断の要素	2次関数の最大値、または最小値を求めるために必要な要素の理解と適切な説明				
判断基準B	2次関数のグラフが上に凸なら最大値が、下に凸なら最小値が存在し、その値が頂点のy座標になることを理解し、その値を求めることができる。 【予想される生徒の表現例】 (数物線が下に凸である場合) 頂点が一番高い位置にあるから、頂点が最大値になり、その値は〇〇である。 (数物線が上に凸である場合) 頂点が一番低い位置にあるから、頂点が最小値になり、その値は〇〇である。				
深化指標	最大値または最小値をとる点が頂点以外になる場合があるか考えさせる。				
○生徒の生徒への補充指導	グラフを先に示し、2次関数の値を順に追うことで、グラフのごとく最大値(または最小値)をとるか考えさせる。				
本時の展開					
過程(時間)	学習活動	指導上の留意点	評価規準、評価方法		
導入 (10分)	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容と目標の確認をする。	・補聴器、ロッジャーの確認をする。 ・学習内容と目標を伝え、本時の学習に見直しを持って取り始めるようにする。			
展開 (35分)	3 用語と考え方の説明をする。 例1, 例2 4. 練習問題を解き、発表する。 練習1 5 例題をする。 例題1 6 練習問題を解き、発表する。 練習2	・一方的な説明にならないよう、これまでの学習を生かして生徒に発問しながら進める。 ・考え方を定着させるために、一通り説明が終わった後に再度図れを確認する。 ・【判断基準Bによる評価】及び補充・深化指標 ・机間指導をし、必要に応じた言葉掛けをする。 ・解答を発表させ、互いに考え方の確認をさせる。 ・これまでの考え方と関連づけた発問をしながら例題を進めるようにする。 ・【判断基準Bによる評価】及び補充・深化指標 ・机間指導をし、必要に応じた言葉掛けをする。 ・解答を発表させ、互いに考え方の確認をさせる。	① 机間指導、行動観察 ② 机間指導、ノートの確認、発表時の説明確認 ③ 机間指導、ノート確認、発表時の説明確認		
終末 (5分)	7 本時のまとめをする。	・本時で学習した内容を振り返り、重要なポイントを全員で確認する。 ・次時の内容の予告をする。			

(エ) 「評価規準」, 「判断基準」を設定した評価授業の評価例

体育

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅱ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学年
秋元 哲 立和田 泉	平成 28 年 6 月 14 日 (火) 2 校時	保健体育 (体育) バレーボール	高等部 1 年・ 専攻科 2 年

- 単元・題材名 (内容)
 - 単元: 球技 題材: バレーボール
 - 内容: これまでの課題の解決策を話し合った上での改善方法の実践課題や解決策を意識して, パスをつないで相手コートへの返球
- 評価規準・判断基準の設定について
 - ・今年度設定したものについて
 - ・ 昨年度設定したものについて (妥当性の検証)
 - ※ 昨年の 1 年生と現 1 年生を比較して
 - 一 評価規準, 判断基準は妥当なものであった。単元の目標と評価規準の 4 つの観点と同じものにし, 系統性をもって設定することができた。
- 評価授業について (評価授業の評価)
 - ※ 授業をしてみて・参観してみてどうだったか
 - ・ 授業の構成・進め方について
 - 一 「教師側が立てた生徒の目標」と「生徒自身が立てた個人目標」, 「チームで話し合っ立てたチーム目標」をそれぞれ設定し, また「個々の課題」や「チームとしての課題」が話し合い活動により明確になったことで, 少しずつチームとしてのまとまりや連携プレー, メンタル面での助け合い, 声の掛け合いなどが出てくるようになった。
 - ・ 言語活動について
 - ※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
 - 一 単元の評価規準と言語活動の判断基準に照らし合わせることで, 精度の高い評価をすることができた。また, 評価の対象や場面も明確にすることができた。
 - 一 授業ごとに個人の確認シート (記録用紙) に「できたこと」, 「難しかったこと」, 「難しかったことに対する改善方法」を文章で書かせることで, 前時までの振り返りや確認が有効であった。発言ではなくても各自で記録しておくことで, その時に思ったことや考え方を生徒も教師も確認することができた。
 - 一 専攻科の生徒がいたことで, 1 年生と比べると話し合い活動の経験が豊富で, 生徒同士の話し合いがスムーズにできた。
 - ・ 評価の方法や仕方, 評価対象の工夫について
 - ※ 実技が教科目への応用という観点も含む
 - 一 体育ということもあり, 短い時間と人数が多い中で一人一人に深化指導や補充指導を十分にすることができなかった。しかし, 事後にはなるが, 確認シートで個人に対する指導ができた。
 - ・ 生徒の実容等
 - 一 お互いの良いプレーをほめたり, 難しい所をアドバイスする様子が自然に見られるようになった。また, 作戦をお互いに考えて話し合ったり, 解決策を話し合ったりする様子が自然に見られるようになった。
- その他自由記述
 - 一 体育の授業における言語活動の充実は, 必要であり生徒の成長が見られたものの, 運動量の確保が難しい。

家庭

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅱ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学年
西山 咲子	平成 28 年 9 月 9 日 (金) 1・2 校時	家庭総合	高等部 1 年 2 組

- 単元・題材名 (内容)
 - 単元: 人と食物のかかわり 小単元: 日本と世界の食文化
 - 内容: 日本の食文化の変遷を知り, 日本型食生活の特徴に気付く。また, 世界の食文化と比較することで, その成り立ちや背景から, 食文化のもつ役割を考えることができる。
- 評価規準・判断基準の設定について
 - ・今年度設定したものについて
 - ・ 昨年度設定したものについて (妥当性の検証)
 - ※ 昨年の 1 年生と現 1 年生を比較して
 - 一 昨年度設定した評価規準を用いて授業をした。実態差の大きな集団であることを考慮し判断基準を個別に設定し, より細やかに対応することですべての生徒が本時の目標を達成することができた。このことから, 評価規準は妥当であり, 判断基準をより明確にすることで, さらに評価の精度を高められるのではないかと。
- 評価授業について (評価授業の評価)
 - ※ 授業をしてみて・参観してみてどうだったか
 - ・ 授業の構成・進め方について
 - 一 食文化の成り立ちについては, 中学校社会, 高校地理の学習内容との関連が深く, 既習の知識を用いて考える活動を設定した。地域による食文化の違いにはどのような背景があるかを考える活動では, 気候, 地勢, 宗教, 交易など, 様々な視点から考察する姿が見られ, 深い学びの場になったのではないかと。
 - ・ 言語活動について
 - ※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
 - 一 他教科での既習内容も多く含み, それらを総合的に活用することで答えを導くことができるため, 知識の定着度が大きく影響した。しかし, 文章にする前にキーワードを挙げさせ, それらをつなぎながら考えることで, 思考の過程が明らかになり, 生徒自身も論理展開に気付くことができたようである。
 - ・ 評価の方法や仕方, 評価対象の工夫について
 - ※ 実技が教科目への応用という観点も含む
 - 一 判断基準を個別に設定したことで, 実態差に合った指導ができた。
 - ・ 生徒の実容等
 - 一 他の生徒の発言を聞き, 自分の考えに文章を追加する様子が見られた。このことにより, こちらが設定した判断基準Aを達成する生徒がいた。教師の指導だけでなく, 生徒同士の学び合いの場の設定も効果的であることがわかった。
- その他自由記述

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅱ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
北原	H28.12.14	ファッション造形基礎	2-1

- 単元・題材名 (内容)
 - シャツ・ブラウス製作 (襟付け)
- 評価規準・判断基準の設定について
 - ・今年度設定したものについて
 - ファッション造形基礎のブラウス実習の題材を選択し、授業を行った。これまでの授業で生徒の実態を把握していたため、判断の基準を考えることに時間はかからなかった。ただし、実習の科目になると判断する要素が多いため、判断の基準を精選することが難しかった。
 - ・昨年度設定したものについて (妥当性の検証)
 - ※ 昨年の1年生と現1年生を比較して
 - 昨年度は生活産業基礎の座学の授業で評価授業を行ったため、比較できない。
 - 評価授業について (評価授業の評価)
 - ※ 授業としてみて・参観してみてどうだったか
 - ・授業の構成・進め方について
 - ・言語活動について
 - ※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という視点から
 - 接客や実習後のレポート提出などで専門用語や文章訂正を行い、内容理解を確認することができた。
 - ・評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
 - ※ 実技形教科目への応用という視点も含む
 - 今年度は、実習の科目での評価授業を行ったが、評価規準、評価基準を設定することで、これまでよりも格段に評価はしやすくなった。だが、予想される生徒の反応や製作作品の状況が予測できないような状況になることも考えられるので、教員が予想できないような作品の状況になったときの評価が難しいと感じた。また、複数名生徒があり、生徒一人ひとりにあった指導を行った場合に、実習科目だと生徒の評価すべき表現を見逃し、評価に生かすしにくいことも考えられるので、評価のタイミングや評価の項目を授業後でも評価できるようなものを入れていかなければならないと思う。
 - ・生徒の受容等
 - 1回の評価授業なので、大きく変化したところはない。
 - その他自由記述

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅱ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
花立 琢巳	平成28年12月15日 (木) 2校時	工業 産業工芸科 機械工作	高等部 産業工芸科 2年2組

- (1) 単元・題材名 (内容)
 - 第2章 機械材料とその加工性
 - 1 機械材料の性質と種類 (1時間/21時間)
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
 - ・今年度設定したものについて
 - 評価規準・判断基準とも、関心・思考・技能・知識の観点からバランス良く設定できた。目標としては妥当な内容である。
 - ・昨年度設定したものについて (妥当性の検証)
 - ※ 昨年の1年生と現1年生を比較して
 - (3) 評価授業について (評価授業の評価)
 - ※ 授業としてみて・参観してみてどうだったか
 - ・授業の構成・進め方について
 - 初めて学ぶ専門分野のため単元の学習内容が専門的で興味関心や理解が難しい内容が多い。予備知識や思考力が十分ではないために、単元目標以前に補わなければならない補足説明が多く、経験値によっては生徒の個人差が生じ、評価が難しい。
 - ・言語活動について
 - ※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という視点から
 - 教科の単元目標を達成するには十分な学力・コミュニケーション力は持っていたが論理的に専門分野のメカニズムや理論を理解するには、基礎的な能力が不足している部分も感じられた。今後も言語活動の鍛錬が必要な部分がある。
 - ・評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
 - ※ 実技形教科目への応用という視点も含む
 - 授業全般で聴覚障害の特性を理解し、可能な限り視覚的に理解しやすい教材の活用に向け、毎時間授業で使うワークシートや説明用シート、映像・画像教材の準備に多くの時間を充てた。
 - 日常の生活では経験できないようなミクロな世界の説明には、分子モデルを自作させその製作過程も含め興味関心の涵養の時間に充て、段階的に単元目標の説明へと導く工夫を行った。
 - ・生徒の受容等
 - 既習事項については、定着度は増しているように思われる。
 - (4) その他自由記述 (課題も含めて)
 - 学習目標としての設定項目は、シンプルが一番であり、被学習者にどのような方法で効果的に知識の定着を図るかが一番大事なものではなからうか。その手段としての評価規準・判断基準の設定であってほしいと思う。

エ 平成28年度「評価規準」、「判断基準」を設定した評価授業の評価のまとめ

(ア) 単元・題材名(内容)

各教科・科目で設定

(イ) 「評価規準」、「判断基準」の設定について

a 今年度設定したものについて

- 評価規準・判断基準は妥当な設定だった。単元の目標と評価規準の観点を共通させ、系統性をもってバランス良く判断基準を設定できた。(英語・被服・工業)
- △ 生徒の実態を反映しつつ教科目標も達成できるが、評価規準設定の落としどころが難しい。(国語)
- △ 設定した評価規準・判断基準が容易に達成できるものか、困難かのどちらかになってしまったので、生徒の実態把握が課題。(数学)
- △ 実習科目は判断の要素が多いため、判断基準や要素の精選が課題。(被服)

b 昨年度設定したものについて(妥当性の検証)

※ 昨年度の1年生と現1年生を比較して

- 昨年度設定した評価規準は、今年度の生徒に対しても妥当なものであった。
(社会・保健・体育・家庭)
- 同じ評価規準・判断基準を用いて、複数のクラスで授業を行ったが、クラスの実態に応じて補充指導に工夫を施すことで、生徒の思考を促す言語活動が行えた。
(社会)
- 単元目標と評価規準の観点を同じにすることで、系統性をもたせることができた。また、判断基準によって精度の高い評価とすることができた。(保健・体育)
- 実態差のあるクラスであることを考慮し、同じ評価規準から判断基準を個別に設定したことで、全ての生徒が目標を達成することができた。(家庭)
- △ 評価規準は幅広い実態に対応できるよう汎用性をもたせ、クラスごとに生徒の実態に応じた判断基準を設定していくのがよいと感じた。(国語)

(ウ) 評価授業について(評価授業の評価)

※ 授業をしてみて・参観してみてどうだったか

a 授業の構成・進め方について

- 単元の評価規準と言語活動の判断基準に照らし合わせながら授業を行うことで、精度の高い評価とすることができた。また、授業における評価の対象(要旨を捉える設問に関する解答)や場面を明確に設定できた。(国語・英語)
- 評価規準・判断基準を設定することで、授業のゴールを見据えて授業が組み立てられ、「知識・理解」中心の授業から、論理展開を明確にした「思考・判断・表現」中心の授業として展開できた。(国語・社会)
- 生徒間の話し合い(言語活動)を設定したことで、目標に対する課題が明確になり、プレーやチームワークにも好影響を与えた。(体育)
- 他教科も含めた既習の知識を用いて考察させる活動を設定できたことで、深い学びの場になった。(家庭)

△ 予備知識や思考力等が十分ではなく、評価規準達成のために多くの補足説明等が必要だった。(数学・工業・理容)

◇ 判断基準を設定することで、生徒の実態把握につながり、身に付けさせたい目標を明確にして授業を行うことができた。(特活)

→ 本来特活は評価になじまないものであるが、授業作りの観点から判断基準を設定した授業を行った(以下の特活も同様)。

b 言語活動について

※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という視点から

○ 発言・記述の機会を明確に設定したことで、思考や読解の状況を計ることができた。生徒も書くことで思考を明確にし、記述を見直すことができたのではないかと。

(国語)

○ 問題演習時に生徒が黒板に解答を示し、説明するという形態をとることで、コミュニケーション力と論理的思考力を同時に向上させることを図れた。(数学)

○ 年間・単元計画の中で、観点を絞った評価を段階的に行うことで、より思考を促す言語活動を行うことができた。(英語)

○ 授業中の発言だけでなく、各自で記録できる個人確認シートを活用することで、思ったことや考え方を生徒・教師の両方が授業外でも確認することができた。

(体育)

○ 既習内容の総合的な活用には知識の定着度が大きく影響するので、文章化する前に、キーワードを挙げさせ、それらをつなぎながら考えることで、思考の過程が明らかとなり、生徒自身で論理展開に気付くことができた。(家庭)

△ 言語化することが苦手な生徒には、段階的な言語活動面の支援を考える必要がある。(国語)

△ 「誘導しがちだったか」とも思ったが、論理的思考や読解のパターン形成には「誘導」も必要ではないか。思考・読解パターンを繰り返すうちに、思考の過程を自分の力で再現できるようになればよいのでは。(社会)

△ 語句を「単語」単位でしか受け止められなかったり、前後の文脈や場面から語句や内容を類推することが苦手だったりする生徒には、文章を整理する力を向上させる必要があるのではないかと。(社会・英語)

△ 授業中の言語活動を入れるタイミングに難しさを感じた。(数学)

△ 論理的な理解には継続した基礎能力や言語活動等の鍛錬が必要。(工業)

△ 生徒の思考する時間の確保や引き出し方に難しさを感じた。(保健・特活)

◇ 判断基準を設定した話し合い活動では、生徒への発問や返答、言葉掛けがしやすかった。(特活)

c 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について

※ 実技形態科目への応用という視点も含む

○ キーワードカードを用い、それを選ぶことで、文章構成を考えやすくすることができた。また、授業の重要事項を捉えているかの確認もできた。(保健)

- 体育の授業中は指導する生徒数が多く、補充・深化指導を個別に行うことが難しかったが、個人確認シートを活用して授業後に指導を行うことができた。(体育)
- 一斉授業でも、判断基準を個別に設定したことで、実態差に応じた指導と評価をすることができた。(家庭)
- 評価規準・判断基準により、実習科目でも格段に評価しやすくなった。(被服)
- 評価規準・判断基準を考えることで、生徒の実態をつかみやすく一人一人にあった指導ができた。(理容)
- △ 評価対象となる問の提示方法は検討の余地がある。(社会)
- △ 補充・深化指導の手立てに工夫が必要。(数学・英語)
- △ 実習後のレポート提出などで内容理解を確認したが、評価タイミングや授業後でも評価できるような評価対象の検討が必要。(被服)

d 生徒の変容等

- 判断基準が明確だったため、生徒自身が基準をもって、記述内容を見直すことができた。(国語)
- 図を用いて考えるようになった結果、計算過程を残すようになり、論理的に考えられるようになった。(数学)
- 発問に対し文章から抜き出すだけの解答が多かったが、要旨を捉えて既知の文法を活用し、英文を作成することができてきた。(英語)
- 論述問題への苦手意識に若干の改善が見られた。また、読解の際に接続詞などを意識して、論理的な読解と表現をしようとする様子が見られた。(社会・英語)
- 自分の考えを交えながらまとめをすることができた。(保健)
- 授業時の生徒同士のコミュニケーションが活発になった。(体育・特活)
- 授業時に他の生徒の発言を聞き、自分の考えに文章を追加する様子が見られた。
このことにより判断基準Aを達成する生徒がいた。教師の指導だけでなく、生徒同士の学び合いの場の設定も効果的であることが分かった。(家庭)
- △ 判断基準が容易だったため、生徒の変容があまり見られなかった。(数学)
- △ 1回の評価授業ではなかなか生徒の変容は見られなかった。(被服)

(エ) その他自由記述

- 判断基準の設定により、生徒のつまずきに気付くきっかけになった。また、少し頑張ったら達成できるレベルの目標設定力が求められると痛感した。(数学)
- 既習事項の定着度は増していると思われる。(工業)
- △ 日頃の授業においても事象の因果関係について、論理展開を意識した解説や論理的に理解(思考・判断)できるように努めているが、「表現」までは日常的には取り組んでいない。(社会・家庭)
- △ 体育の授業における言語活動の充実は必要であり、生徒の成長も見られるが、運動量の確保が難しい。(体育)
- △ 評価規準・判断基準はシンプルにすべき。被学習者が効果的に知識の定着を図るという側面も重視した評価規準・判断基準の設定であってほしい。(工業)

オ 「評価規準」、「判断基準」を設定した評価授業の評価の分析と考察

(ア) 成果的な側面

- ・ 昨年度設定した評価規準はおおむね妥当な設定であった。
- ・ 指導と評価の年間計画と単元計画を基に授業を行うことで、授業中に知識・理解だけでなく、意識して思考・判断・表現に取り組む場面を設けることができた。
- ・ 単元の評価規準と言語活動の判断基準に照らし合わせて授業を行うことで、評価の対象や場면을明確にできるとともに、精度の高い評価とすることができた。
- ・ 実技を主とする授業では、授業中の発言や記述だけでなく、授業後のワークシート等を活用した言語活動に取り組むことができ、指導に有効であった。
- ・ 判断基準を設定することで、生徒に主体的に思考・判断・表現させるためのより具体的に有効な手立てを考えることができた。
- ・ 判断基準を設定することが生徒の実態把握につながり、身に付けさせたい目標を明確にして授業を行うことができた。
- ・ 言語活動を設定することで、生徒のコミュニケーション力と論理的思考力を同時にある程度向上させることができた。また、考えを相手に伝えたり、相手から聞いたりしたことは、学習・思考の深まりや自信につながったのではないか。

☆ 昨年度設定した「評価規準」とそこから導き出される「判断基準」は、概ね妥当なものであると考えられる。また今年度設定したのも同様に妥当ではないか。

☆ 評価授業等における「判断基準」の設定には、研究意図に即する教育効果が認められ、授業時の「判断基準」の設定は有効であると考えられる。

☆ 実技形態授業においても、「判断基準」を設定した言語活動の充実がある程度図れたものと考えられる。

(イ) 課題的な側面

- ・ 評価対象となる思考・判断・表現に至るまでの知識の定着や理解が不十分であるため、授業内容がスムーズに言語活動へと結びつかない。授業の知識・理解のための時間と言語活動に充てる時間との配分、評価対象となる課題提示のタイミングや方法等を検討していく必要がある。
- ・ 実技を主とする授業では、授業中の言語活動に時間を割くと、実技時間の確保が難しい。
- ・ クラスや生徒の実態と目標や評価規準・判断基準等設定についての兼ね合いが難しい。
- ・ クラス・生徒の実態に応じて、補充・深化指導の手立ての工夫が必要（キーワードや文章構成・論理展開方法の提示等）。
- ・ 言語活動が苦手な生徒には、文章を整理する力と論理的思考や読解パターン等の段階的な言語運用力を身に付けさせることが有効ではないか。
- ・ 評価規準は幅広い実態に対応できるよう汎用性をもたせ、クラス・生徒の実態に応じて判断基準を設定すればよいのではないか。
- ・ 評価授業等だけでは、思考・判断・表現の力をなかなか高められない。

- ★ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」（言語活動）との兼ね合いについて検討が必要ではないか。
- ★ クラスや生徒の実態と「評価規準」,「判断基準」設定の在り方や, 補充・深化指導の手立てについて, 継続した検証が必要ではないか。
- ★ 「文章の読解・整理・表現」,「論理的思考」を定着させるためのパターン化について, 日頃の授業等における実践や検証が必要ではないか。

(4) 平成28年度の評価や課題を基にした平成29年度の取組方針について

ア 平成29年度の研究内容についての確認・共通理解

- (ア) 各教科・科目において,「評価規準」を設定した, 第3学年分の指導と評価の「年間計画」,「単元計画」の作成
- (イ) 各教科・科目において, 第3学年分の「指導と評価の単元計画」で設定した,「思考・判断・表現」の「評価規準」から導き出される「判断基準」を設定した授業の実践
(各教科1回以上の授業実践)

→ 日常の授業の中で「判断基準」を取り入れた実践を行う

☆ 日常授業における「判断基準」を取り入れた授業の準備・進め方

- ① 指導案・略案等は必要に応じて作成
- ② 指導のポイントを必ず準備・設定
 - ・ 判断基準Bで評価する「主となる発問・課題」
 - ・ 判断基準Bの「判断の要素」
 - ・ 予想される生徒の表現例 (必要に応じて)
 - ・ C状況生徒への「補充指導の手立て」
 - ・ B状況生徒への「深化指導の手立て」

(ウ) 評価授業の評価について（これまでの書式を基に係で作成し学部で共通理解）

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅲ			
授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
(1) 単元・題材名（内容）			
(2) 評価規準・判断基準の設定について ・ 今年度設定したものについて ・ 昨年度以前に設定したものについて <small>※ これまでに作成してきた指導と評価の「年間・単元計画」の見直しの観点から</small>			
(3) 指導のポイントの設定状況（授業で実際に設定したものについて記述） ・ 判断基準Bで評価する「主となる時間・課題」 ・ 判断基準Bの「判断の要素」 ・ C状況生徒への「補充指導の手立て」 ・ B状況生徒への「深化指導の手立て」			
(4) 評価授業について（評価授業の評価） <small>※ 授業をしてみて・参観してみてどうだったか</small> ・ 授業の構成・進め方について <small>※ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」の兼ね合いという観点も含む</small> ・ 言語活動について <small>※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から</small> ・ 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について <small>※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む</small> ・ 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について ・ 「文章の読解・整理・表現」、「論理的思考」を定着させるためのパターン化について <small>※ 及第が可能な教師のみ</small> ・ 生徒の要否等			
(5) その他自由記述（課題も含めて）			

この部分を記述できる授業とすればO.K.

イ 各教科・科目において、これまでに作成してきた第1学年分と第2学年分の指導と評価の「年間計画」、「単元計画」の見直し

→ 前年度・前々年度設定した「評価規準」、「判断基準」を現学年の授業で実践しながら検証（日常の授業の中で「判断基準」を取り入れた実践で検証）

ウ 平成28年度の課題についても検討・検証

- ・ 単元内や授業時の「知識・理解」及び「技能」と、「思考・判断・表現」（言語活動）との兼ね合いについて検討・検証
- ・ クラスや生徒の実態と「評価規準」、「判断基準」設定の在り方と、有効な補充・深化指導の手立てについて検討・検証
- ・ 可能な教科・科目において、「文章の読解・整理・表現」、「論理的思考」を定着させるためのパターン化について検討・検証
- ・ 教科・科目毎に複数人（同一教科内もしくは、文系・理系等の隣接教科間）で検討・検証
- ・ 各科の連絡・調整担当を設け、各科において連絡・調整担当と連携しながら検討・検証

(5) 平成29年度の取組【年度全体の取組が平成28年度のA】

ア 研究の取組 (計画)

- ・ 今年度の研究についての確認・共通理解「汎用化(日常化)・まとめ」
- ・ 単元や授業時の「知識・理解」及び「技能」と、「思考・判断・表現」(言語活動)との兼ね合いについて検討・検証
- ・ クラスや生徒の実態と「評価規準」,「判断基準」設定の在り方と,有効な補充・深化指導の手立てについて検討・検証
- ・ (可能な教科・科目において)「文章の読解・整理・表現」,「論理的思考」を定着させるためのパターン化について検討・検証

【P】

これらを考慮した

- ・ 第3学年の「評価規準」を設定した「指導と評価の年間計画」と「指導と評価の単元計画」の作成【D1】
- ・ 第3学年の「指導と評価の単元計画」を基に「判断基準」を設定した授業実践(評価授業)【D2】①
- ・ 第1・2学年の「指導と評価の単元計画」を基に「判断基準」を設定した授業実践(評価授業)【D2】②
- ・ 評価授業及び指導と評価の「年間計画」,「単元計画」の評価と改善【C】
- ・ 平成29年度の評価や課題等を基にした平成30年度からの取組【A】

イ 研究の進め方

- 4～5月: ・ 今年度の研究についての共通理解・確認
・ 各科・教科で取組について検討
- 5～6月: ・ 「評価規準」を設定した「指導と評価の年間計画」,「指導と評価の単元計画」を作成(第3学年分)
- 6～7月: ・ 第3学年の「指導と評価の単元計画」を基に「判断基準」を設定した授業実践(評価授業)
・ 評価授業及び指導と評価の「年間計画」,「単元計画」の評価と改善
・ 第1学年分と第2学年分の指導と評価の「年間計画」,「単元計画」の見直し(評価授業) ※ 可能な教科
- 7月中: ・ 第3学年分の指導と評価の「年間計画」,「単元計画」,評価授業の評価提出
※ 可能な教科は,第1学年分と第2学年分の指導と評価の「年間計画」,「単元計画」の見直しに係る評価授業の評価提出
- 夏季休業中: ・ 九聴研に向けて研究のまとめ
- 9～11月: ・ 第1学年分と第2学年分の指導と評価の「年間計画」,「単元計画」の見直し(評価授業)
- 10月26日: ・ 九聴研で指定授業・公開授業
- 12月末まで: ・ 第1学年分と第2学年分の指導と評価の「年間計画」,「単元計画」の見直しに係る評価授業の評価提出
- 3学期中: ・ 研究紀要作成

(イ) 「指導と評価の単元計画」例 数学：数学A (部分抜粋)

①

【 数学A 】指導と評価の単元計画

1 単元名：図形と計量

2 単元の目標：場合の数と確率について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習得を図り、事象を数学的に考える力を養い、数学のよさを認識できるようにするとともに、それらを活用する態度を育てる。

3 単元の評価規準

関心・意欲・態度	基本的な見方や考え方	技能	知識・理解
場合の数と確率における考え方に関心をもつとともに、数学的によく考えたり、思考の過程を振り返りながら考えたりすることを通して、数学的な見方や考え方を身に付けていく。	場合の数と確率において、事象を数学的に表現・処理する仕方や予想して説明するなどの方法を身に付けていく。	場合の数と確率において、事象を数学的に表現・処理する仕方や予想して説明するなどの方法を身に付けていく。	場合の数と確率における基本的な概念、原理・法則などのつながりを理解し、基礎的な知識を身に付けていく。

4 指導と評価の計画 (42時間)

次 程	(小単元名)	評価の観点	評価規準等	評価方法等
単 元	学習活動	関 見 技 知		
第1部	順列・組合せ			
1 次 19 時 間	・集合 ・集合の要素の個数 ・和の法則・積の法則 ・順列		<ul style="list-style-type: none"> 高次元のものを集合の要素としてとらえることができる。 共通部分、和集合、空集合、全体集合、補集合について理解している。 ものを数え上げるのに集合を利用することができる。 補集合の要素の個数を求めることができる。 ベン図を利用することで、和集合の要素の個数を求めることができる。 表や樹形図などを用いて場合の数を求めたり重複なく数え上げることができる。 和の法則・積の法則の利用場面を理解し、事象に応じて使い分けて場合の数を求めることができる。 積の法則が、既習の樹形図の特別な場合であることを理解できる。 順列の公式を利用することができる。 簡単な場合の数を、順列の考え方を活用して求めることができる。 順列の組数を階乗の記号で表し、それを活用できる。 様々な場合の数を、順列、円順列 	課題等提出物の状況 小テスト 定期考査

②

単元名	指導と評価の計画 (33時間)
・組合せ	<p>重複順列の区別を付けて求めることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な場合の数を数えるのに、順列の考え方が使えることに興味・関心をもつ。 組合せの組数と順列の組数の違いを理解している。 組合せの公式を利用することができる。 簡単な場合の数を、組合せの考え方を活用して求めることができる。 組合せの性質を理解し公式を利用することができる。 様々な場合の数を、組合せの考え方を活用して求めることができる。 様々な場合の数を数えるのに、組合せの考え方が使えることに興味・関心をもつ。 試行の結果の事象を集合として表すことができる。
第2部 確率	<p>・事象と確率 ・確率の計算 ・独立な試行と確率 ・条件付き確率 ・確率の加法 ・課題学習</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 確率の定義を理解し、確率を求めることができる。 試行の結果を集合と結び付けて、事柄の起こりやすさを数量でとらえることができる。 確率の計算に集合を活用し、確率を求めることができる。 相反事象の意味を理解し、確率を求めることができる。 余事象の意味を理解し確率を求めることができる。 具体的な例をもとに、独立な試行の確率を求めることができる。 独立な試行の確率を、公式を用いて求めることができる。 反復試行の意味を理解し、確率の求め方を組合せの考えと関連付けて理解できる。また、公式を用いて反復試行の確率を求めることができる。 条件付き確率の定義を理解し、確率を求めることができる。 確率の加法定理を理解し、確率を求めることができる。 第1章で学んだ内容に関する課題について、主体的に学習し挑戦することを通して、数学のよさを認識する。

③

【 数学A 】指導と評価の単元計画

1 単元名：図形の性質

2 単元の目標：図形の性質について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習得を図り、事象を数学的に考える力を養い、数学のよさを認識できるようにするとともに、それらを活用する態度を育てる。

3 単元の評価規準

関心・意欲・態度	基本的な見方や考え方	技能	知識・理解
図形の性質における考え方に関心をもつとともに、数学的によく考えたり、思考の過程を振り返りながら考えたりすることを通して、数学的な見方や考え方を身に付けていく。	図形の性質において、事象を数学的に表現・処理する仕方や予想して説明するなどの方法を身に付けていく。	図形の性質において、事象を数学的に表現・処理する仕方や予想して説明するなどの方法を身に付けていく。	図形の性質における基本的な概念、原理・法則などのつながりを理解し、基礎的な知識を身に付けていく。

4 指導と評価の計画 (33時間)

次 程	(小単元名)	評価の観点	評価規準等	評価方法等
単 元	学習活動	関 見 技 知		
第1部	平面図形			
1 次 25 時 間	・図形の基本 ・角の二等分線と線分の比 ・三角形の外心、内心、重心 ・円周角の定理 ・円に内接する四角形		<ul style="list-style-type: none"> 図形の基本性質を理解し、それらを用いて角の大きさや辺の長さを求めることができる。 角の二等分線と線分の比の定理を理解し、それを用いて辺の長さを求めることができる。 外角の二等分線についても同様の定理が成り立つことに興味をもつ。 三角形の外心、内心、重心の性質を理解している。 円周角の定理を理解し、角の大きさを求めることができる。 円周角の定理の逆を理解し、等しい角に等しいことを考えることができる。 円に内接する四角形の性質を理解し、角の大きさを求めることができる。 四角形が円に内接する条件を理解し、円周角の定理を用いて角の大きさを求めることができる。 鋭角と鈍角のつくる角の性質を証明する際に、場合分けをしながらかけることができる。 鋭角と鈍角のつくる角の性質を理解し、角の大きさを求めることができる。 	課題等提出物の状況 小テスト 定期考査

(ウ) 「評価規準」、「判断基準」を設定した評価授業の評価例



「評価規準」、「判断基準」を設定した評価授業の評価例

授業者	実施日時	教科・科目	実施学期
御座 牧園 雅八重	7月8日(土)	国語総合	3年1～3組

- (1) 単元・題材名(内容)
表現の発展「資料に基づいて説明する」
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
- 今年度設定したものについて
表現の分野に関しては評価基準・判断基準を設定しやすく、妥当な基準となっていたと考える。
 - 昨年度以前に設定したものについて
※ これまでに作成してきた指導と評価の「年間・単元計画」の見直しの観点から
- (3) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて記述)
- 判断基準Bで評価する「主となる発問・課題」
 - 道順を地図に基づいて説明しよう。
 - 判断基準Bの「判断の要義」
 - 道順を伝えるために必要な情報を理解し、その情報を踏まえた説明をしている。
 - 相手に必要な情報が正確に伝わるように配慮することの重要性を理解している。
 - C状況生徒への「補充指導の手立て」
道順説明のポイントを分析し、道順説明に必要なポイントとその情報の重要性を整理する。
 - B状況生徒への「深化指導の手立て」
道順を説明する相手を意識して、より伝わりやすい表現を考えるよう、推敲を促す。
- (4) 評価授業について(評価授業の評価) ※ 授業をしてみても、参観してみてもどうだったか
- 授業の構成・進め方について
※ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」の兼ね合いという観点も含む
前半に教科書の記述を基に道順説明のポイントを整理し、後半に道順説明のポイントを踏まえて新たな地図を基に道順説明を記述させた。今回は1時間の授業で行ったが、教科書の説明のポイントを丁寧に既読したり、生徒発表後の振り返りの時間まで合めると2時間構成のほうがよかった。
 - 言語活動について
※ 受容・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
生徒は相手を意識して話す内容を工夫する経験に乏しいように思う。誰に向けた話なのか、相手にとって必要な情報は何か等、相手を想定して言語活動を行う経験を積み重ねることでコミュニケーション力の向上を図りたい。また、今回の表現の学習に関しては、難しい語彙を採用する必要がなく、むしろ、伝える相手を意識して、分かりやすい表現が求められるが、活動によっては使用する言葉を指定して採用語彙を増やす手立てがとれるとよい。
 - 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む
ポイントとして判断基準を生徒にも提示したため、それを踏まえた記述は生徒にとって取り組みやすく、思考しやすい課題であった。
 - 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について
相手を想定したり、説明するだけでなく、説明の聞き手になることで、より分かりやすい表現を考えることができた。誤解を生む表現になっていないか、聞き手のことを考え、自主的な推敲へと促したい。

- 「文章の読解・整理・表現」、「論理的思考」を定着させるためのパターン化について
※ 及第が可能な教師のみ
思考のパターンを丁寧におさえることは重要だが、少ない取り組みでは定着は難しい。パターン化しやすい課題から繰り返し定着を図り、より複雑な思考を必要とする課題へ移行させていきたい。
 - 生徒の受容等
判断基準となるポイントが明確で分かりやすく、生徒が意欲的に取り組むことができた。
話し手としてだけでなく、聞き手としても活動に参加することで、相手に必要な情報を意識した説明の仕方を考えることができたようである。
- (5) その他自由記述(課題も含めて)
- 評価基準・判断基準の設置は一定水準の目安として取り組むには、設定する段階で目標や学習内容が明確になり、生徒にとって分かりやすい授業につながる。1授業時間内での受容が捉えやすい。
- 判断基準の設定は、汎用性のある取り組みやすい課題はいいが、複雑になればなるほど、実態基の大きい生徒個々への課題の設定が必要になってくる。目安としての判断基準の設定はできるが、やはり授業をする段階で、目標や基準を見直し、個々の生徒へ対応した基準にしていく必要があるように思う。

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅲ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
御殿 奈充	7月6日(木)5校時 7月8日(土)1校時	公民科・現代社会	商業工芸科 3年2組

- (1) 単元・題材名(内容)
現代社会の諸課題とそのとらえ方「人口・資源・エネルギー」
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
- 今年度設定したものについて
 - 生徒の実態に対し、妥当な設定であるとする。また、授業の主となる疑問や疑問を考えるうえでも有効なものである。
 - 昨年度以前に設定したものについて
 - ※ これまでに作成してきた指導と評価の「年間・単元計画」の見直し観点から今年度設定したものである。
- (3) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて記述)
- 判断基準Bで評価する「主となる疑問・課題」
 - 日本の発電エネルギーの現状について、表から分かることをまとめる
 - 日本の発電エネルギー政策について、現状に対する今後の在り方を考える
 - 判断基準Bの「判断の要素」
 - 「日本のエネルギー自給率」「発電エネルギー割合の変化」「火力発電(化石燃料)」「再生可能エネルギー」という4つのポイントについて、読み取った内容を適切にまとめている。
 - 1で読み取りまとめた日本の発電エネルギーの現状を踏まえ、(現状に対応させながら)今後の在り方についてまとめている。
 - C状況生徒への「補充指導の手立て」
 - ①表から読み取れる内容を表ごとに確認しながらまとめる。
②まとめた内容から問に答えるために必要なポイントを確認する。
③問と照らし合わせながら、ポイントの正誤・過不足を確認させる。
④問とポイントの関係性、ポイントどうしの関係性を確認しながらまとめる。
 - ①現状から考えられる今後の在り方を1のポイントに即して確認する。
②ポイントどうしのまとめ方(ポイントどうしの統合や付加すべき内容等)を確認する。
③問と照らし合わせながら、今後の在り方についてまとめる。
 - B状況生徒への「深化指導の手立て」
 - 1・2ともに、より論理展開や文法的に優れた解答(文章)となるように指導する。
- (4) 評価授業について(評価授業の評価) ※ 授業をしてみて・参観してみてどうだったか
- 授業の構成・進め方について
 - ※ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」の兼ね合いという観点も含む
 - 前半に「知識・理解」の授業を行い、後半に「思考・判断・表現」に特化した授業を行うという授業構成とした。「知識・理解」と「思考・判断・表現」のバランス良く授業を進められたと思うが、「思考・判断・表現」部分は、授業時だけでは終わらず、最後のまとめは自宅課題となった(提出物を採納)。
 - 言語活動について
 - ※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
 - 科目の特性として、現代社会は「知識・理解」の学習から言語活動を伴う「思考・判断・表現」の学習に発展させやすい。この評価授業のような取り組みを積み重ねることで、学力(一般教養)だけでなく、論理的思考と表現力を鍛え、コミュニケーション力の向上が期待できるのではないかと考える。

・ 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む
学習した知識を活用しながら、問に対して自分の考えを記述させることで評価を行った。「思考・判断・表現」を適切に評価できたものと思う。

・ 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について
最初は自分で問に対する答を考えさせる。その後、①答えるべきことの理解(問の理解)、②ポイントを見付ける、③問と照らし合わせながらポイントの正誤・過不足・ポイントとの関係性を考える、④問とポイントの関係性を適切に表現させる、という流れで補充指導を行った。この流れで補充指導を行うことで、自力でB状況の解答に到達することができた。

・ 「文章の読解・整理・表現」「論理的思考」を定着させるためのパターン化について
※ 取組可能な教科のみ
課題(文章)の読解、思考の「整理・表現(論理的思考)」の仕方について普通5教科で話し合い、前述の補充指導の流れを共通実践することとした。この流れだと生徒も論理的に考えやすく、表現もしやすいようであった。継続して取り組んでみる必要がある。

・ 生徒の実答等
授業後の生徒の感想として、「ポイントをしぼり、(考える)順番を示してくれたことで、情報や内容を読み取ったり、捉えたりしやすかった。」「一つ一つポイント見付けながらまとめる学習は、考えやすかった。この経験をこれからの学習に生かしたい。」等があった。

(5) その他自由記述(課題も含めて)

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅲ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
清水 百香	6月29日(木)5校時	数学A	3年1組

- (1) 単元・題材名(内容)
確率
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
- 今年度設定したものについて
生徒の実態に比べて少しハードルの高いものになっている項目もあるので、また検討が必要であるが、生徒の実態と単元のレベルの差を埋めるのが難しい現状もある。
 - 昨年度以前に設定したものについて
※ これまでに作成してきた指導と評価の「年間・単元計画」の見直しの観点から
- (3) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて記述)
- 判断基準Bで評価する「主となる疑問・課題」
 - 1 場合の数と確率の違いを説明することができる。
 - 2 起こりうるすべての場合の数と事象の場合の数から確率を求めることができる。
 - 判断基準Bの「判断の要素」
 - 1 答えの表記が「整数」か「分数」かの大まかな違いを捉えることができている。
 - 2 問題文から、起こりうるすべての場合の数と事象の場合の数を区別して求め、定義に代入できている。
 - C状況生徒への「補充指導の手立て」
 - 1 場合の数と確率の違いをまとめたものをプレゼンテーションを用いて確認し、今解いている問題がどちらの問題か判断しよう言葉掛けをする。
 - 2 問題文から「起こりうるすべての場合の数」を示している文と「事象の場合の数」を示している文を区別し、それぞれの場合の数を求めるよう言葉掛けをする。
確率の求め方をプレゼンテーションを用いて確認する。
 - B状況生徒への「深化指導の手立て」
解答の過程を順序立てて説明(記述)することができる。
- (4) 評価授業について(評価授業の評価) ※ 授業をしてみて・参観してみてどうだったか
- 授業の構成・進め方について
※ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」の兼ね合いという観点も含む
判断基準Bを設定することで、授業の山場を意図しながら授業を展開することができた。また、その山場を乗り越えるために必要となる知識や技術を授業冒頭で確認するという流れが自然と定着してきた。
 - 言語活動について
※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
積み重ねの教科であるため、既習の学習内容が定着していなかったり、学習と学習のつながりを理解していないために論理的思考に入れないことが度々あったので、単元の導入段階での系統性の確認と、毎時間の前時の振り返ることによって、キーワードを意図した言語活動が展開できるようになりつつある。

- 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む
それまでに得た知識や技能を用いて記述式の解答をさせることで評価を行った。思考・判断・表現の評価を意図することで、答えの正誤にとらわれず、考えの過程に着目して生徒の回答を捉え、評価することができた。
 - 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について
判断基準Bの設定により授業者として一定の目標を定め、その前後のつまづきや、早い目標達成に対応できるように補充指導や深化指導を考えることで、その時間に必要とされる教材が整理され、準備がしやすくなった。
 - 「文章の読解・整理・表現」「論理的思考」を定着させるためのパターン化について
文章題や証明問題などの記述式の解答が求められる問題において、説明のパターン化ができないか、算数・数学科で検討中である。問題または生徒の実態によって総合的思考と分析的思考のどちらが適切かが異なるので、その点も踏まえた検討が必要である。
※ 教師が可能な範囲のみ
 - 生徒の回答等
毎回の授業で「何を求めたいのか」「なぜそうなるのか」と見問するので、生徒もそれらを聞かれることをある程度予測して発言するようになってきた。
- (5) その他自由記述(経路も含めて)

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅲ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
田川	7月4日 7校時	理科・物理基礎	理系工業科 3-2

- (1) 単元・題材名(内容)
ニュートンの運動の3法則「運動方程式」
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
- 今年度設定したものについて
生徒の発達段階を考慮したもので、妥当であると考え。
 - 昨年度以前に設定したものについて
※ これまでに作成してきた評価と評価の「年間・単元計画」の見直し観点から昨年度は実験前と実験後にそれぞれ0.5時間ずつ追加していたが、生徒の意識の流れを考慮し、1時間の授業で設定した。
- (3) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて記述)
- 判断基準Bで評価する「主となる発問・課題」
- ①様々な映像や資料を見て、物体の運動の様子がどのように変化しているかを記述する。
②物体の運動にはどのような要素が関係していて、それらの値が運動にどのような影響を及ぼしているのかを考える。
- 判断基準Bの「判断の要素」
- ①「運動している物体は運動し続けようとしている」
「静止しているものは静止し続けようとしている」
「物体の加速度は加える力の大きさに比例している」
提示した映像・資料を読み取り、以上の3つのポイントについて適切に表現している。
②対照実験の様子から、物体の運動の様子には「質量・加速度・力」の3つのポイントが関係していて、加速度の大きさは力の大きさに比例していることを表現している。
- C状況生徒への「補充指導の手立て」
- ①映像・資料から読み取れる内容を客観的にまとめる。
②質量さまざま物質を実際に運動させる実験を数回行い、質量の変化が運動の様子にどのような影響を及ぼしているか記述させる。
- B状況生徒への「深化指導の手立て」
- ①実物を使った演示実験を行い、実感を伴った理解ができるような指導をする。
- (4) 評価授業について(評価授業の評価) ※ 授業をしてみて・参加してきてどうだったか
- 授業の構成・進め方について
※ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」の兼ね合いという観点も含む
今回の授業は運動方程式の概念を理解することが目的の授業であったので、「知識・理解」と「思考・判断・表現」に重きを置いた授業となった。
 - 言語活動について
※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
①物体の運動の様子や運動の法則性を表現することを通して「思考・判断・表現」の力を育てる授業ができた。自身の考えだけでなく、他の生徒の考えを理解した上で自身の考えを容認させ繰り返して学習ができた。
②物理現象の分析をし、辻褄が合うような表現を考えることで「論理的思考力」を育てることができたと考えられる。

- 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む
①自身の経験だけで説明するのではなく、誰かが納得できるように既習事項をキーワードとして取り上げながら自身の考えを表現させた。目的の現象を分析し人に伝えるため、どのような表現をしているかで「思考・判断・表現」を判断することができた。
 - 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について
①視覚情報を活用したり実際に物体を運動させることで、視覚以外で実感を伴えるような手立てを立てることができた。
②補充指導が必要な生徒には以下の手順で支援を行った。
③実験を行い、質量や加える力の大きさを変えたときの運動の様子の違いを実感させる
④問の理解(どのように記述すれば運動の様子を表現できるか)
⑤ポイントを見付ける
⑥ポイントの正誤・過不足・ポイントの関係性を考える(自分で考えた後、他の生徒と話し合う)
⑦問とポイントの関係性を適切に表現する。
 - 「文章の探察・整理・表現」、「論理的思考」を定着させるためのパターン化について
※ 最近可能な教科のみ
教科の特性として科学的思考の積み重ねが学力の定着に欠かすことができないため上述した補充指導の手立ては物理だけでなく、他の科目の授業でも有効な授業パターンになり得ると感じた。
 - 生徒の受容等
問とポイントの関係性を考える時間しっかり設定することで、自身の元々の考えを構築し、より適切な表現方法を考える様子がみられた。自身の考えを文書化し発表させることで、他者が理解しやすいように配慮するようになった。
- (5) その他自由記述(課題も含めて)

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅲ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
岩瀬 玲那	5月16日(火)	コミュニケーション	3-1
	6月1日(木)	英語1	3-2

- (1) 単元・題材名(内容)
Lesson 11 "Ideas from Nature" 分詞構文
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
- 今年度設定したものについて
評価規準に基づき、判断基準を学習の実態に合わせた設定にしたため、妥当であった。
 - 昨年度以前に設定したものについて
※ これまでに作成してきた評価と評価の「年間・単元計画」の見直し観点から
生徒の学習の実態に合わせて、評価対象、単元計画の時期に若干の変更を加えたが、評価規準は妥当である。判断基準は、授業をする際に生徒や学級の実態に合わせて変更した。
- (3) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて記述)
- 判断基準Bで評価する「主となる疑問・課題」
「本文内容に関する質問に対する解答。」
1 Why do we use "lotus effect" paint for houses?
2 What does nature give us?
 - 判断基準Bの「判断の要素」
1 三単現のSをとることができているか。「家がきれいになる」という記述。
2 SVOの語順。
 - C状況生徒への「補充指導の手立て」
文法の確認。助動詞と三単現の用法の確認。
 - B状況生徒への「深化指導の手立て」
内容が把握できた上で、文法構造の説明を日本語で記述し、説明させる。
助動詞を活用した例文を作成させる。
- (4) 評価授業について(評価授業の評価) ※ 役割をしてみても、参観してみてもどうだったか
- 授業の構成・進め方について
※ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」の兼ね合いという観点も含む
評価対象が「思考・判断・表現」した解答記述だが、知識や技能に含まれる「文法」を誤って解答してしまうことが多かった。そのため、評価規準の「内容を理解する」から逸れ、文法を説明させ、単元の目標からずれることがあった。
 - 言語活動について
※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
単元の評価基準のひとつである文法理解と活用を記述し、生徒に説明をさせることで、思考の過程が生徒自身も教員も分かり、その後の定着度も上がっていた。
ポイントを示し、その関係性を考えた上で説明させることで、論理的に解答までたどり着くことができた。
 - 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む
評価対象の精選が必要だと感じた。

- 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について
- 「文章の採択・整理・表現」、「論理的思考」を定着させるためのパターン化について
※ 教員が可能な範囲のみ
- 生徒の要素等
生徒自身も、ポイントの関係性を考えてから解答をすることで、思考が整理され、解答しやすくなったと言っていた。
- (5) その他自由記述(課題も含めて)
単元が終わった後の文法の定着も良く、問いの英文で着目すべき点、問いに対する解答に含めなければならないポイントを少しずつ理解し、パターン化できているように思う。
生徒と教員が評価の基準を共有することで、生徒も記述しやすくなったと感じた。

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅲ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
伏元 哲 立和 豊	平成 29 年 6 月 12 日 (月) 6 校時	保健体育(体育) バレーボール	高等部 1 年 高等部 3 年

- (1) 単元・題材名(内容)
単元：球技 題材：バレーボール
内容：これまでの反省をゲームにどう生かすかを考える
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
・今年度設定したものについて
→ 評価規準、判断基準は妥当なものであった。単元の目標と評価規準の4つの観点を同じものにし、系統性をもって設定することができた。
・昨年度以前に設定したものについて
→ 今年度設定したものである。
- (3) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて記述)
・判断基準Bで評価する「主となる発問・課題」
① これまでの課題と改善策、今日の練習の作戦を話し合おう。(試合前)
② 本時の課題に向けた取り組みの反省と今後の課題について話し合おう。(試合後)
・判断基準Bの「判断の要素」
① チームや自己のこれまでの課題を理解し、説明している。
ポイントとなる表現【ラリーが続かない】【レシーブが上手にできない】
【返事が小さい】【自分の役割が分かっていない】
② 課題の解決に向けた意見を表出している。
③ 本時の課題点とこれからの解決策を説明している。
ポイントとなる表現【体の向き】【とりやすいパス】【膝の使い方】
【仲間への知らせ方(返事)】
・C状況生徒への「補充指導の手立て」
① これまでの練習の中で、どんなことがうまくいかなかったかを考えるようにする。
② うまくいかなかった原因を考えるようにする。
③ うまくできるようにするために、改善策を考えるようにする。
・B状況生徒への「深化指導の手立て」
①のとも、より優れた説明となるよう、不足する語句や表現について指導したり、文章として整合性の高いものとなるよう指導する。
- (4) 評価授業について(評価授業の評価)※ 授業をしてみて・参観してみてどうだったか
・授業の構成・進め方について
前半で1学年及び2学年で習得した「知識・理解」の部分を復習したり、基礎技能を定着させるために、基本となる動きの確認や体の動かし方について学習した。その中で、イメージ通りの動きができていない生徒がいたときには、随時流れを止め、「技能向上のためのポイント」や「チーム内で連携した動きができるための改善点」を個人及びチームで考え、話し合う時間を設けるようにした。繰り返し行う中で、こちらが設定せずとも自発的に友達同士話し合う姿が見られた。
・言語活動について
実技科目ということで、言語活動を充実させればさせるほど、体を動かせる時間が少なくなり、運動量の確保が難しい。しかし、教師側が意図的に話し合い活動ができる環境をつくることで、慣れてくると時間を設けなくとも自然に話し合うことができるようになりつつある。また、1年生と一緒に活動に取り組むことで、運動を苦手とする1年生へ言葉で教える様子も見られた。

・ 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
授業の中で言語活動の機会を設けるとともに、授業後毎に、個人の確認シートに「できたこと」、「難しかったこと」、「難しかったことに対する改善方法」を文章で記述させることで、前時までの振り返りや確認が有効であった。発言ではなくても各自で記録しておくことで、その時の思ったことや考え方を生徒も教師も確認することができた。

・ 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について
まずは自分のボディイメージを考えさせ、正しい動きと比較できるようにする。その後、周りの友達の見え方を聞いたり教師のアドバイスを聞いたりする中でイメージをつかめるようにする。必要に応じてタブレット機器などを使用し、自己を客観視できるようにする。そのことにより、良い部分や改善点などを見出し、B状況の解答に到達することができた。

・ 生徒の関与等
お互いの良いプレーをほめたり、難しい所をアドバイスする様子が自然に見られるようになった。また、作戦をお互いに考えて話し合ったり、解決策を話し合ったりする様子が自然に見られるようになった。

(5) その他自由記述(課題も含めて)

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅲ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
西山・澤山	7月12日(木)	家庭総合	2-1・2・3

- (1) 単元・題材名(内容)
 単元：子ども遊び 小単元：段ボールハウスを作ろう
 内容：子どもにとって遊びがどのような役割を果たしているかを理解し、子どもの発達を促すような遊びを計画する。また、おもちゃ制作の実習として、段ボールハウス作りに取り組む。
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
 ・今年度設定したものについて
 ・昨年度以前に設定したものについて
 妥当であった。実習の内容は昨年度と異なるが、内容や生徒の実態に応じて判断基準を設定したことで昨年度と同じ評価規準で評価ができた。
- (3) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて記述)
 ・判断基準Bで評価する「主となる発問・課題」
 ・子どもの発達段階(3~4歳)に合った段ボールハウスの設計をしよう。(話し合い活動)
 ・判断基準Bの「判断の要素」
 1 対象年齢に合った遊びが展開できる段ボールハウスになっているか。
 2 子どもが安全に遊べる工夫をしているか。
 ・C状況生徒への「補充指導の手立て」
 1 対象年齢の運動、言葉、情緒、遊びの種類などの発達段階について確認し、段ボールハウス内でどのような遊びが展開されるかを考えさせる。
 2 大きさ、採光、通気などの視点で子どもが健康的に遊べる空間であるかを考えさせる。
 ・B状況生徒への「深化指導の手立て」
 1 ひとり遊び、二人遊びなどの様々な遊びの場面を想定し、発見的な遊びができるような工夫を考えさせる。
 2 様々な遊びを想定し、起こり得る危険性とその対策について考えさせる。
- (4) 評価授業について(評価授業の評価) ※ 授業をしてみて・参観してみてどうだったか
 ・授業の構成・進め方について
 ※ 「知識・過程」及び「技能」と「思考・判断・表現」の組み合わせという観点も含む
 前単元までの保育分野の内容に加え、1年次に学習した住居分野、他教科、専門教科の学習内容を総合的、横断的に活用する活動を設定したことで、課題について多角的に捉えて考える様子が見られた。制作実習では主に技能についての評価を行うが、技能の習得には制作の過程で様々な課題について工夫や改善を繰り返すことが重要であるため、思考力、判断力、表現力を高めることが技能の向上につながると考えられる。
 ・言語活動について
 ※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
 生徒6人で段ボールハウスの設計図を作成する課題に取り組んだ。幼児の体型から割り出した大きさ、通気性を確保する窓の配置、屋根の傾きなど生徒が各人で考えた案を発表し合うことで、新たな気付きを生み出し、学びを深めることができた。また、三角形や四角形など他教科で得た知識や技能を活用しながら計画を進めることで、生徒同士の学び合いの場面が生まれた。

- ・ 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
 ※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む
 本時は段ボールハウスの設計についての話し合い活動であったため、思考・判断・表現の評価を中心に行った。事前に個別でワークシートに記入した内容を基に話し合い活動を行ったため、評価の場面がワークシートと話し合い活動の2段階設定できた。ワークシートから話し合い活動での発言へと考えが発展した様子も評価ができた。
 - ・ 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について
 ワークシート記入の段階では個別での活動であったため教師の働きかけが有効であったが、話し合い活動の中では生徒同士の学び合いが十分に行われ、教師は話題を整理する程度のかかりであった。
 - ・ 「文章の採録・整理・表現」、「論理的思考」を定着させるためのパターン化について
 ※ 取組が可能な教科のみ
 - ・ 生徒の実習等
 一問一答形式では発音に消極的な生徒も、段ボールハウス制作という目標についての話し合い活動では積極的に参加する場面が見られた。また、進行、記録、計算、描画など生徒が自分の役割を探し、自発的に活動できていた。
- (5) その他自由記述(課題も含めて)

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅲ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
西山	5月31日(水)	課題研究	3-1

- (1) 単元・題材名(内容)
単元：シャツブラウスの応用(袖フリル型紙作成)
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
今年度設定したものについて
課題研究については、前期・後期で生徒が課題を設定して実施するため、評価規準が汎用性の高いものになる。そのため、生徒の設定した課題の内容を受けて、判断基準をより具体的に設定して評価を行う必要がある。
- (3) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて記述)
判断基準Bで評価する「主となる発問・課題」
・袖フリルの形、大きさ、位置を決めよう。
・判断基準Bの「判断の要素」
1 形や大きさを覚えて設けパターンのフリルを試作し、それぞれの印象を言葉で説明することができるか。
2 採用したパターンの採用理由を説明できるか。
・C状況生徒への「補充指導の手立て」
1 左右の肩に違うパターンを当てて、比較して考えられるようにする。
2 他のパターンと比較してどうだったかを考えて説明できるようにする。
・B状況生徒への「深化指導の手立て」
1 位置や向きによってどのように印象が変化するかを考えさせる。
2 採用したパターンの仕立て方を考えて説明できるようにする。
- (4) 評価授業について(評価授業の評価) ※ 授業をしてみて・参加してみてどうだったか
・授業の構成・進め方について
※ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」の兼ね合いという観点も含む
被服製作検定課題のシャツブラウスの応用の学習であり、脇スリット、ヨーク切り換え、ギャザー寄せ、袖フリルなどを加えた生徒がデザインしたシャツブラウスの製作の取り組んでいる。袖フリル以外は既存の型紙からの変更であるが、袖フリルは新たに型紙を起こす必要があり、設けパターンの試作を行った。デザイン画のイメージを再現できるパターンを探る中で、同じパターンであってもギャザーの寄せ方や付ける位置によって印象が変わるため、細かい調整が必要であった。作業の過程ではファッション造形基礎、ファッション造形で身に付けた技能を活用することができた。応用の製作では技能だけでなく、縫製や型紙作成に関する知識も必要となってくる。また、それらの知識を生徒の設定した課題解決のために適切に選択して活用する力も必要であるため、思考・判断・表現の過程は不可欠である。
・言語活動について
※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
生徒一人の授業、実技科目ということもあり、意図的に言語活動を設定しなければ、作業中心の学習になりがちである。しかし、作業の中にも言語活動の機会も多く、教師の働きかけが重要であると感じる。本時では、袖フリルの型紙を考える活動で、比較的言語活動を設定しやすかったが、生徒の語彙の不足からB基準達成がやっとだったところであった。

・評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む
作業中に評価をするため、ワークシートの記入に時間をとることが難しく、発言での評価となった。思考の過程を整理して記録するためにもワークシートや黒板に書く活動も取り入れたいが、作業のと兼ね合いが課題である。

・補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について
作業を進めながらの指導であったため、教師が意図して働きかけをした。実際に製作中のシャツブラウスが目の前にあることで、実物を見ながら指導することができた。生徒は発問に対して実物を動かしたり身振りを変えたりして伝えようとしている様子だったが、言葉での説明は遅かった。

・「文章の採録・整理・表現」、「論理的思考」を定着させるためのパターン化について
※ 教師が可能な範囲のみ

・生徒の反省等
これまでの既存の型紙を用いた製作では、正確に、出来栄よく仕上げることを目標にすることが多かったが、応用の製作では自分のデザインを再現する方法を考えたところに重きを置いている。そのため、生徒は自分のアイデアを具体的にもち、それまでに身に付けた知識や技能を適切に活用しながら取り組む必要がある。本時においても、袖フリルというひとつの課題にじっくりと取り組んだことで、それまで気付かなかった構造や細部の仕立てを意識しながら製作に取り組むことができるようになった。

(5) その他自由記述(課題も含めて)

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅲ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
花立塚 臣・飯山 幸広	6月26日(月)	実習(金工分野)	高等部 3年2組

- (1) 単元・題材名(内容)
旋盤作業(「ブロー」の製作)
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
- 今年度設定したものについて
総合的に判断し、妥当な目標だったと言える。
 - 昨年度以前に設定したものについて
※ これまでに作成してきた規準と評価の「年間・単元計画」の見直し観点から今年度設定したものである。
- (3) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて記述)
- 判断基準Bで評価する「主となる疑問・課題」
 - ①服装チェック, 安全確認。(観察)
 - ②製作品の現物を測定機器で計り, 製品の図面を制作する。(レポート)
 - ③製作に必要な作業内容と作業手順を検討しまとめる。(レポート)
 - 判断基準Bの「判断の要素」
 - ①自らの服装をチェックし, 服装を整える事ができる。(判断力)
旋盤作業前の安全点検を行うことができる。(判断力)
 - ②製作に必要な寸法を現物から測り, 作図することができる。(思考力)
 - ③図面を読み取り, 専門用語を用いて, レポートに作業手順をまとめることができる。(思考力)
 - C状況生徒への「補充指導の手立て」
 - ①熱した服装や安全点検を怠ると, どのような危険が生じるかを確認する。
 - ②現物と同じ物作りたいときは, どの幅や長さが必要かを一緒に確認する。
 - ③作業手順を実際に見せ, 作業名, 工具名, 旋盤の各部名称を確認する。
 - B状況生徒への「深化指導の手立て」
実際の作業を通じて, 作業手順が妥当であったかを考察し, レポートにまとめる。(思考力・表現力)
- (4) 評価授業について(評価授業の評価) ※ 授業をしてみて・観てみてどうだったか
- 授業の構成・進め方について
※ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」の兼ね合いという観点も含む
製品の設計図からではなく, 現物から複製品を製作することによって, 作図する作業から製作に必要な作業手順を自ら思考し, 文章として表現する力を養うことができる。そのため, 旋盤作業の知識のみならず, 測定機器の使用方法や製図の基礎知識も必要となるため, 「知識・理解」の深化に繋げることができる。
 - 言語活動について
※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
レポートによる文章の表現のため, 言語力の指導も正確に行うことができる。また, 自分の思考や知識を視覚化することにより, 自らの理解度も知ることができる。
 - 評価の方法や仕方, 評価対象の工夫について
※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む
実習において, 「思考・判断・表現」の評価は, 判断材料が少ないために評価基準を設定しにくい。工作機械や手作業では音が大きいので口話は難しい上, 作業中は使用機械が

ら目を離したり, 操作部分から手を離したりすると危険なため手話は多く使用できない。そのため, 本時のように授業時では「技能」の修得に観点を置き, 「思考・判断・表現」の判断については「知識・理解」と共にレポートに文章として記述させて評価をすることが望ましい。

- 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について
実際の作業から考察し, 文章化することで表現力を身に付けることができる。
- 「文章の読解・整理・表現」, 「論理的思考」を定着させるためのパターン化について
※ 成績が可能な教師のみ
- 生徒の受容等

(5) その他自由記述(課題も含めて)

「評価規準」・「判断基準」を設定した評価授業の評価Ⅲ

授業者	実施日時	教科・科目	実施学級
上杉 健二	7月4日(火) 1校時 7月6日(木) 5校時	理容技術理論	理容科 2年3組

- (1) 単元・題材名(内容)
ヘアカッティング 「スタンダードヘアの概要」
- (2) 評価規準・判断基準の設定について
- 今年度設定したものについて
生徒の実態に対し、4つの観点から考えて有効な設定であると考え
 - 昨年度以前に設定したものについて
※ これまでに作成してきた指導と評価の「年間・単元計画」の見直し観点から
本単元は2年次からの履修になるので比較対象なし
- (3) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて記述)
- 判断基準Bで評価する「主となる疑問・課題」
スタンダードヘアのカット基本原理の必要性、言葉の意味、カット技術について考える
 - 判断基準Bの「判断の要素」
スタンダードヘアのカット技術の理解、疑問に対して適切に答えを出せる。
ヘアスタイルの構成に関して、ポイントをまとめることができる
 - C状況生徒への「補充指導の手立て」
ウィッグを使い、実際の切り方を実演し1つ1つの技術を確認する。
確認した技術に対し疑問し、理解度を深めていく
 - B状況生徒への「深化指導の手立て」
ヘアスタイルを理論的に考えられるように指導する。
- (4) 評価授業について(評価授業の評価) ※ 授業をしてみて・参加してみてどうだったか
- 授業の構成・進め方について
※ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」の組み合わせという観点も含む。
「知識・理解」の授業をし、その後「思考・判断・表現」という流れで授業を行い、理解度を確認しながら進めたが、内容によっては座学だけでは理解しにくい部分もあり、実演も加えながら説明することによって理解できる部分もあった
 - 学習活動について
※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から
コミュニケーション力の向上という観点からカット技術、カットの基本原則に対し疑問を繰り返し、生徒自身の考えを伝えられるように授業のなかで指導ができた
 - 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について
※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む
ヘアスタイルの作り方、理論的な部分を理解できたが、「思考・判断・表現」の観点であるとの場面でその技術を使うのかということまでは授業の中では確認ができなかったため、実演などを使って確認をすることになった
 - 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について
ウィッグを使うことにより、文字情報だけではなく視覚として理論を見ることで、より理解度を深めることができた。
 - 「文章の読解・整理・表現」、「論理的思考」を定着させるためのパターン化について
※ 取組が可能な教材のみ

・ 生徒の受容等
ポイントをまとめ、1つ1つの技術を理論的に理解し実習へ取り組む様子が見られるようになった。B状況、深化指導には教科書・プリントだけではなく実際のウィッグを用いた授業構成がよいと思う。

- (5) その他自由記述(課題も含めて)

エ 平成29年度「評価規準」、「判断基準」を設定した評価授業の評価のまとめ

(ア) 単元・題材名 (内容)

各教科・科目で設定

(イ) 評価規準・判断基準の設定について

a 今年度設定したものについて

○ 生徒の実態等に対し、妥当な評価規準・判断基準の設定であると考える。

(国語・社会・数学・理科・英語・工業・理容)

○ 単元の目標と評価規準の4つの観点を同じものにし、系統性をもって(バランスよく)設定することができた。(体育・工業)

○ 授業の主となる発問や展開を考える上でも有効なものであった。(社会)

△ 生徒の実態に比べて少しハードルの高いものになっているので、更なる検討が必要。生徒の実態と単元のレベルの差を埋めるのが難しい現状がある。(数学)

△ 今年度の科目(課題研究)では、生徒の個別課題についての設定となるため、評価規準は汎用性の高いものとし、生徒の個別課題の内容を受けて、判断基準をより具体的に設定して評価を行う必要があった。(被服)

b 昨年度以前に設定したものについて

○ 妥当な設定であったと考える。(数学)

○ 評価規準は変えず、判断基準や時間配分、学習内容を生徒や学級の実態に合わせて変更することで対応できた。(理科・英語・家庭)

(ウ) 指導のポイントの設定状況(授業で実際に設定したものについて)

・ 判断基準Bで評価する「主となる発問・課題」

・ 判断基準Bの「判断の要素」

・ C状況生徒への「補充指導の手立て」

・ B状況生徒への「深化指導の手立て」

各教科・科目で概ね適切に
設定できた。

(エ) 評価授業について(評価授業の評価)

※ 授業をしてみて・参観してみてどうだったか

a 授業の構成・進め方について

※ 「知識・理解」及び「技能」と「思考・判断・表現」の兼ね合いという観点も含む

○ 判断基準Bを設定することで、授業の山場を意識しながら授業を展開することができた。また、その山場を乗り越えるために必要となる知識や技術を授業冒頭で確認するという流れが自然と定着してきた。(数学)

○ 今回は運動方程式の概念を理解することが目的の授業であったので、「知識・理解」と「思考・判断・表現」の双方に重きを置いた授業とすることができた。(理科)

- 評価のポイントを教員が把握するだけでなく生徒にも示すことで、内容が整理された文を書かせることができた。(英語)
- 前半で過去に学習した「知識・理解」部分を復習し、基礎技能を定着させるための基本となる体の動かし方等を学習した。その中で、イメージ通りの動きができていない生徒がいたときには、随時流れを止め、「技能向上のためのポイント」や「チーム内で連携した動きができるための改善点」を個人及びチームで考え、話し合う時間を設けるようにした。繰り返し行う中で、教師が設定せずとも自発的に生徒同士で話し合う様子が見られた。(体育)
- 前単元までの内容に加え、前年度学習した分野、他教科、専門教科の内容を総合的、横断的に活用する活動を設定したことで、課題について多角的に捉えて考える様子が見られた。制作実習では主に技能について評価を行うが、技能の習得には制作の過程で様々な課題について工夫や改善を繰り返すことが重要であるため、思考力・判断力・表現力を高めることが技能の向上につながると考えられる。(家庭)
- 被服製作検定課題の応用学習であり、1・2年時に身に付けた技能を作業の過程で活用することができた。応用の制作では技能だけでなく、縫製や型紙作成に関する知識も必要となってくる。また、それらの知識を生徒の設定した課題解決のために適切に選択して活用する力も必要があるため、思考・判断・表現の過程は不可欠である。(被服)
- 製品の設計図からではなく、現物から複製品を製作することによって、作図する作業から制作に必要な作業手順を自ら思考し、文章として表現する力を養うことができる。そのためには、旋盤作業の知識のみならず、測定機器の使用手法や製図の基礎知識も必要となるため、「知識・理解」の深化にもつなげることができる。
(工業)
- 「知識・理解」の授業をし、その後「思考・判断・表現」という流れで授業を行い、理解度を確認しながら進めたが、内容によっては座学だけでは理解しにくい部分もあり、実演も加えながら説明することによって理解できる部分もあった。
(理容)
- △ 地図を基に道順を説明するという内容の課題を設定した。前半に教科書の記述を基にポイントを整理し、後半にポイントを踏まえて課題に対する解答をまとめ発表させた。今回は1時間の授業で行ったが、丁寧な教科書読解や発表後の振り返りの時間まで含めると2時間構成の方がよかったかもしれない。(国語)
- △ 前半に「知識・理解」の授業を行い、後半に「思考・判断・表現」に特化した授業を行うという授業構成とした。「知識・理解」と「思考・判断・表現」をバランスよく授業を進められたと思うが、「思考・判断・表現」部分は、授業時だけでは終わらず、最後のまとめは自宅課題となり提出物を添削した。(社会)
- △ 前時までの「知識・理解」及び「技能」が不十分だったため、本時の間に対する「思考・判断・表現」をスムーズに進められない生徒が多かった。そのため、前時の復習を行ったところ、それぞれの生徒が知識に基づいて思考・判断し、自分の考えとして表現することができた。(数学)

- △ 全てを自ら考えてアイデアを具体化する作業は知識・理解に関わる部分が多い。併せて、自らの技能レベルが作成できる構造に大きく影響する。思考・判断・表現において予備知識が十分でない場合は補足説明（補充指導）が多く、経験値によっては生徒の個人差が生じるため、生徒毎に判断基準を設定する必要がある。

（工業）

- △ 評価対象が「思考・判断・表現」した解答の記述であったが、知識や技能に含まれる「文法」を誤って解答することが多かった。そのため、評価規準中の「内容を理解する」から逸れて、「文法」を説明させなければならず、単元目標からずれることがあった。（英語）

b 言語活動について

※ 学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上という観点から

- 科目の特性として、現代社会は「知識・理解」の学習から言語活動を伴う「思考・判断・表現」の学習に発展させやすい。今回の評価授業のような取組を積み重ねることで、学力（一般教養）だけでなく、論理的思考と表現力を鍛え、コミュニケーション力の向上が期待できるのではないかと考える。（社会）
- 積み重ねの教科であるため、既習の学習内容が定着していなかったり、学習と学習のつながりを理解していないために論理的思考に入れないことが度々あったので、単元の導入段階での系統性の確認と、時間毎の前時の振り返りを行うことによって、キーワードを意識した言語活動が展開できるようになりつつある。（数学）
- 物体の運動の様子や法則性を表現することを通して、「思考・判断・表現」の力を育てることができた。自身の考えだけでなく、他の生徒の考えを理解した上で自身の考えを変容させ、練り上げていく学習ができた。（理科）
- 物理現象の分析をし、整合性がとれるような表現を考えることで「論理的思考力」を育てることができたと考えられる。（理科）
- スピーチの学習内容だったので、コミュニケーションは活発ではなかったが、相手の発表を聞いたときに、書き方のポイントが示されていたので生徒が内容を理解しやすい様子だった。（英語）
- 接続詞の論理的な役割を考えながら英文を書くことで、書いている生徒自身も発表を聞く生徒も内容を整理することができた。（英語）
- 単元の評価規準の一つである文法理解と活用を生徒に記述・説明させることで、思考の過程が生徒自身も教員も分かり、その後の定着度も上がっていった。（英語）
- 答えるためのポイントを示し、その関係性を考えた上で説明させることで、論理的に解答までたどり着くことができた。（英語）
- 実技科目ということで、言語活動を充実させればさせるほど、体を動かせる時間が少なくなり、運動量の確保が難しい。しかし、教師側が意図的に話し合い活動ができる環境をつくることで、慣れてくると時間を設けなくとも自然に話し合うことができるようになりつつある。また、3年生と1年生と一緒に活動に取り組むことで、運動を苦手とする1年生へ3年生が言葉で教える様子も見られた。（体育）

- 生徒6人で段ボールハウスの設計図を作成する課題に取り組んだ。幼児の体型から割り出した大きさ、通気性を確保するための窓配置、屋根の傾き等生徒が各人で考えた案を発表し合うことで、新たな気付きを生み出し、学びを深めることができた。また、三角比や製図法など他教科で得た知識や技能を活用しながら計画を進めることで、生徒同士の学び合いの場面が生まれた。(家庭)
- レポートによる文章の表現のため、言語力の指導も正確に行なうことができる。また、自分の思考や知識を視覚化することにより、自らの理解度も知ることができる。(工業)
- コミュニケーション力の向上という観点から、カット技術、カットの基本原則に関する発問を繰り返すことで、生徒自身の考えを伝えられるように授業の中で指導ができた。(理容)
- △ 生徒は相手を意識して話す内容を工夫する経験が不足しているように思う。誰に向けた話なのか、相手にとって必要な情報は何か等、相手を想定して言語活動を行う経験を積み重ねることでコミュニケーション力の向上を図りたい。また、今回の表現の学習に関しては、難しい語彙を活用する必要がなく、むしろ伝える相手を意識しての分かりやすい表現を求めたが、活動によっては使用する言葉を指定して活用語彙を増やす手立てがとれるとよい。(国語)
- △ 生徒の実態に合わせて補充指導、深化指導を行ない、生徒の論理的思考を助けることができたが、生徒間で意見を共有する時間を充分にとることができず、コミュニケーションが不十分であった。(数学)
- △ 生徒一人に対する実技科目ということもあり、意図的に言語活動を設定しなければ、作業中心になりがちである。しかし、作業の中にも言語活動の機会は多く、教師の働きかけが重要であると感じる。本時では型紙を考える活動で比較的言語活動を設定しやすかったが、生徒の語彙の不足からB基準達成が精一杯であった。
(被服)
- △ 教科の目標達成のために必要な学力・コミュニケーション力をもっていたが、論理的に専門分野のメカニズムや原理を理解するには、基礎的な能力が不足している部分も感じられた。今後も言語活動の鍛錬が必要な部分がある。(工業)

c 評価の方法や仕方、評価対象の工夫について

※ 思考・判断・表現を評価できたかという観点も含む

- ポイントとして判断基準を生徒にも提示したため、それを踏まえた記述は生徒にとって取り組みやすく、思考しやすい課題であった。(国語)
- 学習した知識を活用しながら、問に対して自分の考えを記述させることで評価を行なった。「思考・判断・表現」を適切に評価できたものと思う。(社会)
- それまでに得た知識や技能を用いて記述式の解答をさせることで評価を行なった。思考・判断・表現の評価を意識することで、答えの正誤にとらわれず、考えの過程に着目して生徒の変容を捉え、評価することができた。(数学)
- 自身の経験だけで説明するのではなく、誰もが納得できるように既習事項をキーワードとして取り上げながら自身の考えを表現させた。目の前の現象を分析し人に

伝えるため、どのような表現をしているかで「思考・判断・表現」を判断することができた。(理科)

- 授業の中で言語活動の機会を設けるとともに、授業毎に個人の確認シートに「できたこと」、「難しかったこと」、「難しかったことに対する改善方法」を文章で記述させることで、前時までの振り返りや確認が有効であった。発言は無くても各自で記録しておくことで、その時の思ったことや考え方を生徒も教師も確認することができた。(体育)
- 本時は段ボールハウスの制作についての話し合い活動であったため、思考・判断・表現の評価を中心に行なった。事前に個別でワークシートに記入した内容を基に話し合い活動を行なったため、評価の場がワークシートと話し合い活動の2段階設定できた。ワークシートから話し合い活動での発言へと考えが発展した様子も評価することができた。(家庭)
- 日常生活では経験できないような構造やアイデアに関しては、試作モデルの作成やその制作過程も含め興味・関心の涵養の時間に充て、段階的に構想実現へと導く工夫を行なった。(工業)
- △ 実習において、「思考・判断・表現」の評価は、判断材料が少ないために評価規準を設定しにくい。工作機械は手作業では音が大きいため口話は難しい上、作業中は使用機械から目を離したり、操作部分から手を離したりすると危険なため手話は多く使用できない。そのため、本時のように授業時では「技能」の習得に観点を置き、「思考・判断・表現」の判断については、「知識・理解」と共にレポートに文章として記述させて評価をすることが望ましい。(工業)
- △ ヘアスタイルの作り方などの理論部分は理解できたが、「思考・判断・表現」の観点である、どの場面でその技術を使うのかというところまでは授業の中だけでは確認ができなかったため、後の実習などを使って確認をすることになった。(理科)
- △ 知識・理解部分の習得が不十分だったことが原因で、思考・判断・表現の評価対象を導くまでに時間がかかった。(数学)
- △ 評価対象の精選が必要だと感じた。(英語)
- △ 作業中に評価をするため、ワークシートの記入に時間をとることが難しく、発言での評価となった。思考の過程を整理して記録するためにもワークシートや黒板に書く活動も取り入れたいが、作業との兼ね合いが課題である。(被服)

d 補充指導・深化指導の手立ての工夫や有効性について

- 相手を想定したり、説明するだけでなく、説明の聞き手になったりすることで、より分かりやすい表現を考えることができた。誤解を生む表現になっていないか、聞き手のことを考え、自主的な推敲へと促したい。(国語)
- 最初は自分で問に対する答えを考えさせる。その後、
 - ① 答えるべきことへの理解(問を分解するなどしながら問を理解)
 - ② 答えるために必要なポイントを見付ける
 - ③ 問と照らし合わせながらポイントの正誤・過不足・ポイント同士の関係性を考える

- ④ 問とポイントの関係性を踏まえながら解答として適切に表現させるという流れで補充指導を行なった。この流れで補充指導を行なうことで、自力でB状況の解答に到達することができた。(社会)
- 判断基準Bの設定により授業者として一定の目標を定め、その前後のつまずきや、早い目標達成に対応できるように補充指導や深化指導を考えることで、その時間に必要とされる教材が整理され、準備がしやすくなった。(数学)
- 視覚情報を活用したり、実際に物体を運動させたりすることで、聴覚以外で実感を伴えるような補充指導の手立てを行なうことができた。(理科)
- 補充指導の必要な生徒には以下の手順で指導を行なった。
- ① 実験を行ない、質量や加える力を変えたときの運動の様子の違いを実感させる
 - ② 問の理解(どのように記述すれば運動の様子を表現できるか)
 - ③ ポイントを見付ける
 - ④ ポイントの正誤・過不足・ポイントの関係性を考える
(自分で考えた後、他の生徒と話し合う)
 - ⑤ 問とポイントの関係性を適切に表現する。(理科)
- C状況生徒には、因果関係を図や文を使って考えさせたため、思考・判断・表現を評価しやすかった。(英語)
- 補充指導では、まず自分のボディイメージを考えさせ、正しい動きと比較できるようにする。その後、周りの生徒の意見を聞いたり教師のアドバイスを聞いたりする中でイメージをつかめるようにする。必要に応じてタブレット機器などを使用し、自己を客観視できるようにする。そのことにより、良い部分や改善点などを見出し、B状況の解答に到達することができた。(体育)
- ワークシート記入の段階では個別の活動であったため教師の働きかけが有効であったが、話し合い活動の中では生徒同士の学び合いが十分に行なわれ、教師は話題を整理する程度の関わりであった。(家庭)
- 試作したマシンのメカニズムや実験結果を基に、トライ&エラーで問題点を分析し改善に結び付ける思考力の育成のために、ディスカッションを繰り返した。
(工業)
- 実際の作業から考察し、文章化することで表現力を身に付けることができる。
(工業)
- ウイッグを使うことにより、文字情報だけでなく理論を視覚化することで、理解度をより深めることができた。(理容)
- △ B状況生徒へは、接続詞や表現の種類を多く示し発展的な表現を目指した。それらを使って伝えたい内容を書く生徒もいたが、なかなか書く内容が思いつかない生徒もいた。(英語)
- △ 作業を進めながらの指導であったため、教師が意識して働きかけをした。実際に制作中のシャツブラウスが目の前にあることで、実物を見ながら指導することができた。生徒は発問に対して実物を動かしたり、身振りを交えたりして伝えようとしている様子だったが、言葉での説明は難しかった。(被服)

- △ 問が端的であったため、問の分解が細かくなってしまい、生徒の混乱を招いてしまう場面があった。(数学)
- △ 補充指導に時間を割いたため、深化指導においては問を設定したものの指導にあたることはできなかった。(数学)

e 「文章の読解・整理・表現」, 「論理的思考」を定着させるためのパターン化について

※ 取組が可能な教科のみ

★ 【「文章の読解・整理・表現」, 「論理的思考」】 =

【「文章(課題)の読解(理解)」, 「思考の整理・表現(論理的思考)」】

であると考え、

「文章(課題)の読解(理解)」, 「思考の整理・表現(論理的思考)」の仕方のパターン化について5教科(国社数理英)で話し合い、以下の指導の流れを共通実践することとした。

- ① 答えるべきこと(理解) (問を分解するなどしながら問の内容を理解)
 - ② 答えるために必要なポイントを見付ける
 - ③ 問の内容と照らし合わせながらポイントの正誤・過不足・ポイント同士の関係性を考える
 - ④ 問の内容とポイントの関係性を踏まえながら解答として適切に表現する
- 共通実践の流れで指導を行なうと、生徒も論理的に考えやすく、表現もしやすいようであった。継続して取り組んでみる必要がある。(社会)
 - 教科の特性として、科学的思考の積み重ねが学力の定着に欠かすことができないため、共通実践の指導の流れ(手立て)は物理だけでなく、他の科目の授業でも有効な指導パターンに成り得ると感じた。(理科)
 - △ 問の分解を行なうことで、生徒は論理的思考に基づいて答えを導くことができた。数学において問の分解を行なう際には、読解力だけでなく数学の知識も必要とするため、思考・判断・表現の評価を行う発問をする前に、知識面や技能面を十分に定着させる必要があると感じた。(数学)
 - △ 文章題や証明問題などの記述式の解答が求められる問題において、説明のパターン化ができないか、算数・数学科でも検討中である。問題または生徒の実態によって総合的思考と分析的思考のどちらが適切かが異なるので、その点も踏まえた検討が必要である。(数学)
 - △ 論理的思考のパターン化はできたが、パターンだけで内容が深まらない生徒もいれば、追加の表現を用いて、更に内容を深めて記述できる生徒と二極化した。(英語)
 - △ 思考のパターンを丁寧におさえることは重要だが、少ない取り組みでは定着は難しい。パターン化しやすい課題から繰り返し定着を図り、より複雑な思考を必要とする課題へ移行させていきたい。(国語)

f 生徒の変容等

- 判断基準となるポイントが明確で分かりやすく、生徒が意欲的に取り組むことができた。(国語)
- 話し手としてだけでなく、聞き手としても活動に参加することで、相手に必要な情報を意識した説明の仕方を考えることができたようである。(国語)
- 授業後の生徒の感想として、「ポイントを絞り、(考える) 順番を示してくれたことで、情報や内容を読み取ったり、捉えたりしやすかった。」「一つ一つポイントを見付けながらまとめる作業は考えやすかった。この経験をこれからの学習にも生かしたい。」等があった。(社会)
- 毎回の授業で「何を求めたいのか」「なぜそうなるのか」と発問することで、生徒もそれらを聞かれることをある程度予測して発言するようになってきた。(数学)
- 発問後すぐに着目すべき点に気付いた生徒は少なかったが、問の分解や着眼点を示したことで、生徒全員が答えにたどり着くことができた。(数学)
- 問とポイントの関係性を考える時間をしっかり設定することで、自身の元々の考えを推敲し、より適切な表現方法を考える様子が見られた。自身の考えを文章化し発表させることで、他者が理解しやすいように配慮する様子が見られるようになった。(理科)
- 生徒自身もポイントの関係性を考えてから解答をすることで、思考が整理され、解答しやすいと言っていた。(英語)
- お互いの良いプレーをほめたり、難しい所をアドバイスする様子が自然に見られるようになった。また、作戦をお互いに考えて話し合ったり、解決策を話し合ったりする様子が自然に見られるようになった。(体育)
- 一問一答形式では発言に消極的な生徒も、設定された目標についての話し合い活動では、積極的に参加する場面が見られた。また、進行、記録、計算、描画など生徒が自分の役割を探し、自発的に活動できていた。(家庭)
- これまでの既存の型紙を用いた制作では、正確に、出来栄をよく仕上げることを目標にすることが多かったが、応用の制作では自分のデザインを方法を考えるところに重きを置いている。そのため、生徒は自分のアイデアを具体的にもち、それまでに身に付けた知識や技能を適切に活用しながら取り組む必要がある。本時においても、袖フリルというひとつの課題にじっくりと取り組んだことで、それまで気付かなかった構造や細部の仕立てを意識しながら制作に取り組むことができるようになった。(被服)
- 課題テーマに興味関心をもたせることができたことで、更に深く考察し問題解決する態度を身に付けることができた。(工業)
- ポイントをまとめ、一つ一つの技術を論理的に理解し実習へ取り組む様子が見られるようになった。B状況への補充指導や深化指導には、教科書・プリントだけでなく、実際のウィッグを用いて理論を視覚化しながらの授業構成がよいと思う。

(理容)

(オ) その他自由記述 (課題も含めて)

○ 評価規準・判断基準の設定は一定水準の目安として取り組むには、設定する段階で目標や学習内容が明確になり、生徒にとっては分かりやすい授業につながる。1授業時間内での変容が捉えやすい。(国語)

○ 単元が終わった後の文法の定着も良く、問の英文で着目すべき点、問に対する含めなければならないポイントを少しずつ理解し、パターン化できているように思う。生徒と教師が評価の基準を共有することで、生徒も記述しやすいように感じた。

(英語)

○△ 対象クラスは学習の実態が二極化していたが、同じ評価規準、判断基準を用いてB状況に達することができた。しかし、深化指導に課題が残る。(英語)

○△ 科目・単元の性質上、自ら考え自ら課題解決することが最大の学習目標であり、被学習者が課題解決に必要な思考力と実践力をいかに定着させるかが大事ではなかろうか。その手段としての評価規準・判断基準の設定であってほしいと願う。(工業)

△ 判断基準の設定は、汎用性のある取り組みやすい課題はいいが、複雑になればなるほど、実態差の大きい生徒個々への課題の設定が必要になってくる。目安としての判断基準の設定はできるが、授業をする段階で目標や基準を見直し、個々の生徒へ対応した基準にしていく必要があるように思う。(国語)

△ 問を分解した結果が煩雑になってしまったので、問をもう少し細かく分けておく必要性を感じた。知識や技能の習得状況など、生徒の実態をより把握した上で、問題を精選していかなければならないと思う。(数学)

オ 「評価規準」, 「判断基準」を設定した評価授業の評価の分析と考察

(ア) 成果的な側面

- ・ 「評価規準」, 「判断基準」は、今年度設定したもの、昨年度以前に設定したものともに、学習目標や内容、学習集団や生徒の実態等に応じて概ね妥当に設定することができた。「判断基準」を設定すると、設定する段階で目標や学習内容が明確化され、生徒にとっては分かりやすい授業となり、教師にとっては授業の評価精度が向上するとともに、指導の手立てが考えやすくなる。
- ・ 「判断基準」を設定することで、「知識・理解」, 「技能」と「思考・判断・表現」の配分や授業の組み立てが容易になり、また、それらの必要に応じた重点化もしやすい。
- ・ 「判断基準」や評価のポイント等を生徒に示し、教師・生徒間で共有・確認することにより、生徒の「知識・理解」, 「技能」が整理され、「思考・判断・表現」につながる課題や言語活動に取り組みやすくなる。
- ・ 「知識・理解」や「技能」の定着や活用と「思考・判断・表現」は一体の関係にあり、「判断基準」を用いた記述・説明等の「思考・判断・表現」の学習に取り組ませることは、「知識・理解」のつながりの強化や深化、「技能」の向上を促すことにもつながる。
- ・ 学習活動の課題を考えたり、分析結果等を表現させたりする際、表現の整合性を意識させることで、表現力と論理的思考力を高めることができる。また、文章による記述は、教師はもとより生徒にとっても自身の理解度が把握しやすくなる。

- ・ 学習活動の「思考・判断・表現」させる課題について、生徒同士で話し合ったり、考えを発表し合ったりすることは、自身の考えだけでなく、新たな気付きを生み、自身の考えを変容・深化させることにつながる。また、話し合いや発表を聞くことは、「知識・理解」した内容を縦断的・横断的に活用することの助けにもなる。話し合いの習慣化は、生徒同士で自発的に話し合ったり、教え合ったりする等の自然な学び合いにもつながっている。
- ・ 理系教科であっても「思考・判断・表現」の評価を意識することで、数値的な答えの正誤にとらわれず、考えや分析の過程や生徒の変容に着目し、それらを伝えるためにどのように表現しているかで評価することができた。
- ・ 実技形態授業においても可能な授業では、話し合い等の言語活動の機会を設け評価するとともに、個別にワークシート等に記述させたり、その内容を基に話し合いをさせたりすることで、評価の場面を段階的に設けることができた。ワークシート等の記述や記録は、振り返りや話し合いで発言しなかった内容の確認などにも有効である。また、理論授業時の「思考・判断・表現」の評価を実技授業時に行ったり、その逆も設定したりできるのではないか。
- ・ 「思考・判断・表現」を評価する言語活動を授業中に取り入れることが難しい実技形態授業においては、「知識・理解」、「技能」とともに、レポートに記述させて評価することがよい。またそうすることで、言語事項の指導も正確にできる。
- ・ 目標となる「判断基準」を基点に、補充指導や深化指導を考えることで、その時間に必要とされる教材や内容が整理され、授業準備がしやすくなった。補充指導の手立てを事前に用意しておくことで、目標や「判断基準」を達成させやすくなった。
- ・ 文字情報だけでなく、実際の作業や動き、実物を見せることで視覚化したり、必要に応じてタブレット機器等の情報を使用したりするなど補充指導を工夫することができた。
- ・ 教師が適切にポイントを示したり、話題を整理したりしながら、課題に対する話し合いや他者の発表を聞かせることは、有効な補充指導・深化指導の手段となり得る。
- ・ 「文章の読解・整理・表現」、「論理的思考」を定着させるためのパターン化について、5教科（国社数理英）で共通実践に取り組んだ。今回は【「文章の読解・整理・表現」、「論理的思考」】=【「文章（課題）の読解（理解）」、「思考の整理・表現（論理的思考）」】であると定義し、以下の指導の流れを「判断基準」を設定した授業やその補充指導で共通実践した。
 - ① 答えるべきことを理解（問を分解するなどしながら問の内容を理解）する
 - ② 答えるために必要なポイントを見付ける
 - ③ 問の内容と照らし合わせながらポイントの正誤・過不足・ポイント同士の関係性を考える
 - ④ 問の内容とポイントの関係性を踏まえながら解答として適切に表現するこの指導の流れによって、思考が整理され、課題に対し自力でB状況に到達できたなど、ある程度狙った成果を上げることができた。
- ・ 適切な「判断基準」の評価のポイント設定と提示により、思考が整理されるとともに思考の道筋が明確になり、課題達成だけでなく学習意欲喚起にもつながった。

- ・話し合いや発表をしたり、他者の発表を聞いたりすることで、相手に伝わりやすい内容や相手に伝えるべき情報を意識しながら、説明の内容を考えるようになった。

(イ) 課題的な側面

- ・教科によっては、教科特性や生徒の実態に応じた「評価規準」とするための検討の余地がある。また、生徒の実態に応じて、評価対象や課題の精選が望ましい場合もある。
- ・授業時の「知識・理解」、「技能」と「思考・判断・表現」の時間配分、授業構成などの兼ね合いや、「思考・判断・表現」に必要な内容の理解と「知識・理解」、「技能」の定着などとの兼ね合いについては、単元毎・授業時間毎などに生徒の実態を加味した計画的な取組が必要である。
- ・話し合いや発表をする際は、相手を想定して話す内容の工夫を意識させたり、相手を想定したコミュニケーションの経験を積み重ねたりしていく必要を感じる。
- ・実技形態授業において、意図的に言語活動の設定を行わなければ、作業中心になりがちである。作業中も言語活動の機会が多いので、教師の働きかけの工夫が必要である。
- ・「文章の読解・整理・表現」、「論理的思考」を定着させるためのパターン化について、今後はより教科の特性に応じたパターン化を検討したり、パターン化しやすい課題から繰り返すことで定着を図ったりしていくなど、工夫しながら継続して取り組んでいく必要がある。
- ・「判断基準」の設定は汎用性を指すのではなく、学習集団や生徒の実態を把握した上で、学習集団や生徒に応じて設定していくことが必要である。

6 成果と課題

☆ 「評価規準」、「判断基準」の設定について

「評価規準」、「判断基準」は、学習目標や内容、学習集団や生徒の実態等に応じて概ね妥当に設定することができた。

☆ 「判断基準」について（生徒にとって）

「判断基準」を設定した学習活動は、「判断基準」を設定する段階で目標や学習内容が明確化され、生徒にとって分かりやすい授業となり、学習意欲も喚起される。

「判断基準」を設定した「思考・判断・表現」を伴う学習に取り組むことで、生徒が自身の理解度を把握しやすくなるとともに、「思考・判断・表現」に用いる「知識・理解」、「技能」の定着や活用（つながりの強化や深化）が期待できる。

「判断基準」の評価のポイントを生徒にも示す（生徒と教師で共有する）ことで、「知識・理解」や「技能」に関する思考の整理を促し、「思考・判断・表現」を伴う課題や言語活動に取り組みやすくなる。

☆ 「判断基準」について（教師にとって）

「判断基準」を設定した学習指導は、「判断基準」を設定する段階で目標や学習内容が明確化され、授業の組立てが容易になり、「知識・理解」、「技能」と「思考・判断・表現」の授業配分、重点化を考えやすくなる。

「判断基準」を設定した学習指導では、「判断基準」を基点に「思考・判断・表現」の具体的な想定をすることで、指導の手立てや評価の方法・仕方が考えやすくなるとともに、「思考・判断・表現」されたものから生徒の理解度を把握しやすくなり、必要な指導や評価の精度が向上する。

「判断基準」を設定することで、理系教科や実技形態授業においても、「思考・判断・表現」を伴う課題や言語活動の取組と、それらに対する指導の手立てや評価の工夫がしやすくなるとともに、言語事項の指導も行える。

★ 言語活動について

「判断基準」を設定した「思考・判断・表現」を伴う学習に取り組むことは、生徒同士で話し合ったり、考えを発表し合ったりするような言語活動に発展させやすい。

「思考・判断・表現」を伴う学習で、他の生徒の考えを聞くことは、新たな気付きを生み、自身の考えを変容・深化させることにつながるとともに、既習知識の縦断的・横断的な理解や活用にとっても有用性が期待でき、補充・深化指導を代替したり、補完したりできる可能性もある。

生徒同士で話し合ったり、考えを発表し合ったりすることの習慣化は、生徒同士の自然な学び合いにつながる。

★ 「文章の読解・整理・表現」、 「論理的思考」を定着させるためのパターン化について

①答えるべきことを理解（問を分解するなどしながら問の内容を理解）する。②答えるために必要なポイントを見付ける。③問の内容と照らし合わせながらポイントの正誤・過不足・ポイント同士の関係性を考える。④問の内容とポイントの関係性を踏まえながら解答として適切に表現する。という①～④の指導の流れは、有効な思考パターンとなり得ると考えられる。

★ 課題について

「知識・理解」、「技能」の学習と「思考・判断・表現」の学習は不可分の関係にある。聴覚障害の特性に鑑みて、学習した「知識・理解」、「技能」を「思考・判断・表現」させ言語化することは、「知識・理解」、「技能」を定着させ活用していく上で非常に重要である。以下が今回の研究における課題の要点である。

学習目標と生徒全体の実態を想定した（最大公約数である）「評価規準」の設定が必要。

「評価規準」と学習集団や生徒の実態に即した（個別設定可である）「判断基準」の設定が必要。

「判断基準」の達成を目指した、「知識・理解」、「技能」と「思考・判断・表現」のバランスや配分の重点化、授業構成や展開、（個別の補充・深化）指導の手立て、評価の工夫が必要。

様々な場面・相手に応じた言語活動の設定と、「論理的思考」を定着させるための更なる取組が必要。

そして、これらの有効な実践には、教師個々の研究・研鑽、不断の努力が要求されている。

研究の総括

今回、「評価規準」と「判断基準」の設定を通じた、確かな学力・コミュニケーション力・論理的思考力の向上に資する言語活動の充実に3か年で取り組んできた。各教科の特性に応じて実践した「判断基準」を用いた「思考・判断・表現」を伴う学習活動は、論理性を意識した文章の記述だけでなく、話し合いや発表などの言語活動へも移行させやすかった。自身の考えを明確にした上で、他者の考えを聞くことは、生徒の新たな気づきを生み、自身の考えを変容・深化させることにつながった。また、「思考・判断・表現」を伴う学習活動によって、既習知識の縦断的・横断的な理解や活用がなされていることも確認できた。このことは、「知識・理解」、「技能」の定着が断片的になりがちで、主体的で対話的な学びを不得手としていた本校の生徒に、次期学習指導要領に示されたような、「他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、主体的・対話的な深い学び」へと変化を促すとともに、指導する教師の側にも指導の可能性を示唆するものである。

課題はあるものの、このような成果と今後の示唆を見出すことができた研究に、学部全体で取り組むことができたことは非常に意義あることと考える。今回の研究で得られた知見を今後の研究・指導に生かし、発展させていくための方策を検討していきたい。

参考文献

- ・ 平成24年度研究紀要「思考力・判断力・表現力を育成する指導と評価に関する研究」：鹿児島県総合教育センター
- ・ 平成26年度研究紀要「学習内容の関連を踏まえた思考力・判断力・表現力を育成する指導と評価に関する研究」：鹿児島県総合教育センター
- ・ 平成27年度研究紀要「思考力・判断力・表現力を育成する学習指導～判断基準の設定による指導法の改善Ⅲ～」：鹿児島市立吉田南中学校
- ・ 高等学校「指導と評価の年間計画」「評価規準」作成のための平成26年度版資料：岐阜県総合教育センター
- ・ 「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」：国立教育政策研究所

寄宿舎の研究

VI 寄宿舎の研究

1 研究主題

コミュニケーション力を育む生活指導

～舎生会活動・ミーティング・日常生活場面を通して～

2 主題設定の理由

本校寄宿舎には、幼稚部から高等部まで、計25人の幅広い年齢層の幼児・児童・生徒が在籍している。寄宿舎生（以下舎生）のコミュニケーション手段は「手話」「指文字」「聴覚口話」等、相手や場面に応じて様々で、お互いの意思疎通が困難な場面や誤解が生じる場面も見られるのが現状である。

寄宿舎では、社会に必要なコミュニケーション力を身につけ、相手の話を理解し、自ら考え、行動していく力を養うことにより、本校の教育目標である「聴覚口話法を基盤に、個に応じたコミュニケーション手段を用いて、言語力、コミュニケーション力、学力の向上を図り、『生きる力』を身に付けた、心豊かでたくましい人間を育成する。」ことに繋がるものと考え、「舎生会活動（月例会）」「ミーティング」「日常生活（あいさつ・返事）」の3つの場面を通して研究を進めた。

3 研究の方法

3つの場面を活用し、職員も班ごとに分かれて取り組んだ。

活動（対象者）	場面	内容
月例会 （小学部・中学部 ・高等部）	舎生会活動	毎月1回（19:30～20:00）、活動の日程確認と月目標・反省等についての話し合いを行っている。 事前に会の内容・進行等の打ち合わせとして役員会を開いている。
ミーティング （小学部）	ミーティング	低学年は司会を立てて生活の約束事の確認・反省をしている。 高学年は「1分間スピーチ」で一日の生活を振り返り、印象に残ったことや自分の思いを発表している。
あいさつ・返事 （全学部）	日常生活	コミュニケーションのはじまりであるあいさつ・返事について、発達段階に応じて取り組んでいる。

4 研究経過

(1) 平成27年度

	研究計画	内容
5月	・ 研究主題	
7月	・ 研究内容の方法確認 ・ 職員研修	『施設見学・福祉サービスについて』
8月	・ 職員研修	
9月	・ グループ編成	
10月	・ 職員研修	
11月	・ 実態把握 ・ 職員研修	・ チェックシートによる舎生の自己評価 ・ 『昔と現在の聴覚障がい教育について』
12月	・ 実践：テーマ学習	・ 「あいさつ・返事について」
1月	・ 研究報告	
2月	・ 職員研修	・ アサーティブトレーニング

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 舎生の客観的評価 ・ 研究のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員によるチェックシートでの評価
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究の発表 	

(2) 平成28年度

	研究計画	内容
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究内容の方法確認 ・ グループ編成 	
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「進学・就職を控えた生徒達の効果的な学習法方について」
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「中学生ってどんな時期？」
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・ お互いのミーティングの様子のビデオ視聴
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 ・ 研究のまとめ 	
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究の発表 	

(3) 平成29年度

	研究計画	内容
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループ編成 ・ 研究内容の方法確認 ・ 職員研修 	
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究内容の方法確認 ・ 職員研修 	
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体研修 ・ 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 外部講師による職員研修
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・ チェックシートによる舎生の自己評価
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実践：テーマ学習 ・ 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「あいさつ・返事について」 ・ 職員によるチェックシートでの評価
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実践：テーマ学習 ・ 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「あいさつ・返事について」
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実践：テーマ学習 ・ 職員研修 ・ 研究のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「あいさつ・返事について」
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究の発表 	

5 研究の実際

月例会班の研究

(1) 平成27年度

ア ねらい

舎生会活動を通してコミュニケーション力を高める方法はないかと考え、月例会のあり方を充実させることを試みた。

そこで、舎生同士が意見交換を活性化させることによりコミュニケーション力を培い、また職員が言葉かけや、支援を工夫することによって高められるのではないかと考えた。

1年目は役員育成に重きを置き研究を進めた。

イ 実践

当初、月例会時に全員で日程を決めた後に目標の反省を行い、翌月の目標を決めていた。そのため30分では終わらず1時間近くかかり学習時間に影響が出ることもあった。その原因の1つとして男女一緒に参加する月例会は新校舎になって初めてで、経験不足と役員の進行の未熟さがあった。

そこで、まず月例会を始める前に役員会を開き、役員会で必要とする物(記録ファイル・カレンダー・筆記用具)、係分担等一つ一つを細かく挙げて確認することを行った。また、毎回同じ職員があたるわけではないので、会の状況等を記録してもらいそれを職員に引き継いだ。

月例会や専門部活動の日程は前もって役員で決めて承認をもらうだけとし、その時間を反省や目標決めに回すことができた。

【月例会の様子】

実施日	役員の様子	舎生の様子	職員の助言・支援等
9.29	・男女それぞれ意見をまとめる方法を考えた。	・なかなか意見がまとまらなかった。	・前日に月例会の進め方をどう思うか役員にたずねる。 ・準備、反省の仕方、目標の決め方、会の進め方、役員として工夫すること、カレンダー活用の方法など細かく打ち合わせをする。
10.19	・役員に余裕があると他の舎生に声を掛けてくれるが、そうでない時は役員だけで進めた。 ・月行事を決めることや男女の意見をまとめることが難しく50分近く要した。	・小学部生が高等部生の手話についていけなかった。 ・内容が多岐にわたった。	・生活が別々なので、反省も別でよいのではないかと助言する。 ・月行事は役員会で決めておき、月例会で了解をもらうようにしてはと助言する。
11.25	・役員で前もって仕事分担をし、男女別々の反省に取り組むことができた。 ・まとめずに多数決で決めた。	・異年齢の様々な意見が出された。 ・男女表現は違うが同じ様な内容だった。	

12.17	・役員が全体を意識しながら進めていた。	・反省を男女別々に出した。	・目標は同じでも、反省はいろいろあってもよいことを話す。
1.28		・男女に分かれて話しあいをするが学部が上がるにつれて意見がでなかった。	
2.29	・反省を行うとき、考えやすいような質問をした。		・小学部生が理解できるような説明を加える。

ウ まとめ

それまで、翌月の会の期日決めにかかなりの時間を要していたことが、役員会で決めたことを伝達するだけにし、余った時間で反省や目標をゆっくり考たり、意見交換をすることができるようになった。役員自身も自信を持って進行し、予定された時間内に終わることができるようになった。そのことで、ゆとりができ下学年への丁寧な言葉掛けができている。

今後は、会の進行面だけでなく月目標を立てた後に舎生が意識して目標に取り組む内容となるよう働きかけて行きたい。

(2) 平成28年度

ア ねらい

昨年度は役員の育成に重きを置いていたので、今年度は月例会の充実を目指した。

イ 実践

全員集まった中で月目標を決めるには意見がまとまらないことが多かった。そこで月例会の限られた時間の中でコミュニケーション力を高めるには、前もって役員が目標のテーマを考えてそれを基にみんなで目標を作るという試みをおこなったが、役員が目標を作ってしまう舎生から意見が出ないことや職員の意向とは違う方向に行ってしまう軌道修正をしなければならなかったこともあり、内容の充実までには至らなかった。

【月例会の様子】

実施日	役員の様子	舎生の様子	職員の助言・支援等
5.31	・小学部生に意味が分かるかの確認をしていた。	・役員以外の舎生も会場準備にとりかかっていた。 ・男女に分かれ、目標を決めた。 女子～「6月は行事が多いので体調管理をしっかりとしましょう。」 男子～「湿度が高くなる時期なので補聴器・部屋・体調の管理をしっかりとしよう。」 ・2つの目標をまとめると長文となった。「6月は行事が多く湿度が高く汗をかき時期なので補聴器・部屋・体調管理をしっかりとしよう。」 ☆6月の目標 『湿度が高く汗をかき時期なので補聴器の管理や部屋の掃除をこまめにしよう。』 『行事が多いので体調管理をしっかりとしよう。』	・小学部生も分かりやすいように目標は2つでもいいのではと助言する。 ・月例会でテーマを提案し目標の意見を出やすくなるような段取りの確認をする。
6.29	・目標を決めやすくするために、役員会で月目標のテーマを決めた。	・「女子は女子、男子は男子、マナーも違うので、別れて話し合った方が良いと思う」と中女が発言、今までどおりの男女別になっ	・小学部にも分かりやすい目標を立てた方が良いので小中高の学年別に分か

	<p>・「小学部だけでは難しいので、高等部生2人ぐらいがサポートに入っ てまとめたら？」と低学 年を気遣う発言をした。</p>	<p>た。 ☆7月の目標 『計画的に清掃を進めよい夏休みをむかえ よう。』 『夏休みが近づいてくるのでうかれすぎない ように落ち着いて行動しよう。』</p>	<p>れて話し合いを提案する。 ・後日、役員会から月例会 の段取りを確認する。</p>
9.27	<p>・役員会でテーマも決 めなかった。</p>	<p>・会の進め方が分からず、役員だけで話し 合い決めようとしていた。 ・男女の目標内容がまとめられないので、2 つの目標とした。(同じ目標であれば、1つ にまとめるという意識は持っていた。) ☆10月の目標 『好き嫌いせずたくさん食べよう』 『いろいろな秋を楽しもう』</p>	<p>・後日役員会から月例会 への段取りの再確認をす る。 ・みんなに投げかけるよう に助言する。 ・舎監から「目標とは何 か？目標とは今まで難しか ったことを次はできるように 頑張ろうということではな いか。」と助言がある。</p>
10.25	<p>・考えやすいテーマを 決めた。 テーマ～『体調管理』 ・男子は舎生長が小1 生にも分かりやすく 声・手話を使って説明 していた。 ・小学部生が理解しや すいような表現の目 標を立てた。</p>	<p>・女子は声を出さず手話だけで会話して いた。 ☆11月の目標 中・高『インフルエンザを防ぐためにこ まめに手洗いうがいをしっかりしよ う。』 小『病気にかからないようにしっかり手 洗いうがいをしよう。』</p>	<p>・声も出すように促す。 ・小学部生にインフルエ ンザのことを中・高生か ら具体的に分かりやすい 言葉で伝えるように促 す。</p>

ウ まとめ

役員は回を重ねるにつれて、意識も高まり役員会は軌道に乗ってきた。舎生もテーマに沿っての月目標を考え始めてきた。そして、小学部生に対しても理解できているか確認しながら進めて、月目標そのものを小学部生向けの優しい文章に置き換える工夫もできつつある。

今後は、職員の言葉かけや支援を工夫することによって、舎生同士がもっと積極的に意見を出し合いコミュニケーション力を高められるような働きかけを考えていきたい。

(3) 平成29年度

ア ねらい

積極的に意見が出し合えるように年齢にあった学部別の話し合いの充実を目指した。

イ 実践

学部別のグループ分けを再度職員から提案してみた。役員も自ら他学部に入り進行を助け、話し合いが上手いきつつあった。しかし、学部によっては役員に任せきりになる様子が見られた。そこで舎生全員が積極的に参加・発言できるように、グループ別の進行を輪番制にする試みを行った。

【月例会の様子】

実施日	役員の様子	舎生の様子	職員の助言・支援等
4.27	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの意見をまとめようとしていたが、少し手こずっていた。 役員は発言せず見守っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> (小2男)内容がわからず集中力に欠け、姿勢保持ができなかった。 (小4・6女)意見が活発に出ていた。 (高女)雑談が多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> 姿勢保持ができるよう足がつく低い椅子を準備するよう助言する。
5.31	<ul style="list-style-type: none"> 学部別の司会を務め、進行をスムーズに進めた。 	<ul style="list-style-type: none"> 学部別に分かれて話し合いをした。 (小2男)会には落ち着いて参加できたが、内容が難しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 小学部2年生にも分かるような話し方で進めるように助言する。
10.30	<ul style="list-style-type: none"> 役員が一人でまとめていた。 	<ul style="list-style-type: none"> (小)女子が小2男子に言葉を一つ一つ丁寧に説明していたが、やはり内容理解は難しかった。 (高)話し合いに消極的で役員に任せていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 難しい言葉なので身振りで表現してみたらと助言する。 役員だけでなく司会を交代することで積極的な参加を促す。 反省「悪かった」の後に「次は〇〇する」と書き出し、次にどうしたいかも考えるよう促す。
11.21	<ul style="list-style-type: none"> 前日のミーティングで司会を輪番制にすることを連絡した。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部、司会を輪番制にして初めて実施した。 	

ウ まとめ

月例会では役員の進行のもと、舎生もテーマに沿った月目標を立てられるようになってきた。小学部は学部別にしたことで意見が出やすくなった。さらに中学年・高学年が低学年に手話や身振りを加えた説明をする場面や役員がより具体的な説明をする様子が多くみられるようになり、活発な話し合いになってきた。また、中学部は少人数なので意見のまとまりが見られた。

一方、高等部は、役員以外の意見が出にくく、積極的な話し合いにはならなかった。

司会を輪番制にしたことで役員だけでなく、他の舎生の自主的な参加が見られ、月例会をより身近に感じている様子がある。自分の意見がすぐに受け入れられ、舎生会の一員としての意識にもつながっているようだ。

(4) 3年間のまとめ

当初、すべてのことを全員で決めようとしていたこともあり、話し合い内容が多岐にわたり、意見がまとまらず時間を要していた。また、一部の意見だけで終わることも多かった。そこで、役員育成や役員会の充実をはかり、月例会の工夫を進めることにした。そのことで、役員意識が高まり、会の内容が精選され、言葉の意味も分からなかった下級生が上級生の分かりやすい説明で活発な話し合いができるようになった。消極的な参加だった中・高等部生も舎生会の一員としての意識が育ち、意見が出し合えるようになってきた。

今後は、更に役員会や月例会で舎生同士がそれぞれのよさを認め合い、もっと積極的に意見を出し合い、コミュニケーション力を高められるように、雰囲気づくりや職員の言葉掛けなどの支援の工夫を考えていきたい。

ミーティング班の研究

(1) 平成27年度

ア わらい

寄宿舎生活を送る舎生は、異年齢集団であり年齢層に幅がある。そこでミーティング班では、それぞれの年齢（学年）に合ったミーティングの「会」としての進め方や方法を通してコミュニケーション力を育む生活指導の研究を進め、平成27年度は、舎生の実態把握を中心に研究を行うこととした。

イ 実践

寄宿舎では、小学部生は20:30~20:40、中高等部生は21:55~22:00に、ミーティングを行い、一日の生活を振り返る場としている。学部により内容は多少異なるが、日課を振り返り反省し、生活の中で印象に残ったことや自分の思いを発表「1分間スピーチ」もしている。

小学部生は、男女棟で年齢は異なるが同じ内容で行っているため、高学年になるにつれ、内容に物足りなさを感じることもあった。

そこで、各棟で内容の見直しを行い、それぞれの年齢に応じたものに変更した。小学部6年生は、次年度中学部へ進学することも見通し、発表だけでなく、日誌の記入も行うことにした。

中・高等部生は、1分間スピーチを行うことで、自分の意見や思いをまとめて発表するいい機会となっているが、日課時間内には終わらず、就寝時間が守れない状況が続いている。

ウ まとめ

小学部生は、「はい」や「いいえ」で答えるだけでなく、自分でことばを考えて発表する場面を増やしたことで、生活をしっかり振り返りながら相手に伝えることができるようになってきている。

中高等部生は、1分間スピーチは充実してきているが、反面、日課時間を大幅に過ぎてしまうことが課題である。日課時間の中で、より充実した内容にするにはどうしたらいいか。日課の検証も行いながら、内容の精選を行う必要がある。

(2) 平成28年度

ア わらい

平成28年度から中・高等部は、1分間スピーチを通じて自分の意見や思いをまとめて表現し伝えることができ、ミーティングとしての形になっている状況にある。小学部生は新一年生も入舎したことを受けて小学部のミーティングに焦点を絞りミーティングを通して、「聞く力」「話す力」を身につけ、自分の考えや思いなど自信を持って伝えることができ、豊かなコミュニケーション力を身につけることを目指している。

イ 実践

平成28年度は、男子棟は小学部1年生が4人、女子棟は小学部3年生が2人、5年生が3人と、発達段階に差があるために、それぞれの実態や発達に応じたためあてを設定し、研究を行った。

低学年のためあて

男子棟では小学部に入学し初めて取り組むミーティングということで、ミーティングの内容を知り、話をしっかり聞いて一日の生活を振り返ることができるように4つのためあてを挙げ毎日取り組むことにした。4つのためあてについての経過・成果・課題は以下の通りである。

話を最後まで聞く

- (成果・課題)
- ・ 話を聞かずに友達と話をしたり話しているのに途中で割り込み、自分のことを話し出す。
 - ・ 言葉かけをしてもなかなか聞く体勢にならない。
 - ・ その都度言葉かけをして少しずつ集中して聞く体勢にできるようになってきた。

- ・ 友達同士で注意し合う様子もみられ、言葉かけがなくてもしっかり最後まで聞けるようになる。

ミーティングのながれを覚える

- (成果・課題)
- ・ ながれを書いたカードを見ながらみんなにわかるようにゆっくり話をしながら司会をしていた。
 - ・ カードを見ていても順番を間違えたりすることがあった。
 - ・ 事前にカードを見て確認したり練習する様子もみられ、司会をするという自覚がみられてきた。
 - ・ ながれを覚え、カードを見なくても司会ができています。

一日を振り返り発表する

- (成果・課題)
- ・ 当初は、他人の悪いところを指摘したり発表内容をまねたりしていたが回を重ねることに、少しずつ意識することができるようになってきた。
 - ・ 約束事(廊下を走らない等) 3つに決めて、分かりやすいような取り組みをした。
 - ・ 普段の生活で言葉かけを続けることにより気を付けよう意識することができるようになってきたので約束事の内容変更に関わった。新たな約束事を守れなかった時の理由を自分の言葉で表現する力を身につける。

しっかりした態度で参加する

- (成果・課題)
- ・ 集中できる日もあるが、時々、姿勢が崩れたり、ふざけたりしてしまうことがある。
 - ・ お互い声を掛け合う様子が見られ、姿勢が崩しても直そうとする意識があり、少しずつ改善できている。
 - ・ しっかりした態度で臨む為に、日常生活においても姿勢・態度を意識するように、その都度言葉かけをする。

中学年・高学年のめあて

女子棟では、生活の振り返りや1分間スピーチなど、ミーティングの形としては成り立っているが、質問に「はい」か「いいえ」で答えるだけだったり、話したいことがまとまらずに言葉に詰まったりする様子が多く見られた。

そこで、まずは一日の生活を自分の言葉で振り返る取り組みなどに重点を置いて研究をすすめた。4つのめあてについての経過・成果・課題は以下の通りである。

話を最後まで聞く

- (成果・課題)
- ・ 当番の人が話をしている途中で話に割り込むことがあった。
 - ・ 意識して人の話を聞いている様子も見られた。
 - ・ 発言者が途中で話が止まっても、待つことができるようになった。
 - ・ 最後まで話を聞けるようになってきた。

言葉遣いに気をつける

- (成果・課題)
- ・ 発言時、話し言葉になる。
 - ・ 誤った言葉の使い方をしている場合は、その場で指導をしている。
 - ・ ミーティングの話し方について説明してから「会」という意識をもってきた。
 - ・ 言葉遣いに気をつけるようになってきたが定着までには至っていない。
 - ・ 舎生が誤りやすい言葉遣いを職員間で共有し、事後指導(確認)を行い定着を目指す。

1日の振り返りをていねいにする。

- (成果・課題)
- ・ 他の人と同じようなことの繰り返しになりがちである。

- ・ 徐々に自分なりに考えて発表できるようになってきている。
- ・ 1日の振り返りをまとめて反省できるようになった。
- ・ 内容の充実を図る。

1分間スピーチは事前に考えておく

- (成果・課題)
- ・ その場で考えて話してしまい、1分間にまとまらない。
 - ・ 以前に比べると自分の感想も入って文の組み立てが上手になっている。
 - ・ 事前に考えて話をする子もいるが、1分間を大幅に過ぎることがある。
 - ・ 1分間に収まるように、文章としてまとめる力をつけさせる。

ウ まとめ

低学年の成果としてはミーティングのながれはしっかり覚えることができた。また少しずつ話を集中して聞けるようになり、一日の生活を振り返り発表することもできつつある。

今後は話の内容についてしっかり理解できているのかの確認と約束事について「守れた」「守れなかった」で終わるのではなく、守れなかった時にどうすれば良いのかを考え発表する。

中高学年は、ミーティングを通した取り組みを行った結果、コミュニケーションの基礎である「話す」「聞く」力を少しずつ身につけ、自分の思いや考えを伝えることができるようになった。

1日の反省を自分で考え、まとめ、言葉にして発表する経験は確実にコミュニケーション力の向上につながると考える。また、中学部進学を見据えた取り組みとして、「書く」力をつける支援にも取り組んでいきたい。

(3) 平成29年度

ア ねらい

ミーティングを通して「聞く力」「話す力」を身につけ、自分の考えや思いに自信を持って伝えることができ、豊かなコミュニケーション力を身につけることを目指す。

イ 実践

男子は小学部2年生が3人、女子は小学部4年生が2人、6年生が3人在籍している。発達段階に差があるため、それぞれの実態や発達に応じためあてを設定した。

低学年のめあて

話を最後まできく

- (成果・課題)
- ・ 話す相手を見て、しっかり聞けるようになってきた。
 - ・ 分からない時は、質問する態度を身につけさせる。

会の進め方がスムーズにできる

- (成果・課題)
- ・ 流れを覚えたことで、進め方もスムーズになった。
 - ・ 全員が注目することにより当番の話ができるようになった。
 - ・ 発音がしっかりしない時は、指文字を使って発表している。

1日を振り返り発表する

- (成果・課題)
- ・ 言葉掛けを続けたことで「守れた」「守れなかった」だけではなく反省を考える姿が見られるようになった。
 - ・ 自分の言葉で気持ちを伝える取り組みにつなげていきたい。

真剣にミーティングに参加する

- (成果・課題)
- ・ 姿勢を正し、参加するようになった。
 - ・ 以前より長時間座ることができるようになった。
 - ・ 1日の締めくくりをする会であることの理解を深める。
 - ・ 集中力を持続するための工夫が必要である。

中学年・高学年のめあて

言葉遣いに気をつける

- (成果・課題)
- ・ 言葉遣いに気を付けながら発言できるようになった。
 - ・ 「会」という意識を持ち言葉遣いも定着した。

1日の生活を自分の言葉で振り返る

- (成果・課題)
- ・ 1日の生活を振り返り、自分の言葉で発表できるようになった。
 - ・ 聞いている人に分かりやすく簡潔に発表できるようになる。

1分間スピーチを時間内にまとめて発表する

- (成果・課題)
- ・ 発表内容を事前に準備するので考えながら話すことはなくなった。
 - ・ 書いておいた内容以上にスピーチの量が増えてきている。

当番日誌を記入する

- (成果・課題)
- ・ 1分間スピーチの内容をまとめて書いておくことで内容も充実してきた。
 - ・ 内容を理解して記録するために集中して職員の話聞く事ができるようになってきた。
 - ・ 自分の考えをまとめて発表し書く力がついてきた。

ウ まとめ

低学年は、ミーティングの流れを覚えた事により会の進め方もスムーズにできるようになった。毎日のミーティングの中で話をしっかり聞き理解しようとする姿が見られる一方、手話や口話のはっきりせず簡単に終わらせようとする様子がある。今後は自分の言葉で相手に伝える取り組みとして発表できる力を高めていきたい。

中学年・高学年は、中学部進学を見据えた取り組みとして、当番日誌を取り入れた。日誌を記入する事で、自分の考えを文章化し発表できるようになってきた。会の中で聞いた内容を理解して記録することは、まだまだ支援が必要である。これからも「聞く力」「話す力」に加えて「書く力」の向上も目指していきたい。

(4) 3年間のまとめ

低学年から高学年までの年齢差はあるものの、学年に合わせた進め方など内容の工夫を行うことで、それぞれの「めあて」に添った成果を得ることができた。

ミーティングを通しての研究は、全学年に毎日職員が関わる良い機会であり、具体的な手立てやその課題などにきめ細かく取り組むことができた。

今後も毎日の積み重ねを大切にコミュニケーション力の向上に努めていきたい。

あいさつ・返事班の研究

(1) 平成27年度の研究

ア ねらい

年齢やコミュニケーション手段の違いはあっても、「コミュニケーションの始まりはあいさつ・返事である」と考え、卒業後、社会の中で他者と豊かに関わっていけるコミュニケーション力を身につけることを目指し、全舎生を対象として研究を進めることにした。

イ 実践

寄宿舍では、幼稚部生から専攻科生まで幅広い年齢層の舎生が共に生活している。それぞれの発達段階や聞こえの違いに応じて手振り、身振り、音声や指文字、手話など様々なコミュニケーション手段が用いられている。

舎生のあいさつや返事に対する意識や実態を把握するために、チェックシートを作成し各自記入した。職員に対しても同様のチェックシートを使用して各担当舎生について、客観的評価を実施した。

【寄宿舎生】

◎よくできた ○できた △あまりできなかった

質問		学部	◎	○	△	計	それは、どんな時ですか
1	大きな声であいさつができています	小	4	1	0	5	◎：先生に会った時 学校でいろいろな人と会った時 ○：最初に会った人にあいさつをする時 とても元気な日・お礼を言う時・学校で友だちと会った時・部活の時 △：時々小さい声であいさつをした
		中	4	3	1	8	
		高	2	5	1	8	
		計	10	9	2	21	
2	自分から進んであいさつしている	小	2	3	0	5	◎：先生に会った時 ○：自分からできないことがあった すれ違った人にはあいさつするようにしている △：よくあいさつをしていなかった
		中	4	3	1	8	
		高	4	4	0	8	
		計	10	10	1	21	
3	場に応じたあいさつができています	小	1	3	1	5	◎：TPOを考え、状況に合った行動をしている ○：自分で考えてあいさつをしている △：話し中に無理矢理あいさつをすることがある
		中	3	2	2	7	
		高	4	3	1	8	
		計	8	8	4	20	
4	あいさつのタイミングがわかり、できる	小	1	2	2	5	◎：目が合った時 あいさつの仕方は「1・2・3・4」というタイミングを覚えているので慣れている ○：先生とあいさつをする時
		中	5	2	1	8	
		高	6	1	1	8	
		計	12	5	4	21	
5	最後まで相手の顔を見て、あいさつや返事ができている	小	1	2	2	5	◎：授業の時 ○：急いでいる時はできていない 学校と地域でしっかりとしている △：急いでいる時はすぐ前を見てしまう
		中	2	2	4	8	
		高	5	2	1	8	
		計	8	6	7	21	
6	あいさつが習慣化している	小	2	2	1	5	○：朝会った時に必ずしている △：時々怠ける
		中	3	3	2	8	
		高	3	3	2	8	
		計	8	8	5	21	
7	会釈・普通礼・最敬礼の使い分けが正しくできる	中	5	3	0	8	◎：会釈もせず、普通礼をしている 2回目に会った人に会釈をしている ○：最敬礼はしたことがないので、ほとんど会釈と普通礼をしています △：どうすればいいかわからない
		高	2	2	4	8	
		計	7	5	4	16	
8	上の人が席に来て話しかけたら、立って受け答えをしている	中	4	3	1	8	◎：先生や先輩が来た時 校長先生が来た時 ○：緊張して立てないことがあった △：立っていいのか座っていいのかわからない
		高	1	3	4	8	
		計	5	6	5	16	

【職員】

◎よくできた ○できた △あまりできなかった

質問		◎	○	△	計	それは、どんな時ですか
1	大きな声であいさつができています	6	14	6	26	◎：登下校時、帰省帰舎時、起床就寝時 ○：あいさつはしっかりできているが、声が出ていない。こちらが構えているとうまくできる

2	自分から進んであいさつしている	3	17	6	26	○：食事中、厨房の方々や牛乳配達の方の姿が見えた時 半分以上は職員が声をかけている 以前に比べるとできるようになった △：言われてあいさつをすることがある
3	場に応じたあいさつができています	4	14	8	26	○：会話が短くなりがちなので、相手に伝わるように丁寧な会話をして欲しい（「はい」「大丈夫です」等で終わらせようとする） △：めんどくさがることがある
4	あいさつのタイミングがわかり、できる	4	13	9	26	○：顔を合わせた時はできている △：促されると気づき、できることがある 自分のタイミングと合わない時にはしない
5	最後まで相手の顔を見て、あいさつや返事ができています	4	8	14	26	◎：1対1の時にはよく見ている ○：余裕がある時にはしっかりとできる 状況によるが、意識できている △：自分の遊びに夢中な時など返事が返ってこない時がある 落ち着いて話しをすることが時々難しい
6	あいさつが習慣化している	7	13	6	26	○：習慣化しているが、気分によってムラがある △：習慣化していない
7	会釈、普通礼、最敬礼の使い分けが正しくできる	1	4	16	21	○：意味は理解しているが、使う場面で使い分けられるか △：使い分けが分かっていない
8	上の人が席に来て話しかけたら、立って受け答えをしている	1	1	15	17	理解していても、実際の場になるとできないのではないかとと思われる

ウ まとめ

チェックシートの結果から、舎生が「できる」と感じている項目であっても、職員は不十分であると感じているものが多いことがわかった。舎生は学校生活でのあいさつに対する評価を行っているのに対し、職員は普段の生活（寄宿舎生活）に着目して評価したため、結果に反映されにくかったのではないかと考える。

また、社会に出た時に他者と豊かにコミュニケーションがとれるかという観点から調査結果を分析すると、あいさつや返事に対する意識の低さが課題であることが分かった。

(2) 平成28年度の研究

ア わらい

前年度の実態調査を受け、課題をよりの確に把握するために、前年度のチェックシートの質問項目を寄宿舎生活に着目した項目に見直して再度実施した。前年度同様に職員にも実施した。その結果、発達段階だけでなく、男女でも課題がさまざまであったため、①幼稚部②小学部男子（低学年）③小学部女子（中学年・高学年）④中学部・高等部の4つに分けて実践を行った。

イ 実践

(ア) 幼稚部

幼稚部生に対しては、日々の生活の中で職員が音声・指文字・身ぶり等で積極的に関わり、間違いがある時はその場で正すことを繰り返し行った。

(イ) 小学部男子

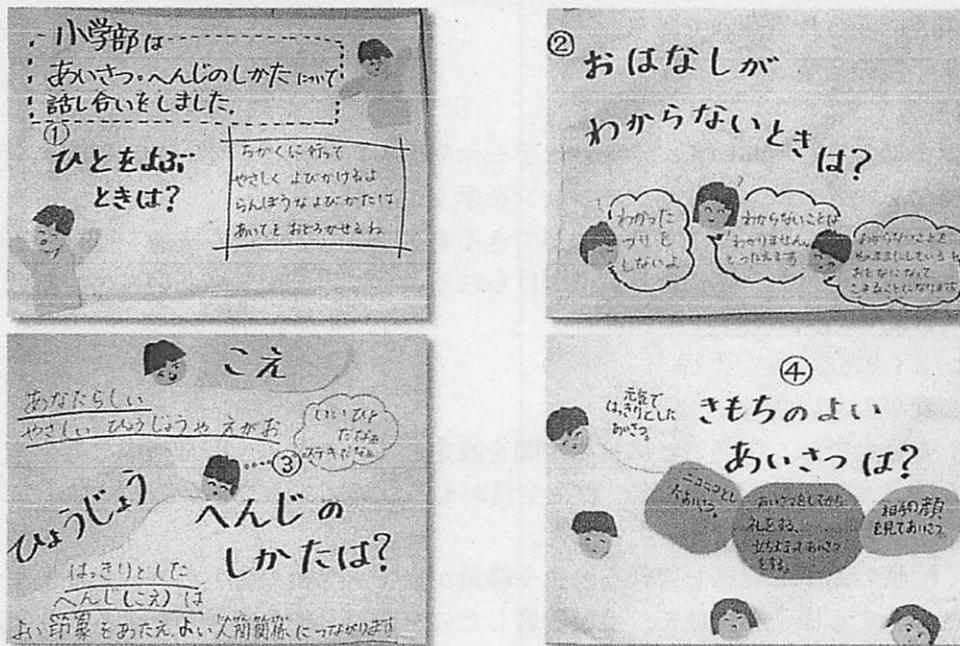
「テーマ学習」を行い、あいさつや返事、話す態度や聞く態度について学習した。絵カードを使用したりロールプレイを行ったりするなど、低学年の舎生にも実際の場면을イメージしやすいように工夫した。



(図1 絵カード)

(ウ) 小学部女子

相手を呼ぶ時や、相手が気付かない時はどうするかなど、実際の生活の中でトラブルになった事例を取り上げ、ロールプレイを行った。声の大きさや表情に気を付けたり、相手の顔を見て話すなど具体的な方法を確認することができた。



(図2 小学部女子ロールプレイのまとめ)

(エ) 中学部・高等部

コミュニケーションのあり方について具体的に考える機会として「テーマ学習」を実施し、日常生活の場面を2つ例に挙げロールプレイを行った。

主人公の立場になって気持ちを考え発表したり、グループ討議を行いどのようなコミュニケーションが望ましかったのかを話し合い、グループごとに発表したりした。

【例1：ハンバーガーショップ】

飲み物を買うためにハンバーガーショップに入った。

客：「ジュースを下さい」

店員：「一緒にポテトはいかがですか？セットだとお得ですよ！」

客：「えーっと…あ…はい…」

：「飲み物だけのつもりだったのに、結局セットを買ってしまった…」

【例2：病院】

検査当日は朝ご飯を食べないようにという医師の指示を受けた。

医師：「何も食べてませんよね？」

患者：「いえ？パンを食べてきました」

医師：「なぜ食べたのですか？食べないように言いましたよね？」

患者：「ご飯もパンもだめって言うてくれたらよかったのに！」

ウ まとめ

小学部生にとっては、具体的な場面設定やロールプレイは理解しやすく、取組み直後から実際に生活場面で実践するなどの変容が見られた。

中学部・高等部生は、基本的なあいさつやコミュニケーション方法を知ってはいるものの、生活の中で実践しようという意識が低く、日常生活の中で常に活用できている舎生も少ない現状にある。また、学年が上がるにつれて声を出してあいさつする舎生が少なくなり、女子においては顕著にみられる傾向である。

(3) 平成29年度の研究

ア わらい

前年度までの実践において、学部別にテーマ学習を行ったことで、それぞれの発達段階において必要なあいさつやコミュニケーションを学ぶことができた。

日常生活の中で、基本的なあいさつができる舎生が少ないという実態を受け、寄宿舎生活の中で舎生全員、職員も一緒に毎日習慣づけられるように声を出してあいさつする取り組みを実施することにした。

イ 実践

(ア) 食事のあいさつ

寄宿舎では、学部ごとに日課時間を設定しているため、一日の中で舎生全員がそろうのは夕食時だけである。唯一舎生全員がそろう場であることから、「こんばんは」のあいさつを声に出して行うことにした。

配膳の途中で離席している舎生や職員がいても当番の舎生が「いただきます」のあいさつをする様子を受けて、全員着席したのを確認してあいさつをする取り組みも併せて取り組むことにした。

食事のあいさつは、中学部・高等部生の当番活動の一つとして取り組んでいるため、まずは舎生会の役員に取り組みの意義や内容を説明し、役員が他の舎生への理解を促した。

(イ) 小学部生

学校生活に必要な集団行動やマナー、社会的スキルを分かりやすく自発的に学ぶことを目的として男女別に「テーマ学習」を実施した。

幼児や小学生を対象としたDVD『でーきた』を視聴し、「あいさつ」「へんじ」「すわる」「はなしのききかた」について学習した。

ウ まとめ

食事のあいさつに関する取り組みにおいては、当番の舎生が周囲をよく確認し全員が着席したのを確認してからあいさつをするようになった。全員が当番に注目するようになったため、自然とタイミングがそろい以前と比べて声を出してあいさつする舎生も増えた。

舎生自身も自分たちの変化に気付く一方で、声を出してあいさつすることに意味がないと感じていると答えた舎生もいた。

小学部生の取り組みにおいては、DVDを視聴することで具体的な方法を目で見て理解し、

日頃の自分を振り返り、できていない部分に自ら気づくことができた。また、少しずつではあるが実際の生活の中で実践できるようになった。

(4) 3年間のまとめ

中高生になると、次第に声を出さなくなる傾向は強く、友人同士のコミュニケーションを重視する傾向も年齢とともに強くなっていく。

そういった舎生の心情も踏まえ、尊重しつつ、一般的な社会の礼儀やマナーを自ら習得しようとする意識を高め、卒業後社会の中で他者と豊かに関わっていくためのコミュニケーション力を身につけられるよう、舎生と課題を共有しながら、それぞれの発達段階に応じて今後も支援していきたい。

6 成果と課題

舎生会活動・ミーティング・日常生活場面でのコミュニケーション力を育む研究を進めていく中でそれぞれの場面において、いろいろな成果や課題が見られた。

月例会においては役員の寄宿舎生が小学部にも理解しやすい進行の仕方を考え、工夫し説明を加え、理解しているか確認しながら行う様になった。

小学部はミーティングをとおして聞く態度や伝えることを文章にまとめて準備することなど少しずつ力がついてきている。

社会人生活の基本となる挨拶については、コミュニケーションツールとして非常に重要であるが、出来ていると感じている舎生の認識と寄宿舎指導員の計画にはまだまだ格差があり日常生活での定着が図られていない。

今後は、課題を職員間で共有し、事後指導を繰り返し行うことで定着を図りたい。

これらの取り組みを継続することにより「聞く力」「話す力」「書く力」の向上につなげ、豊かにコミュニケーションをとりながら自ら考え行動する姿勢を育てていきたい。

編集後記

「研究紀要 第18号」を発行する運びとなりました。

「確かな学力、コミュニケーション力定着のための授業づくり」という聴覚特別支援学校の命題について、この3年間学部・寄宿舍において日々研究・実践してきた教育活動の成果を集約いたしました。本県唯一の聾学校としての聴覚障害教育の中核的な役割を果たせるよう、研究を重ねてまいりましたが、本研究の成果を拡充させながら今後の教育活動の充実を図っていききたいと心を新たにしているところです。

この研究紀要第18号についての忌憚ない御意見、御助言などをお聞かせいただきましたら幸甚に存じます。

〈テーマ研修係〉

研究紀要 第18号

発行年月日 平成30年3月26日

発行者 鹿児島県立鹿児島聾学校
校長 本庄 美千代

発行所 鹿児島県立鹿児島聾学校
〒890-8686
鹿児島市下伊敷一丁目52番27号
電話 099-228-2200
FAX 099-228-2211

編集 鹿児島聾学校 テーマ研修係